

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007
報 告 書

2008年（平成20年）3月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンは今年で4回目を迎えました。第1回目は平成16（2004）年の秋に行われた「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」の場において先進的な町づくり活動の報告が行われ、認知症を知り地域をつくる国民的な運動の先駆けとなりました。

その後も本キャンペーンには毎年、日本各地で認知症になっても安心して暮らせる町づくり活動を続けておられる皆様からの御報告をお寄せいただきました。そしてこれらの事例を広く全国にお届けして学びあうことに努めてまいりました。

このたびの「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン」には各地から49に及ぶ活動報告が寄せられました。これらの活動を、堀田力委員長をはじめとする「地域活動推薦委員会」の皆様が検討してくださいました。そして各地域で町づくりの参考として推薦された8つの活動が「町づくり2007モデル」として報告されます。

いずれの活動の中にも認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための理念と実践が詰まっています。とくに今年のモデルでは、民間企業や学校も含めて多様な立場の方からその活動を報告していただくことになりました。このことは、認知症の人の尊厳を守り、その力を生かしてともに暮らしていくという現代社会の大切な課題が、単に医療・福祉関係者にかかわる事柄ではなく広く市民一人ひとりにかかわることであることを端的に示していると思います。

私たちができることから始めて日本全国のあらゆる地域が認知症になっても安心して暮らせる地域とするために、この発表会が今後の活動のための大きなステップとなることを期待しています。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007

実行委員長 長谷川 和夫

報告書の刊行にあたって

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」では、２００７年６月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、２００８年１月に「町づくり２００７モデル」を決定しました。

そして２００８年３月に「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり２００７モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただいて運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

２００８年３月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００７ 事務局

目 次

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告(発表会より) 3
2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括(発表会より) 4
3. 全応募者への応援メッセージ 5

II. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧 11
2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介 13
3. 「町づくり2007モデル」一覧 14
4. 「町づくり2007モデル」
 - 活動報告(1)「認知症になっても安心して暮らせるマンション」 15
中銀インテグレーション株式会社(東京都中央区)
 - 活動報告(2)「当たり前前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して」 23
社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家(高知県吾川郡いの町)
 - 活動報告(3)「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」 37
東京都立拝島高等学校(東京都昭島市)
 - 活動報告(4)「この町にこんな病院があったらいいな(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)」 50
財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)(滋賀県犬上郡豊郷町)
 - 活動報告(5)「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！」
認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』 64
あしがらシニアキャンプ実行委員会(神奈川県南足柄市・足柄上郡5町)／
社団法人 日本キャンプ協会(東京都渋谷区)
 - 活動報告(6)「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」 78
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部(富山県富山市)
 - 活動報告(7)「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」 86
社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや(東京都町田市)
 - 活動報告(8)「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」 98
NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク(岐阜県高山市)
5. 各地域活動概要 110

III. 資料編

1. 実施要領 153
2. 推薦基準 157
3. 発表会について 158
- 附:活動経過 161

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告 (発表会より)



「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007の表彰にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。ただいま、第1部で認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議を中心とした会がございまして、素晴らしいシンポジウムをしていただきました。ありがとうございます。

また、本日は多くの方にお集まりいただきましたことに、心から感謝申し上げます。

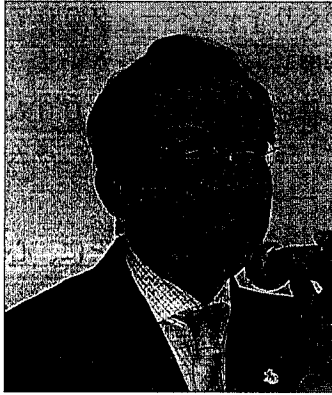
町づくりキャンペーンも今年は4回目でございますが、49の地域からの活動報告がございまして、その中の8つの団体の方々が推薦され、表彰されます。しかし、これは優劣を競うという推薦ではございません。先駆的であり、活動を継続しておられるご努力に対して地域活動のモデルとして推薦申し上げるということです。

応募された全応募者のレポートは報告書に掲載され、ホームページでも紹介されます。本日はこれからそれぞれの方のご報告が行われます。認知症になっても安心して暮らせる町づくりのご報告を貴重にうけとめたいと思います。

認知症の問題はひとにぎりの専門家とか、ある施設の仕事というよりも、市民一人ひとりが自分のこととして考えていくことが重要です。認知症になっても尊厳を保持して生きていくことを支える、しかも地域全体で支えるという仕組みをつくっていくことが必要なのです。こうした認知症への対応の流れというのは、すでにとめることができない大きな流れとなっていると思います。そのことを今日も身にしみて感じました。

ぜひ最後までご報告をお聞きいただきたいと思います。本日は本当にありがとうございます。

2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括 (発表会より)



みなさん、お疲れ様でした。

長い時間でしたが、みなさまの本当に温かいお心が感じられて、
素晴らしい会になったと思います。

本日の発表では、素晴らしい町づくりモデルの活動報告が8つ
続きましたので、これだけ聴きますと日本はもう認知症はだいじ
ょうぶではないかと思ってしまうのですが、これはまだまだ全国的
にも稀な素晴らしい活動を拾い出したわけでございます。

これをすべての地域に広げていかないと、みんなが安心できるところまでまいりません。どうぞ
これからもがんばってみんなで広げていきたいと思えますし、また、その素晴らしいモデルをきち
んとまとめて発表いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

第1部（第4回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議）では、佐藤さんある
いはサポートされている加藤さんの方から、認知症といっても一人ひとり違うんだと、そのとこ
ろをわかってほしいという大変熱いメッセージがありました。そのとおりだと思います。

第2部（「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007発表会）のおりづる工務店
の発表では、実際に働いてくださる認知症の方にあわせて、働き方を考えるという、ご本人中心の
考え方の話をいただきました。きちんと認知症を支える活動をみんなでやっていくということは、
今の子どもたちを生き生きとさせることにもつながっていくのではないかと思います。つまり、一
人ひとり子どもたちの力を活かしていくということです。また、すべての働いておられる方につい
ても、働かせる側の都合だけではなく、働いておられる方にあった働き方を考えだしていかなけれ
ばならないのではないかと考えさせられました。

つまり、認知症の方々をしっかり支えるということは、認知症の方を支えるだけではなく、さら
には子どもから働いている人みんなを含めてそれぞれの人が、もっと幸せに、その人らしく学び、
働くことを支えることにつながるのだと思います。このことが今日の発表のメッセージでしっかり
伝わったと思います。「認知症になっても安心して暮らせる」社会をつくっていく活動は、もっと
全員がしあわせになる社会をつくるという、先端の支え合い事業であるのです。これをしっかり受
けとめて、みんなでとりくんでいきたいと思えます。

本当に長時間、ありがとうございました。

3. 全応募者への応援メッセージ

(地域活動推薦委員より、五十音順)

■このキャンペーンを始めてまだ4年だというのに、認知症に対する理解の進み方は目を見張るものがある。(今回入選を逸したが) 三菱UFJ信託銀行は全店に2,300人のサポーターを養成したし、中銀インテグレーションは、マンションの管理人の多くに講座を受講させ、昭島市の拝島高等学校は、総合的な学習の時間でしっかり認知症を学習した。そして、先駆的な施設やグループホーム、病院などが、本人を地域に積極的に連れ出すなど、本人と地域との交流を深める活動も広がりがつある。

このような活動により、世間の誤解が急速に解消し、(1)認知症は隠すような恥ずべき症状ではなく、誰にでも起きうるものであること、(2)本人は自覚があつて不安なこと、(3)周囲が支えれば、本人は、その残存能力を生かし、人間的に生きられること、などが認識された。そして、この認識が広がるにつれ、市民の間に、認知症の人たちにも普通の暮らしができるよう支えたいという気持ちが生まれ、それが、さまざまな地域のサポート活動を生み出しているといえよう。

まさに、認知症を知ることが、人々の共助の活動の原動力になっているのである。

活動者は、あたたかく、誰もが暮らしやすい社会の開拓者である。熱いエールをお送りする。

<堀田 力/財団法人 さわやか福祉財団 理事長・弁護士>

■「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンに応募して下さった皆さん、本当にありがとうございました。

今の認知症の方々は私の明日の姿だと思っています。皆でご本人に聞きながら、認知症を知り、支えていければと、私も皆さんと共に願っています。

認知症の方は、なかなかご自身で介護サービスや支援制度等を理解し使うことは困難です。また支援そのものも、十分とは言えません。今後もご本人を真ん中にして、最初は点であっても面になり、そして日本中に支援が広がるように一緒にがんばっていきましょう。これからもますます皆さんの活動が広がりますように。私も皆さんから力をいただきました。のんびりでもじっくり取り組んでいきましょう。

<池田 恵利子/いけだ後見支援ネット 代表>

■ご応募下さった多くの仲間に心から拍手を贈ります。

170万人の認知症のご本人とその家族、今後ますます増加する認知症の人と家族を支えるための試みが展開されていることに感謝します。

特に若年認知症の人とその家族にとって、ともすれば孤立無援の中で、経済的な問題をはじめ、多くの困難の中で、介護者の多くは「うつ」状態になっている。その場合、本人にとってもその環境はよくない結果につながる。そんな本人と家族が共につどい、地域の中で暮らしていくには、様々な取り組みが必要となる。町ぐるみ、地域ぐるみであったり、小さな会の活動であっても、行政を含めた取り組みもとても貴重なことである。このような取り組みこそ、今後ますます求められる。勿論、多くのご高齢の認知症の本人も家族もまたしかりである。

「ひとりの人間として尊重される」「何もできない人でなく、多くのやれることを持った人」として地域の中でも、特に専門職の人にも知ってもらいたい。その力を引き出すことこそ専門職の力量であろう。地域で、職場で、在宅で、どこにいても「普通の暮らしができること」それを支えるためのキャンペーン活動、オレンジリングの輪が広く、大きく日本中にそして世界に広がることを期待したい！その一員として、今年も励みたい！共に励みましょう！！

<勝田 登志子／社団法人 認知症の人と家族の会 副代表理事>

■近年、広がりを見せているユニバーサルデザインとは、誰でもが安心して暮らせる物理的・社会的・心理的なまちづくりですが、その中で認知症の問題は、国内外を通じてまだまだ遅れています。個人にはじまり、大企業にまで、認知症の人が安心できるまちづくりの取り組みが広がっていることは、日本が世界にほこれるすばらしいことだと思います。

また、世の中元気が無いと言われる中、毎年応募される方々のアイディアの豊かさや取り組む方々の熱い心に感動いたします。

<児玉 桂子／日本社会事業大学 教授>

■多様な事例を拝読し、各地の実践がこれほどまでにゆたかに、さまざまな形で行われていることに、心を打たれました。

とりわけ、心に残ったのは「おりづる工務店」と「認知症と地域について考える学校授業」の二つです。両者とも応募者方が、是が非でも皆に伝えたいという情熱をもっておられることが心に残りました。

<辰濃 和男／日本エッセイスト・クラブ 理事長>

■認知症であることだけを理由に、住み慣れた地域の中で差別的な扱いを受けることは決して許されないことであり、そのためには、この活動をより広く地域住民に理解してもらうことが一番の近道と感じました。

そんな中で、今回応募された皆様の全ての内容に共通することは、地域の担う役割の重要性が根底に流れている事ではないかと思います。

特別な活動をするのではなく、地域があるべき姿で地域の持つ本来の機能を果たすことが、最も有効な認知症対策であると感じさせられました。

今、求められているのは地域愛を原動力として、自らが気づき行動することなのだと改めて痛感した次第であり、これらの活動が地域に根付くことを大いに期待申し上げます。

＜入村 明／新潟県妙高市 市長＞

■今回も、いずれ劣らぬ実践が勢揃いした。認知症への理解と支えがまだまだ十分とは言えないこの国にあって、「ここまでやれるんだ」「こんな方法もあるんだ」、こんな印象を受けた。応募事例に共通していたのは、当事者一人ひとりのニーズに向き合っていることはもちろんであるが、質の高い自主性を強く感じさせられた。企業からの応募を含めて、実施主体にひろがりが見られたことも今回の特徴の一つと言えよう。「模倣は創造への一歩」と言われるが、それぞれの地域の特性や条件を活かすことを前提に、どんどん模倣してほしいものだ。願わくは、応募事例がもっとほしい。実際にも、全国に紹介したい事例は少なくなく、積極的な応募を期待したい。

＜藤井 克徳／きょうされん 代表＞

■うつ病についてもそうだが、認知症に対する理解は北欧等の先進地と較べれば日本は20年も遅れているのではないかと。有吉佐和子の「恍惚の人」が出たのはもう40年近く前になるが、その間困った、恐ろしい、不幸だと言っているだけで個人の世界に閉じ込め、社会は就中政府、地方自治体は手を拱いていたばかりであった。かく言う私自身も村長という身になるまでは昔の「呆け老人」程度の知識と理解でしかなかった。

今回身の程知らずに「地域活動推薦委員」に名を連ねさせられて『「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007』の応募作品をみて、日本の認知症ケアの急速な進歩を知ることが出来、驚いている。

何れの活動も平成になってから始められたものであるが、僅か数年でデンマークに勝るとも劣らぬ活動をなさっている。医療の現場から総合的な地域連携システムを構築している豊郷病院老人性認知症センターでさえ平成7年のスタートである。

そう考えると日本の認知症対応の将来は明るい。しかしそれも応募された諸団体の関係者の不断の献身があつてのことと思う。われわれも後に続きますから、更に前進を続けて下さい。

＜村上 達也／茨城県東海村 村長＞

■「格差」という言葉が時代のキーワードとしてクローズアップされていますが、認知症への取り組みも、各自治体によって相当の温度差がありますね。例えば認知症サポーターの養成一つとっても、サポーターやキャラバン・メイトが一人もいない所から、人口の1割はサポーターという所まで、実に様々です。でも一方で、認知症であってもこんなに明るく生き生きと暮らすことができるのかという取り組みに出会うことも多くなってきました。

地域の人たちが「特別視」することなく、ごく自然に、さり気ない対応をしていることも、よく見かけるようになりました。点としての試みが、少し、線として繋がってきたかなという所でしょうか。認知症の人とその家族の暮らしにくさが少しでも軽くなるよう、さらに地道に活動が続けましょう。日本全国、面としての拡がりになることを願って。

＜村田 幸子／福祉ジャーナリスト＞

■「天生我才 必有用」 李白

天が私を生んでくれた以上、私は必ずや世の中の何らかの役に立つ為にある

一見コストにしかみえない人たちを支えるのは社会の使命である。そうした人たちを支えることは、社会を保つために必要なコストとして考えるべきもの。むしろそういった人たちがいて、はじめて全員が生きてゆける社会となる。

これは最近読んだ本の一節にあったような気がします、このキャンペーンで認知症の方を理解し支援してゆくまちづくり人づくりをさまざまな方法で取り組んでおられその努力に頭がさがります。

応募者のみなさんの提案は、認知症の方の暮らしのペースに私たちがあわせてゆく、急ぎ足できたことによる社会のひずみを少しでもへらすために、私たちが今の価値観を変えて認知症の方を異常とみない世の中に変えてゆくことが大事だよと教えていただいた気がします。

＜吉田 一平／ゴジカラ村 代表＞

Ⅱ.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ

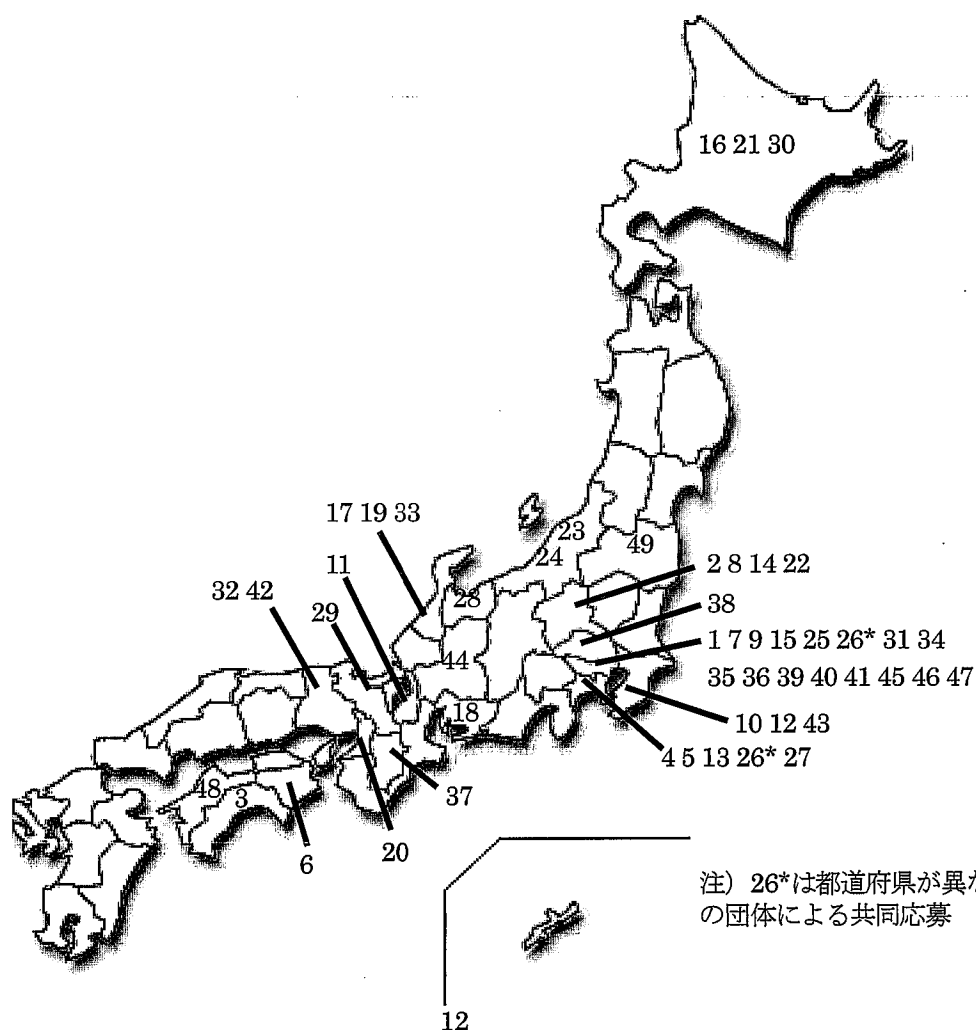
全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧

(応募先着順)

No.	活動名称	応募者名称	掲載頁
1	認知症になっても安心して暮らせるマンション	中銀インテグレーション(株)	15
2	地域の人達と共に健康体操教室に参加	総合ケアセンター榛名荘内 グループホーム榛名荘	110
3	当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して	(社福)ふるさと会 グループホーム福寿の家	23
4	「認知症を知るための取組」	NPO 法人 福祉振興会	111
5	地域で支えよう認知症	にこにこクラブ	112
6	生涯学習町づくり回想法	コスモスの会・校舎の無い学校	113
7	教科 奉仕「認知症と地域について考える」授業	東京都立拝島高等学校	37
8	認知症の傾聴ボランティア	シニア・傾聴ボランティア	114
9	ねたきり、認知症の方をかかえる家族の会	小平 わかばの会	115
10	認知症メモリウォーク・千葉	認知症メモリウォーク・千葉実行委員会	116
11	この町にこんな病院があったらいいな(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)	(財)豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)	50
12	古民家を拠点になじみの空間を大切に、認知症の方もそうでない方も、地域の誰もが寄りあえる場所づくりを	NPO 法人 こだま	117
13	独居老人の認知症を支えあう地域と地域包括支援センターのかかわり	小田原市第五地区地域包括支援センター	118
14	沼田市認知症にやさしい地域づくりネットワーク	医療法人 大誠会 内田病院	119
15	もりたや project	(社福)桜灯会 グループホームさくらの家 東矢口	120
16	認知症フレンドシップクラブ	認知症フレンドシップクラブ	121
17	認知症及び認知症予防の啓発活動	いちご会	122
18	住み慣れた町での生活の継続	(社福)恩賜財団愛知県同胞援護会 グループホーム春緑苑	123
19	能美市学官連携プロジェクト	共生ケア研究グループ	124
20	認知症の要介護者の介護に大きな力を発揮する「えがおの会」	阿倍野介護家族の会・えがおの会	125
21	“ひなたぼっこ(INA)い～なあー”	介護支援専門員	126
22	多職種で認知症ケア研究を推進する「ぐんま認知症アカデミー」の取り組み	ぐんま認知症アカデミー	127
23	介護事業者による「地域の『人』づくり『場』づくり」の試み	(株)てるてるぼうず	128
24	利用者とスタッフとの協働による地域との交流	グループホーム 七福神	129
25	離れて暮らす親のケアを考える会	NPO 法人 パオッコ	130
26	おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！認知症高齢者と楽しむ「あしがらシニアキャンプ」	あしがらシニアキャンプ 実行委員会/ (社)日本キャンプ協会	64
27	認知症を学び地域で支え合う・なじみのふるさとづくり-寄り添い人の養成、訪問、世代間交流のお誘い-	開成町社会福祉協議会 なじみのふるさとづくり研究会	131
28	認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修	(社)認知症の人と家族の会 富山県支部	78
29	長岡京の温もりの通い合う街づくりに向けて～やすらぎ支援員のネットワークの役割～	長岡京市 やすらぎ支援員	132
30	「積小為大」～小さな有限会社の足下から認知症の人の“力”を発信していこう～	(有)エーデルワイス	133
31	「成年後見推進ネットこれから」の活動	NPO 法人 成年後見推進ネットこれから	134
32	まちなかのきらくえん -認知症の人の「市民的自由」の尊重	(社福)きらくえん	135
33	地域人として生きる -誰もができることを通してつながる-	NPO 法人 志ネット・石川	136
34	グループホーム入所者による公園清掃活動	(社福)浴風会 グループホームひまわり	137
35	高齢者が安心してご利用いただける店舗を目指して	三菱UFJ信託銀行(株)	138

36	認知症の人を支える地域医療の経験と課題 ～在宅支援診療所から～	医療法人社団つくし会 新田クリニック	139
37	毎日の生活を地域のなかで 地域の輪そしてひろがり…	(株)ひまわりの会 ぼれぼれグループ	140
38	一粒の麦 (傾聴ボランティアにおける愛の見守り)	草加市認知症高齢者家族 やすらぎ支援事業 やすらぎ支援員 矢管健司	141
39	地域と施設で暮らす交流の場	憩いの場「優しい時間」	142
40	グループホームと商店街の交流からはじまった「認知症でもだいじょうぶ」の町づくり	グループホーム えがおの家	143
41	若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み	(社福)町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや	86
42	グループホームいろいろの取り組み	(有)KYT グループホームいろいろ	144
43	認知症ケアのネットワークづくり(佐倉市西南部編)	認知症ケアネットワーク CB	145
44	地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動	NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク	98
45	「認知症の人から町の人へのメッセージ」	町田市グループホーム連絡会	146
46	～中庭をつかって～ 地域と共につくる認知症の人の環境づくり	医療法人社団芙蓉会ふよう病院 グループホームあおぞら	147
47	「デイホームにんじん・家族の会」～認知症の方と家族の方々の集い～	(社福)にんじんの会「家族の会」	148
48	認知症になっても、障害をもっても地域でいきいきと暮らせる為に ～小さな田舎町(愛南町)での取り組み～	愛南町・なんぐん地域ケア研究会・南宇和郡医師会・ 認知症の人と家族の会愛媛県支部(南予地区)・認 知症キャラバンメイト・愛南町ボランティア連絡会・南 宇和心の健康を考える会・南宇和障害者の社会参 加を進める会	149
49	～認知症を囲む新たな地域コミュニティゾーンの構築を目指して～	(社福)ライフ・タイム・福島グループホームフクチャ ンチ	150



注) 26*は都道府県が異なる2つの団体による共同応募

2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介

町づくりのさまざまな取り組みがご覧いただけます。

URL <http://www.dcnnet.gr.jp/campaign/>

または「町づくりキャンペーン」で検索してください

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン

～あなたの町の知恵や工夫を伝えてください～

認知症の人が町で暮らす
あなたの町の取り組みを
ご応募ください

主催：社会福祉法人海陽会、認知症介護研究・研修東京センター
社会福祉法人と全学、認知症介護研究・研修大阪センター
公益財団法人長之福祉会、認知症介護研究・研修仙台センター
共催：社団法人、認知症の人と家族の会
協賛：住友生命保険相互会社

TOP
キャンペーンについて
応募のお願い
認知症の人の声
実施要領
応募用紙

過去のキャンペーン
2004年度
2005年度
2006年度

過去の応募一覧

応募用紙をダウンロード
100人全員

(リニューアル中。平成20年6月更新予定)

過去の応募一覧

過去に応募いただいた活動をご紹介します(受賞した活動を含む)。

年度別ダウンロード(概要資料のみ)

- 2004年度 1.1MB
- 2005年度 1.2MB
- 2006年度 740KB

条件別ダウンロード(概要資料のみ)

- 都道府県 都道府県ごとの概要資料がご覧いただけます。
- 取組主体 現在、準備をしております。もうしばらくお待ちください。

詳細資料ダウンロード

- 過去のキャンペーンで受賞した活動事例 受賞した活動事例がご覧いただけます。

過去の応募一覧

都道府県

都道府県ごとの概要資料がご覧いただけます(都道府県名をクリックしてください)

これまでに報告を寄せていただいた一覧

北海道 青森県 岩手県
秋田県 山形県 福島県
栃木県 群馬県 埼玉県
東京都 神奈川県 新潟県
石川県 福井県 山梨県
岐阜県 静岡県 愛知県
滋賀県 京都府 大阪府
奈良県 和歌山県 鳥取県
岡山県 広島県 山口県
香川県 愛媛県 高知県
佐賀県 長崎県 熊本県
宮崎県 鹿児島県 沖縄県

※今年度から始まった「認知症地域支援体制構築等推進事業」の全国の担当部署へ本資料を提供させていただきました。

3.「町づくり2007モデル」一覧

(応募先着順)

- ①「認知症になっても安心して暮らせるマンション」
中銀インテグレーション株式会社(東京都中央区)
- ②「当たり前権利である地域行事・老人会への参加を目指して」
社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家(高知県吾川郡いの町)
- ③「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」
東京都立拝島高等学校(東京都昭島市)
- ④「この町にこんな病院があったらいいな
(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)」
財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)(滋賀県犬上郡豊郷町)
- ⑤「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！
認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』」
あしがらシニアキャンプ実行委員会(神奈川県南足柄市・足柄上郡5町)／
社団法人 日本キャンプ協会(東京都渋谷区)
- ⑥「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部(富山県富山市)
- ⑦「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」
社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや(東京都町田市)
- ⑧「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」
NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク(岐阜県高山市)

4. 町づくり2007モデル
活動報告(1)

活動名称	認知症になっても安心して暮らせるマンション
活動要旨	所属する業界団体の認知症サポーター講座をきっかけに社内で講座を実施。ゴミ分別方法が一目でわかるイラストを作成し、マンション管理員が地域包括支援センター職員と顔合わせして住人との連絡役となるなど、できることから実践
応募者	中銀インテグレーション株式会社 久保田 雅子
連絡先	〒104-0061 東京都中央区銀座 8-16-10

1) 推薦理由

- ・ 管理員が認知症を理解し、細やかな工夫をすることで、マンション内で認知症の人たちの暮らしやすさに向けた支えが生まれている。今後全国的に、マンション暮らしの認知症の人が増えていくことが考えられ、先駆的で重要な取り組み。
- ・ 日常生活の場であるマンションが安心して住める場になることはとても大切で、こういう取り組みがもっと広がって欲しい。管理員を置く全国の共同住宅の経営者に取組んでもらいたい活動のモデルである。
- ・ マンション管理員とともに、住人自身の理解と支えあい広がっていくことが大切であり、この活動が継続的に発展していくことが期待される。
- ・ マンションにとどまらず、この取り組みを参考に、スーパーや商店街など町の様々な生活領域で、その担い手が率先して動き出す活動が広がってほしい。
- ・ 認知症の方々が暮らしやすい場やコミュニティづくりは、子どもやその親たちにとっても住みやすい社会であると改めて考えさせてくれる活動である。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

「認知症」と「管理会社」？！

■ (社)高層住宅管理業協会での講習を受講
講師の先生の言葉
「認知症は誰にでも起こりうる病気」
「認知症の方自身に自覚がある」

↓

無意識のうちに
間違った対応をしていないか？

1

**今 私達のマンションで
起こっている事・起こる可能性がある**

- ① ゴミの分別が出来ない
- ② 自分の部屋がわからない
- ③ 突然大声を出して叫ぶ
- ④ 管理員に電話をして買い物を頼む
- ⑤ 漏水・火災の要因の発生
- ⑥ 遠方に住んでいる身内の連絡先がわからない
- ⑦ 高齢者の独居の増加
- ⑧ 管理員・フロントマン・組合員の知識不足

2

私達「管理会社」に出来ること

お金ではなく「心」をつかった対応を
管理会社が実行し組合にも理解を広める

対応例

- ① 相手が叱責されたと感じず対応をしない
- ② ゴミの分別等の張り紙は絵で表示
- ③ 結論は先、説明は後
- ④ ゆっくり話す、優しく話す 笑顔で話す
- ⑤ 支援センターの連絡先を管理室に表示

3

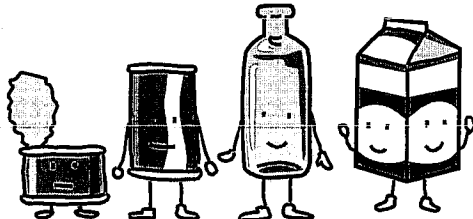
「認知症を理解する講習」を開催

- 管理物件の管理員・フロントマン・社員
(約 100 名)を対象



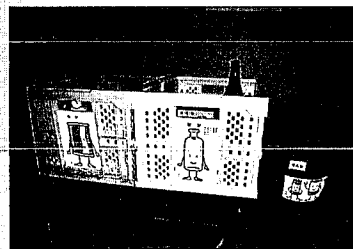
一目でわかるイラストを作成

- 小さな子供から高齢者までわかるイラスト



5

現地マンションのゴミ置場



6

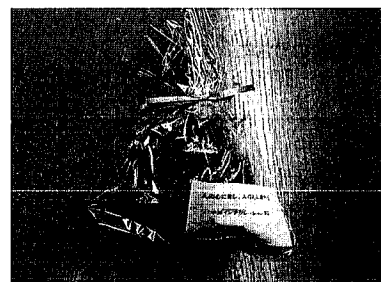
負担にならずにできる事の実践

- 管理マンションの「地域包括支援センター」
一覧を管理室・掲示板に掲示
 - 地元の地域包括支援センターに管理員が顔合わせ
 - 住民からの相談があった場合は支援センターの連絡先を伝える。



7

すべては人の心に発し、
人の心に終わる



8

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

<活動のきっかけ>

平成18年7月4日に開催された、社団法人 高層住宅管理業協会による「マンション管理適正化法に基づく法人研修」の中で、認知症の講習（認知症サポーター講座）が行われた。「何故、管理会社が認知症講習？」という疑問から、先生の言葉の中の「他人事ではなく誰にでも起こりうる病気」「認知症の方には自覚があり、誰にも相談出来ない悲しみがある」「自分の一部がなくなっていく病気」に衝撃を受ける。

受講後、先生と名刺を交換し帰社後すぐに企画書を提出。会社への呼びかけのきっかけとなった。

<活動の内容>

■「認知症を理解する講習」の開催

平成18年9月 第一回の講習会（認知症サポーター講座）を実施

管理物件（マンション）の管理員、フロントマン、社員など約100名を対象

平成19年5月 第二回の講習会（認知症サポーター講座）を実施

■認知症の方への配慮

・ゴミ分別をわかりやすくするため、一目でわかるイラストを作成

ー認知症の方だけではなく小さなお子様でもわかるようにゴミ置場に数種類のイラストシールを貼った。今までゴミの分別についてトラブルがあったが、イラストにより管理員からは注意をして気まづくなる場面が減り、ストレスが軽減されたと予想外の効果あり。

■負担にならずに出来る事の実践

・管理マンションの「地域包括支援センター」一覧を管理室・掲示板に掲示

ー地元の地域包括支援センターと管理員が顔合わせ。住民からの相談があった場合は支援センターの連絡先を伝える。

<成果と今後の展望>

- ・今後も講習会（認知症サポーター講座）を1年に1回の実施予定（管理員交代に対処）
- ・認知症サポーターになった社員の中で、自主的にオレンジリングをつけている人が増加

認知症サポーターの証、オレンジリングには「すべては人の心に発し、人の心に終わる」ー先代の創始者 渡辺 酉蔵社長（平成3年10月、70歳で死去）の名言の一つーをオレンジの文字でプリントシールにして貼りつけラッピングをして配布。

「認知症」の方だけではなく、どのような方に対しても心からの行いをする事で、道はつながるはず。やり方は一通りではなく、一人一人考え方が異なるようにたくさんのやり方がある事が素晴らしい事。各自の負担のないやり方が長続き出来るのではないかな。

2. 地域の紹介

弊社は下記のような営業エリアをもっており、一つの地域のみでの活動ではないため、下記の「営業エリア一覧」をもって「地域の紹介」とする。これらの地域で、認知症の方が住みなれた家で安心して暮らしていけるためのお手伝いとなる取り組みを行っている。

(営業エリア一覧)

中銀の管理マンション

東京都23区を主に、その他神奈川県、多摩区、埼玉県にて約100物件において活動中。

3. 活動の内容

■活動のきっかけ

平成18年7月4日に開催された、社団法人 高層住宅管理業協会による「マンション管理適正化法に基づく法人研修」の中で、認知症の講習（認知症サポーター講座）が行われた。「何故、管理会社が認知症講習？」という疑問から、先生の言葉の中の「他人事ではなく誰にでも起こりうる病気」「認知症の方には自覚があり、誰にも相談出来ない悲しみがある。」「自分の一部がなくなっていく病気」に衝撃を受ける。

今まで、認知症の知識がなかった為、傷つける言葉を発しているのではないかと、管理員からの苦情の中で、後回しにしている事がないか不安になる。早く講習を受けなければならないと思い、受講後すぐ先生の後を追ひ、失礼ながらエレベーターの中で名刺交換、帰社後すぐに企画書の提出。会社への呼びかけのきっかけとなった。

■今、私達のマンションで起きている事・起こる可能性がある事

認知症の方を含む高齢者の増加でマンションの現場で起きているさまざまな問題

① ゴミの分別が出来ない

※ゴミの分別がきちんと出来なかったり、曜日を間違え、管理員が叱責してしまうケース。

② 自分の部屋がわからない

③ 突然大声を出して叫ぶ

※上記二つは、階下からの苦情が出て、実際にフロントマンが自宅を訪ね、怒らせてしまうケース。

④ 管理員に電話をして買い物頼む

※高齢化が進んだマンション、地域によっては管理員を自分の使用人と思い込むケース。

単身住込の女性管理員が巻き込まれるケースが多く、最初に手伝ってしまうと要求が増し、断ると嫌がらせがエスカレートし、管理員が精神的に追い込まれたケース。又、認知症の方には手伝えて、どうして高齢者の私の荷物は持てないのかという場面も起きている。

⑤ 漏水・火災の要因の発生

⑥ 遠方に住んでいる身内の連絡先がわからない

⑦ 高齢者の独居の増加

⑧ 管理員・フロントマン・組合員の知識不足

■「認知症を理解する講習」の開催

第一回「認知症を理解する講習」を、地域ケア政策ネットワーク事務局長 菅原弘子様を講師に、平成18年9月25日に実施。この講習は、認知症サポーター講座として行われ、受講者には認知症サポーターの証である「オレンジリング」が配られた。

管理員・フロントマン全員が集中して聞いていた。メモを熱心に取り組む姿も見られ、もっと早く受講したかったという意見も出た。



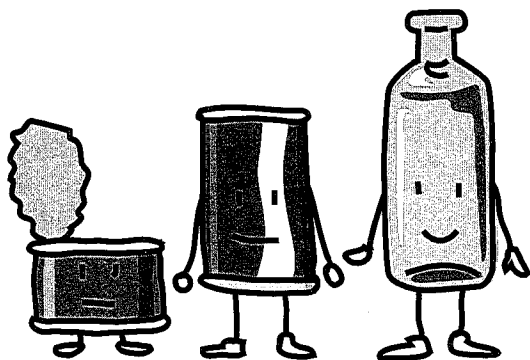
管理物件の管理員・フロントマン・社員（約100名）を対象

第二回の講習会（認知症サポーター講座）を平成19年5月にも開催。4月より入社の新入社員が主に受講。社員の中でもオレンジリングをはめる者が増えてきたが、強制はしていない。

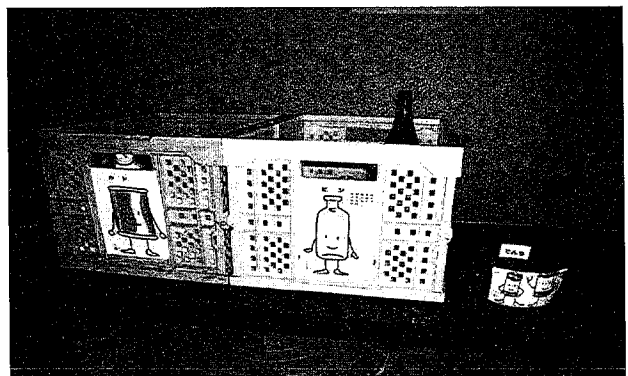
管理員交代もあるので、1年に1回のペースで認知症サポーター講習を行なう予定。

■認知症の方への配慮

- ・ゴミ分別をわかりやすくするため、一目でわかるイラストを作成



認知症の方だけではなく
小さなお子様でもわかるように



現場マンション ゴミ置場の使用例
ゴミ置場が明るい雰囲気

今まではゴミの分別がわからない等で管理員が仕分けに苦勞したり、叱責してしまう等の問題があった。これに対処するため、認知症の方だけではなく小さなお子様でもわかるように数種類のイラストを作成し、ゴミ置場に貼った。

イラストはデジタルクリエイターのヒラヤマ ユウジ氏にお願いし、何度も検討を重ね、優しいタッチで作成。

管理員やお客様からもゴミ置場が明るくなり、分別して出してくれる方も増えたようだとの声を頂く。又、管理員から、注意をして気まづくなる場面が減り、ストレスが軽減されたと予想外の効果もあった。

■負担にならずにできる事の実践

- ・管理マンションの「地域包括支援センター」一覧を管理室・掲示板に掲示

地域包括支援センターは多数あり名称もさまざまである。各管理員にマンションを管轄している地域包括支援センターに出向き担当者と顔合わせをしてもらい、中銀インテグレーション(株)の管理物件の「地域包括支援センター一覧表」を作成。一覧表は管理室・掲示板に掲示している。

実際にいくつかのマンションで高齢者の方の不安や相談事が管理員にあり、地域包括支援センターの連絡先を伝えた事により大変喜ばれた報告を受けた。

苦しいこと、ストレスになる事は長続きはしない。管理員には常にフロントマンと連携をとり、プライバシーに係わることに踏み込まないよう指示。

管理員・フロントマンは「ケアスタッフ」でないため、あるレベル以上は行政に任せる事で負担もなく、日常業務にも支障は出ていない。

■私達「管理会社」に出来ること一対応の基本

お金ではなく「心」をつかった対応を管理会社が実行し組合にも理解を広める

一建物のバリアフリーではなく「心」のバリアフリーも同時進行

・対応の基本

- ① 相手が叱責されたと感ずる対応をしない
- ② ゴミの分別等の張り紙は絵で表示
- ③ 結論は先、説明は後
- ④ ゆっくり話す、優しく話す
- ⑤ 支援センターの連絡先を管理室に表示

※ 参考資料を添付

4. 活動の成果と今後の展望

- ・今後も講習会（認知症サポーター講座）を1年に1回の実施予定（管理員交代に対処）
- ・認知症サポーターになった社員の中で、自主的にオレンジリングをつけている人が増加

研修後、お金では決して買えないオレンジリングを手渡した。テキストと一緒に袋に入れてオレンジリングを忘れてしまわないようお菓子を添えて、オレンジのリボンでラッピングした。

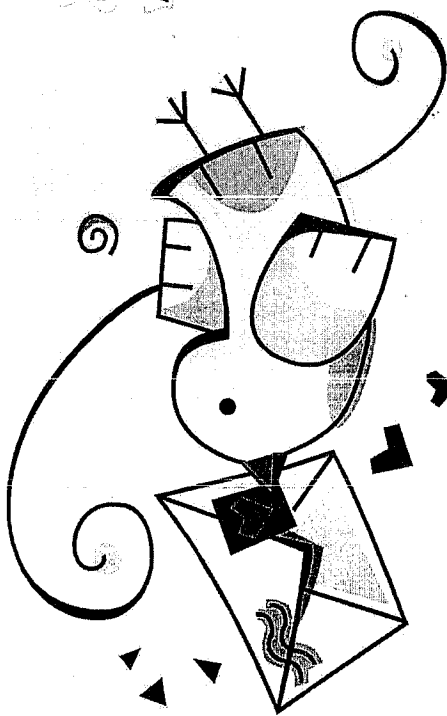
「すべては人の心に発し、人の心に終わる」。これは、先代の創始者 渡辺 酉蔵社長（平成3年10月、70歳で死去）の名言の一つだが、心からの行いをしなければ本当の事は伝わらないと言われている気したので、この言葉をオレンジの文字でプリントシールにしてラッピングに貼った。

この活動は、現在の社長 渡辺 蔵人（子息）が賛同し、会社を挙げての取り組みが始まった。「認知症」の方だけではなく、どのような方に対しても心からの行いをする事で、道はつながるはずである。やり方は一通りではなく、一人一人考え方が異なるようにたくさんのやり方がある事が素晴らしい事。各自の負担のないやり方が長続き出来るのではないかと考える。



「すべては人の心に発し、人の心に終わる」

地域包括支援センター一覧表



中銀インテグレーション株式会社

～人の心に始まり人の心が終わる～

活動報告(2)

活動名称	当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して
活動要旨	観光温泉施設を改装して建てられ、山間部にあるため地域とのつながりが弱かったが、入居者と職員による小学校の運動会への参加をきっかけに地域との結びつきが深まる。グループホームが認知症の人の理解と支援を地域で進める拠点になりつつある
応募者	社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家 高橋 須美
連絡先	〒781-2142 高知県吾川郡いの町中追 2361

1) 推薦理由

- ・ 町の中心から離れた土地に建てられたグループホームや施設が少ない現状で、その利用者が孤立しないで地域とつながって暮らし続けられるよう支援することが全国的に大きな課題になっている。このホームは不利な立地条件の中でも地域交流の試行錯誤を積み重ね、地元の人々との確かなつながりを築いており、その経緯を他地域でもぜひ参考にして欲しい。
- ・ 交流にとどまらず、過疎化が進む地元の課題解決にむけて、町の介護予防事業や認知症サポーター養成、移送サービスなどに積極的に取り組み、地域にとってもかけがいのない場として定着してきている点は、過疎地域での共に支えあう町づくりのモデル。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

「当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して」

(活動名称)

活動要旨

当たり前の権利である社会参加と地域住民と施設入居者・職員との交流

社会福祉法人ふるさと会 中追の里

高知県吾川郡いの町 中追2361

グループホーム福寿の家 応募者 高橋須美

発表者 山崎謙洋

パワーポイント作成 小野明秀

今回の発表に使用した画像について法人様よりご同意を事前にいただきました。

■ 平成14年8月「グループホーム福寿の家」開設

■ 開設当初「姥捨て山」との風評もあった

■ 入居者に地域住民がいないこともあり、地域に受け入れてもらえる状況とは言えなかった

■ 年2回の祭りを主催することで交流を模索

■ しかし地元住民の参加は少なかった

高知県のいの町の山間部に建つ、渓谷に囲まれ、観光温泉地として来えたが斜陽にともない6年前現在の福祉施設に改修される。

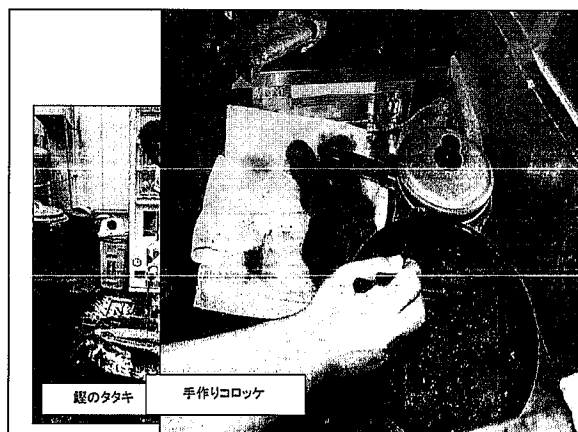
2

23



平成18年度「運営推進会議」発足

祭りの時の送迎車を出す憩室を設ける等の具体的な
取り組みを提案
地域住民の参加が増えてくる



縄のタタキ

手作りコロッケ

きっかけは..運動会



やがてそれは「グラウンドゴルフ」「体操教室」「認知症 サポーター養成講座」
へと交流が深まっていた

体操教室



「福寿の家」が目指すもの

地域密着型サービス事業所の利点を活かすことで行政では担いきれない
部分の手助け、またその現状を伝え、地域の情報源となっていきたい

- ・今後も地域交流の実践を対外的に発表していくことでケアや地域交流の実践を
検証する機会とし、常に進化するケアを目指したい
- ・今回の受賞を地域住民の皆様へ報告した時、拍手の輪が広がり、「わしらも
行きたいのう(授賞式)」と協賛の言葉を

ご清聴ありがとうございました

グループホーム福寿の家

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

平成14年の8月「グループホーム福寿の家」を開設した。開設当初「姥捨て山」との風評も、聞こえてくる。入居者の中に地域住民がいないこともあり、地域に受け入れて頂いている状況とは言えなかった。

山間部にある、不便な状況での地域との関わりのきっかけは、勝賀瀬小学校の運動会であった。生徒数が2名という少人数で「小学校・地区民運動会」と言うことで、地域の方が大勢参加している。「やってみようか」と言う入居者の声に、職員が付き添うことで、殆どのプログラムに参加することができた。マスト登り等、高齢化で若者が少ないため、職員が競技に参加し職員も楽しんでいる。運動会後の、懇親会へも入居者数名・職員も参加する。小学校主催・地区住民参加のグラウンドゴルフへの参加も、早2年が過ぎようとしている。

また、「中追の里」では、年に2回、春の「新緑祭り」秋の「もみじ祭り」と、溪谷内を利用した祭りを開催し、地域の方に地元の地場産品や野菜を出品販売して頂き、地域に伝わる伝統芸能く浦安の舞> (平成19年度継承者なし) や落語を、小学校の児童に披露してもらおう等、交流も確かなものとなってくる。

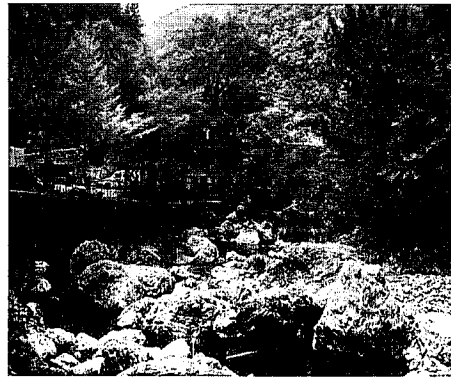
勝賀瀬地区の老人会「やすらぎの会」が毎週火曜日に、いの町保健福祉事業の介護予防事業の一環である「るんるん若ガエル体操」を行っており、参加させて頂くようになる。現在では、老人会の一部の行事にも、参加させて頂いている。

交流を深めていく中で、地域の方に、認知症について理解して頂くことの必要性を感じ、運営推進会議の中で「認知症サポーター養成講座」の開催を提案、運営推進会委員の方の協力もあり、地域の方が多数(54名参加)参加され、大盛況で開催をすることができた。

8月から始まった、いの町主催・地域支援事業(地域介護予防活動支援事業)「るんるん若ガエル体操サポーター養成講座」に6名の職員が参加する。「るんるん若ガエル体操サポーター養成講座」フォローアップ研修として、「認知症サポーター養成講座」開催の計画もある。中追地区への体操教室導入時、山間部で送迎が必要な方にグループホームより送迎車を出し、サポーターとしていの町はけん課との協働が始まる。現在もグループホーム職員が送迎に行き、毎週月曜日の自主継続に参加し協力している。10月14日(日)中追地区敬老会に、初めて7名の入居者の方が参加する。

地域行事への参加時、年齢の近い方と会話する入居者の姿はグループホームで見せる姿と違い、凛とした社会人の顔を見ることができる。

【概 要】



山間部の溪谷に建つ「グループホーム福寿の家」

設立時、地元民が入居者にいなかったため、「姥捨て山」との風評
地域との交流を模索する



きっかけは“運動会”

交流は次第に広がり、週2回の“グラウンドゴルフ”への参加は2年を過ぎようとしている



交流は参加するだけに留まらず
「認知症サポーター養成講座」を開催
多くの地域住民で大盛況となる

また施設内でも年2回の祭りを開催
今では恒例行事となっている

2. 地域の紹介

グループホーム「福寿の家」は高知県のいの町中追の山間部に建っている。観光温泉施設として数十年前に設立したのち平成14年8月建物の一部をグループホームとデイサービスとして改装し、現在観光施設と福祉施設が共存する、珍しい立地にあるグループホームであり、休日には観光客との出会いなどもある。総称を「中追の里」と言う。

「中追の里」はJRいの駅から国道194号線を西へ車で約10分、勝賀瀬橋を右折して、溪谷に沿って山道を車で約10分走った場所にある。山と谷に囲まれ、途中にある勝賀瀬地区と「福寿の家」より更に奥の中追地区に挟まれている。その距離は2～3キロあり、どちらへ行くにも近くに民家はない。

(出典:総務省「平成17年国勢調査」)

	人口(人)	世帯数(戸)	高齢者比率(%)
伊野地区	23,377	8,416	24.4
吾北地区	3,002	1,245	44.6
本川地区	689	344	43.7
いの町	27,068	10,005	27.1

(いの町ホームページより)

勝賀瀬・中追地区は、伊野地区に含まれる。途中にある勝賀瀬地区は、人口293名。過疎と高齢化の進む集落である。昭和50年に勝賀瀬川の土石流と氾濫により大きな被害を経験している地区である。平成17年度にも筏津ダムの放流により、仁淀川本流の水位が分流勝賀瀬川の水位を越し、勝賀瀬川に逆流して県道や民家が水災害に遭う。「中追の里」の途中にあり、勝賀瀬小学校(全児童4名)を中心に交流が確立された。掲示板等で情報が得やすい等の利点があった。

中追地区は、「中追の里」より更に奥へ車で15～20分、つづら折りの山道を走った平家の落人伝説の残る山深い所にある。人口127名。溪谷を挟み東と西地区がある。平成19年度中追小学校児童が1名となり休校、勝賀瀬小学校に統合される。年2回の祭りの挨拶以外は、ほとんど出向くこともない状況にあった。

「中追の里」は、中追溪谷観光として栄えていた頃より、地元の住民からは敬遠されていた風評もある。

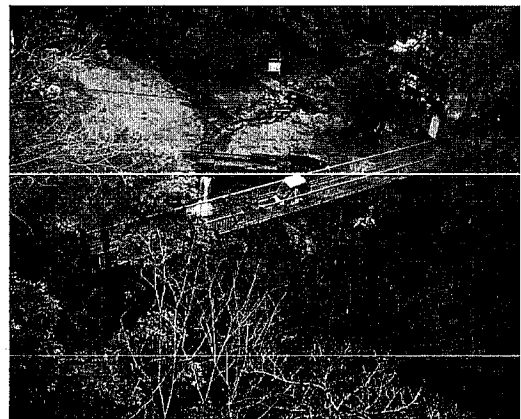
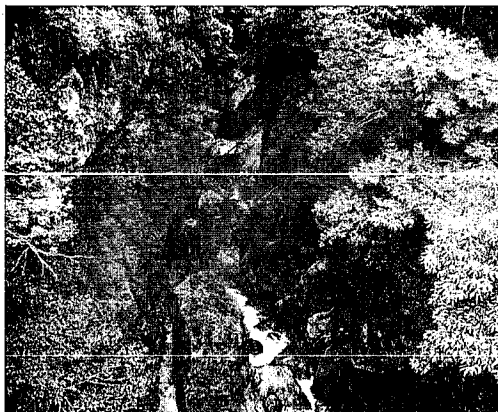
【概 要】

その昔、観光施設として栄えた建物を

介護施設に改修

今でも観光客の受け入れを継続

観光施設と福祉施設が共存するめずらしい立地



風光明媚とは裏腹に昭和50年には河川の
氾濫による大災害を被る
(勝賀瀬地区)

3. 活動の内容

<地域の人たちが、遊びに来たり立ち寄ってくれたりするための取り組み>

開設当初より、秋の「もみじ祭り」(11月)春の「新緑祭り」(5月)と、大きなイベントを年に2回開催している。プログラムに、地元小学校児童による伝承の浦安の舞(中追小学校休校のため平成119年度より継承者なし)落語(勝賀瀬小学校児童)・地元青年による清流太鼓・地区住民によるカラオケ・地元住民による地場産品(田舎寿司・野菜・干し竹の子等)の販売等、恒例となっている。優待券(食券)とプログラムを、地区長様に地域住民の方々に配布して頂いて参加を募っている。運営推進会議で、送迎車を出す・休憩室を設ける等の具体的な取り組みを提案することにより、地域住民の参加も増えてくる。

毎年8月には、開設記念日を設け職員手作りの(中でも鯉のたたき・手作りコロッケは好評)食事会を開催する。平成19年度初めて、地域の高齢者の方々を送迎することで10名の参加があった。平成19年夏休み最後の日曜日には、「子供釣り大会」(定員子供60名)を観光部門で開催、地元小学校全児童4名を優待する。

<周辺地域の諸施設からの理解と協力を得られるために>

消防＝・防火訓練の実施・施設で救命講習開催(職員15名参加)

- ・救急車要請時、夜間、山道で暗く中追の里入り口が分かり難いため、入り口に看板を設置(夜光塗料)する。夜間誘導灯を施設内に点灯している。

地元小学校＝<勝賀瀬小学校>(全校生徒数4名)

- ・小学校主催で地域住民参加のグラウンドゴルフに平成17年10月より参加する。
(毎月5の付く日)認知症高齢者と実際に交流することで、認知症高齢者を理解して頂く。

- ・平成19年度勝賀瀬小学校校長先生の交代があり、保護者より懇親会へのお誘いがあり、入居者4名・職員4名参加する。

- ・中追の里イベントへの参加・招待

<中追小学校>(全校生徒数4名)

- ・毎年3月ひな祭りの時期に、施設訪問があり、歌・合奏・高齢者との交流(あやとり・お手玉等、昔懐かしい遊びを一緒に楽しむ)
- ・毎年卒業式に案内があり参加する。(施設長のみ)
- ・平成19年3月休校＝記念式典に参加(施設長のみ)

地元レストラン＝・予約して外食(モーニングサービス含む)

<ホームの機能を、入居者のケアに配慮しつつ、地域に開放しているか>

地域との交流の機会が増え、認知症について正しく理解して頂くために、平成18年度最後の運営推進会議として、グループホーム福寿の家主催で、地域住民対象に「認知症サポーター養成講座」を勝賀瀬公民館で開催する。地域住民54名(中追地区6名)参加があり、認知症に対する意識の高さが伺えた。

年に2回の「祭り」イベントに、高知市内の介護専門学校にボランティアを要請し、毎回15名程の協力がある。

<地域の人たちとの交流>

勝賀瀬地区との交流は、運営推進会議委員でもある民生委員の協力により確かなものとなった。昨年末にはやすらぎの会(老人会)主催クリスマス会への参加。毎週火曜日の体操教室への参加は、現在も続いている。担当の民生委員が他の用事で参加できないときは、「中追の職員さんに前でやってみろうて」と頼まれることもある。

5の付く日のグラウンドゴルフでは、移動しながら地域住民の方と楽しそうに会話されている入居者の、地域の方と変わらない、いきいきとした表情が見られる。

秋の、小学校・地区民運動会では、入居者の「出してみようか」と言う声をきっかけに、ほとんどの競技に職員が付き添い参加する。最近では、地域の方に入居者をお任せすることもある。マスト登り等、若者が少ないため、職員が競技に参加し職員も楽しんでいる。

運動会後の、懇親会へも入居者数名・職員も参加する。

平成19年8月中追の里5周年記念日には、10名ほどの地域住民の参加がある。

また、夏休み最後の「こども釣り大会」には、小学校児童全員(4名)と保護者の参加があった。

中追地区との交流は、なかなか確立が困難であった。小学校の行事に、福祉施設として案内があり参加するに止まっていた。

平成19年2月28日「認知症サポーター養成講座」への参加呼びかけ時に、送迎車を出すことで、6名の参加者があった。福寿の家より更に20分以上の山間に、独居の高齢者が生活している現状も判明した。

その後、「新緑祭り」や中追の里5周年記念も、送迎車を出すことで参加して頂く。

8月21日より、いの町ほけん課介護予防事業の一環で、中追地区での開催日時等について相談のあった「るんるん若ガエル体操教室」が開催される。いの町より送迎車は出していない為、自主参加が困難な方4名の送迎を福寿の家が担当する。毎週火曜日3回コースで体力測定・体操の指導等が行なわれ、福寿の家といの町との協働が始まる。教室最終日、「来週からどうしたらえいのか」

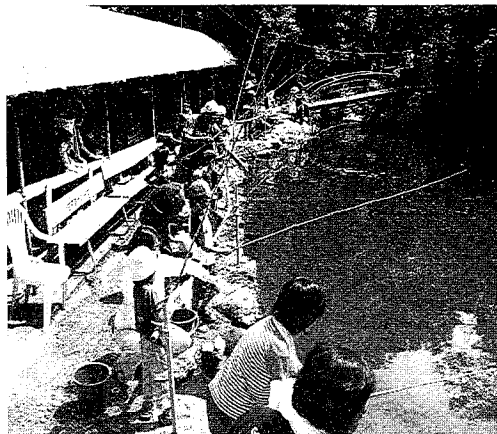
「町から来てくれるか」と継続を希望される声が住民の方より上がった。自主開催、毎週月曜日10時から、福寿の家協力で実施と決定する。「体操の前に血圧を測ったらどうじゃろう」と意見も出る。第1回参加者17名、福寿の家職員が主体となり、送迎・健康チェック(バイタルチェック)を希望者に実施後、体操を開始する。いの町職員参加あり。上がり框まで住民で一杯であった。第2回参加者20名のいの町職員祭日のため参加なし。「これで、地区全員!」との声が聞かれる。会場は活気に溢れる。畳の部屋から作業所の広いスペースへ場所を移し実施する。

事前に、中追地区「るんるん若ガエル体操」の支援ができるように、いの町ほけん課地域支援事業(地域介護予防活動支援事業)「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」を、6名の職員が受講する。

【活動の内容】・・・催事



年2回の祭りには近隣の市町村からも
参加してくれる
(もみじ祭りの地元青年の清流太鼓)



夏休み最後の日曜日にも関わらず
「子供釣り大会」には多くの親子連れで
賑わう

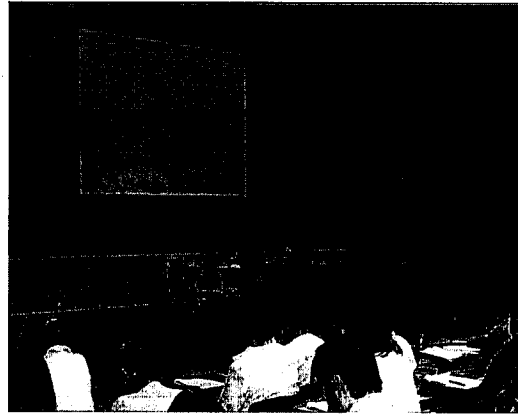


毎年8月の開設記念日
職員がつくる「鰹のたたき」や「手づくりコロッケ」「ちらし寿司」で地域住民や利用者、
家族をもてなす

【活動の内容】・・・地域の人達との交流



運営推進委員会を開き、意見交換する
地域住民代表、消防署、民生委員、
行政（介護福祉課）等が参加



取り組みの結果や過程を県内外のセミナー
や大会に積極的に参加して発表を行っている



いの町ほけん課地域支援事業の
「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」
に職員が参加
（いの町すこやかセンター）

4. 活動の成果と今後の展望

<福寿の家が目指すもの>

年に2回の「祭り」も定着し、地元住民の方より「祭りを楽しみにしている」との声も聞かれる様になる。

小学校主催グラウンドゴルフへの参加も、早1年経過する。地域住民のチームに入居者のみ入り、コースを回る姿も見られ、すっかり馴染みの関係ができています。小学校の愛校作業への参加や校長先生の交代による、離任・就任の懇親会へ参加の声掛けが小学校児童の父兄より掛かるようになり、交流の機会も増えてくる。

「やすらぎの会」開催の「るんるん若ガエル体操教室」への参加も、最初は戸惑いも見られたが、10ヵ月を経過した現在、地域交流の中で自然に言葉を交わす、地域住民の方と入居者・職員の姿が見られる。

交流を機会に、勝賀瀬地区公民館で「認知症サポーター養成講座」を開催、62名のサポーターが誕生する。

開設当初より参加している小学校・地区民運動会では、職員が付き添うことでほとんどのプログラムに参加する。また、職員も地域の一員としてプログラムに参加し、楽しんでいる。

新聞受けを置かせて頂いている、勝賀瀬地区入り口の地元住民の方は、四季の花や野菜を施設の方に喜んで頂ければと、時々置いて下さっている。

地域住民の理解の元、2つの地区との交流も確かなものとなる。

今後、地域の方の駆け込み寺となれるよう交流を続けて行きたい。

中追地区の「るんるん若ガエル体操教室」導入から自主継続の手助けと、地域に必要とされる施設作りの第一歩を歩み始める。

いの町ほけん課地域支援事業（地域介護予防活動支援事業）「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」のフォローアップ研修として、「認知症サポーター養成講座」開催の相談もある。

地域密着型サービス事業所の利点として、地域に出向き受け入れて頂くことで、地域が見えてくる。行政では担いきれない部分を手助けしたり、行政で把握できていない地域の現状を伝える役割もある。行政との協働もしやすい位置づけにある。

各グループホームが、認知症に対する啓蒙活動を地域に向けて実践したならば、より多くの方に認知症について理解して頂く事ができる。

行政もまた、地域密着型サービス事業所の役割を上手く利用し、地域の情報源としてほしい。

今後も、福寿の家のケアや地域交流等の実践を、対外的に発表することで、ケアや地域交流の実践を検証する機会とし、常に進化するケアを目指したい。

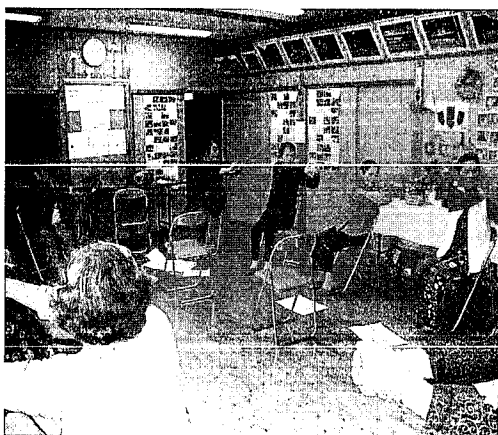
【活動の成果】



「認知症サポーター養成講座」

地域住民54名が参加

認知症への偏見を取り除き理解を深める



恒例参加となった

「るんるん若ガエル体操」

今では地域の方と名前呼び合う仲になっている



中追地区の敬老会に参加

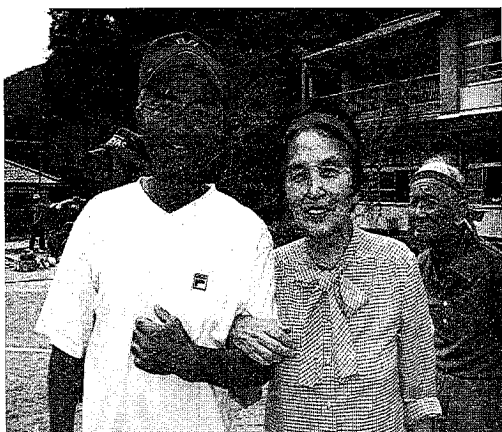
中には顔見知りの地域の方も・・・

【活動の成果】



小学校・地区民運動会

日々の交流で馴染みも増えて戸惑いもなく
プログラムに参加している



親しかった前校長先生と再会

はっきりと覚えていて自然と歩み寄る

お互いの健康を気遣う

職員も積極的に参加

若い職員の見せ場「マスト登り」

このあと息絶え絶えになる



【活動の成果】



勝賀瀬小学校の麦刈りのお手伝い

子供たちが大切に育てた麦畑

先生の説明に耳を傾ける



昔取った杵柄で、力を発揮する

入居者の経験が子供たちを助ける

先生も見事な手さばきに感心する

活動報告(3)

活動名称	教科 奉仕 「認知症と地域について考える」授業
活動要旨	平成19年度から実施の都立高校の指定科目、教科「奉仕」において、認知症の方の隣人として暮らすための学びを実施。映画鑑賞、サポーター養成講座、SPSD（認知症模擬演技者）演習、等で構成。自分たちなりに向き合う姿勢が芽生えてきている
応募者	東京都立拝島高等学校 「総合的な学習の時間」委員会担当 手塚比目古
連絡先	〒196-0002 東京都昭島市拝島町 4-13-1

1) 推薦理由

- ・ 社会の中で活動の領域を広げていく年代である高校生に、授業として認知症の理解をはかり、実践的な知識と具体的な体験の機会を提供している点がすばらしい。
- ・ 授業を受けた学生たちの意識の変化が明確にとらえられており、学生が今後、地域の中で様々な波及効果を生み出してくれる期待が持てる。
- ・ きめ細かいプログラムが他の参考となり、全国の学校で取り組むことが可能なモデルである。ぜひ各地で取り組んでほしい。
- ・ 授業の担当教員のみが企画するのではなく、キャラバンメイト、行政、NPO等と連携しながら、継続的した活動にむけて組織的な取り組みをしている。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

東京都設定科目「奉仕」
～認知症と地域について考える授業～

東京都立拝島高等学校

たくさんの支援にささえられて

「SPSD演習講座」 ↔ 「認知症サポーター養成講座」

NPO ACT NPO年輪サポートハウス 東京都福祉保健局

ACT・NPO大きなかぶ

社会福祉法人 昭島市社会福祉協議会 拝島高校 ILCD国際高齢者センター
介護支援会 相談室
認知症にやっても安心して暮らせる町づくり100人会議 東映

授業づくりに協力してくださった方々

NPO法人ACT（アビリティクラブたすけあい） 理事長 香丸真理子氏
NPO法人ACT 事務局長 大谷和子氏
ACT昭島たすけあいワーカーズ 理事長 上田桂子氏
NPO法人年輪サポートハウス 理事長 安岡厚子氏
東京都福祉保健局 認知症支援係 係長 高田朋子氏
東京都福祉保健局 認知症支援係 担当 柴 多恵子氏
認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議事務局 大上真一氏 渡辺紀子氏

「認知症」をテーマにした授業プログラム

時期	内 容	時間数
7月	事前学習① 映画「明日の記憶」	3時限
9月	「認知症サポーター養成講座」	2時限
	事前学習② DVD「SPSD演習」	1時限
10月	「SPSD(認知症模擬演技者)による演習講座」 +DVD「共に生きる」	2時限
	事後学習 DVD「町で暮らす」 「認知症本人会議アピール」 資料「認知症の本人の思いを聴こう」 ～本人は思いを伝えている～	1時限

映画「明日の記憶」を見て

- 認知症になったとか聞いたら絶対パニックと思う。本人もめっちゃつらいと思うけど...。奥さんとか、恋人、家族や周りの人もかなりつらいと思った。
- 自分もこれから認知症になるかもしれない。自分の周りの人が認知症になったら悲しいと思った。

「認知症サポーター養成講座」9月28日(金)

講師: 安岡 厚子 先生



ボケてるからもう遅いと思った。あまり近づきたくない。本人も大変だが周囲も大変そう。

介護してあげるじゃなくて、杖になってあげる。サポートしてあげれば普通に生活することもできるんだって思った。

設 問	Yes ↓ Yes	Yes ↓ No	No ↓ Yes	No ↓ No	合計
①認知症の症状は対応や環境によって変化しない。	19	24	11	156	212
②認知症の人の症状は、今のことは比較的覚えているが昔のことは覚えていない。	54	87	14	113	218
③認知症は治らないので早期発見するのは重要ではない。	37	30	7	141	215
④所患も同じことを言ったりすると時には嫌なれたり、怒ったりすることが多いのである。	13	44	3	150	210
⑤認知症の人は自分の「もの忘れ」に初期には気づいていない。	65	102	7	48	216

あなたの仕事や日常の暮らしの中で、これまで認知症の人と思われる人との関わりや、サポーターとしての知識が役立つ場面があると思いますか。

回答「ある」=78

- 今日聞いた全てのこと(が役立つ)。困っている人がいたら、言葉づかいなどを気を付けられる。公共の場などで。
- 人のことをもっとわかってあげられる。近くに認知症の人がいるとき。近所にいるような気がする。道ばたとかで。いろんなところで。

「SPSD(認知症模擬演技者)による演習講座」

NPO法人アビリティクラブたすけあい

NPO法人ACT昭島わーかーず大きなかぶ

10/5、10/12、10/26(金)



- できるかぎり、自分も働いている立場で、声かけられた時は、安心させてあげること、わかりやすく話してあげる。&聞いてあげる。
- 最後のDVDを見て、認知症にもかかわらず、笑顔はすてきだなんて思った。

今後の展望と課題

熱しやすく冷めやすいのが若さだからこそ...

- 実際の場面に遭遇しても慌てずに、対処できる勇氣。
- 学校外で、アルバイト先で、オレンジリングをきっかけに助けたい、心の輪。
- 学校内で、先輩から後輩へ。「サポーター講座? あ、俺も去年やったよ。」

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

平成19年度から都立高校の「東京都指定科目」として教科「奉仕」が各校で実施されています。

地域でのボランティア活動や小中学生を招いての部活動指導など、実施の仕方は各校で工夫されていますが、本校では、同じ地域に生活していても、出会ったりその存在を認識したりする機会のなかなかない、視覚障害者や認知症の方について、理解を深め、隣人として暮らすにはどうしたらよいか、学ぶことを中心に「奉仕」の授業を進めていくことになりました。

1学期は視覚障害者の講演や、交流、点字の学習などを行い、1学期末から認知症についての授業を何段階かに分けて行いました。

準備の段階では、「認知症サポーター養成講座」についての情報が最初にあったので、まずそこから考えてみようということになりました。「奉仕」の進め方について、昭島市社会福祉協議会の方々が相談に乗って下さっていたのですが、「サポーター養成講座」を受講した方が、市内のNPO法人「大きなかぶ」を紹介して下さいました。「大きなかぶ」を介して、NPO法人アビリティクラブたすけあいの「SPSD（認知症模擬演技者）演習講座」も行っていただけることになり、8月末には教員向けの「SPSD演習講座」を実施していただきながら、高校生向けのプログラムのためのやりとりとなりました。授業の内容と順序は次のとおりです。

1) 事前学習① 映画「明日の記憶」鑑賞(7/13 金 5・6時限、7/16 月 LHRで感想記入)

2) 「認知症サポーター養成講座」実施(9/28 金 5・6時限)

3) 事前学習② DVD「SPSD演習」(アビリティクラブたすけあいから借用)を視聴、

認知症と、認知症模擬演技者の対応について、予備知識を得る。

(9/14 金 に実施予定だったが台風のため休校となり延期)

4) 「SPSD(認知症模擬演技者)による演習講座」(NPO法人アビリティクラブたすけあい、NPO法人ACT昭島わーかーず大きなかぶ)

(10/5、10/12、10/26 金 5・6時限、各日2～3学級ずつ、HR単位で実施)

※この授業の最後にDVD「共に生きる」を視聴

5) 事後学習 DVD「町で暮らす」、「認知症本人会議アピール」の視聴、

「認知症サポーター養成講座」でテキストに使用した「認知症の本人の思いを聴こう～本人は思いを伝えている～」を再度読み直し、ワークシートに記入、最後に「自分たちができること」について生徒に自由意見を書かせる(10/26以降、「SPSD演習講座」の終わったクラスから実施。)

「認知症」という言葉すらなじみのない高校1年生が、映画を「奥さんの名前まで忘れちゃうんだ」と涙を流しながら見ていました。それでも、この段階では、「認知症」はまだまだ、映画の中のかわいそうな病気、「世界の中心で愛を叫ぶ」と同じように、「なったら怖い、自分になりたいくない」ものでした。

「認知症サポーター養成講座」で、「認知症」の中核症状や、若い人でもなりうるありふれた病気だということを知り、少しずつ印象が変わっていったようです。特に、「認知症に一番最初に気づき、その症状について一番悩んでいるのは本人だ」ということに、とてもショックを受けたようでしたが、ビデオの中の大人たちのように、自分たちもちゃんと「認知症」の人に出会ったら向き合いたい、自分にできることを何かしたい、周りがみんなであれれば大丈夫なんだというように考えるようになっていきました。

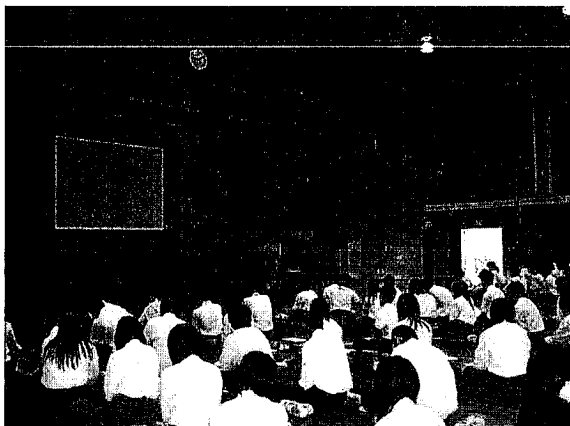
「SPSD演習講座」では、担任の先生がまずショートコントで、朝でかけようとする「どこ

に行くの？」と繰り返し尋ねる、認知症初期の母親との対話を演じて見せ、それぞれの気持ちを語ります。次に、コンビニにマッチを買いに来た認知症のおばあさんと店員、公園で迷子になってしまった認知症のおばあさんと二人の高校生のロールプレイを、生徒が演じ、それぞれの気持ちと、他の生徒の気持ちをやりとりしました。

実際にやってみると、認知症の人の焦りがこちらに伝染してしまったり、繰り返し繰り返し自分に迫ってくるように見えるのが恐く感じられたり、と戸惑うことも多くあったようですが、自分たちなりになんとか向き合っ対応しよう、勇気が必要だがなんとか頑張っていきたい、という思いを強くしたようです。

いろいろなスタッフの方々とこの授業の計画を立ていく時に、「自分がああじゃなくてよかった」「自分はなりたくない」という到達点ではないところに、どうやったらたどり着けるだろうということが何度か話題に上りました。二つの「講座」を終え、生徒達は「学んだことがきっと活かせる時が来るはず」「認知症の人に出会ったら学んだことを生かして対応したい」と、自分自身のこととして受けとめていると思います。

もちろん、そうした直接の生かし方は大事で、ぜひ頑張ってもらいたいのですが、もっと簡単なことでも役に立つことはできるんだよ、ということを事後学習の中でつかんでほしいと思っています。「本人会議」のリーフレットをもう一度読ませたいのは、「このチラシをコピーして、～大切な支援者のひとりです。」という部分に気づいてほしいからです。彼らにできること、オレンジリングを誰かに「それ何？」って聞かれたら、話してあげられること。「そういう人には、早口でいろいろしゃべっちゃいけないんだよ」「安心させてあげなくちゃいけないんだよ」と、一言でもいいから、他の人に広めていってほしいと願っているのです。



(左) 9月28日(金) 本校体育館
「認知症サポーター養成講座」
講師：安岡 厚子 先生

(下2点) 10月5日(金)
1年2組「SPSD演習講座」



2. 地域の紹介

東京都立拝島高校のプロフィール

全日制普通科高等学校 生徒数 1学年 234名、2学年 221名、3学年 219名。

40人学級×18クラス（各学年6クラス）規模の学校ですが、以前は中退者がとても多かったため「中途退学者対応加配」措置を受け、1学年は7クラス（1クラス34人）で生活しています。

以前は学校内が荒れていた時期もありましたが、この数年は「温かく厳しい指導」という方針のもと、きめ細かい生徒指導や、少人数クラスでの学習指導を行ってきた成果もあり、とても落ち着いた雰囲気になっています。生徒も、優しくおとなしい子が多くなってきました。

進路先は、専門学校進学が多く、大学短大進学が2割、就職が3割ほどです。美容や保育、調理などの職業を希望しているほか、就職先では販売・接客、製造が多くなっています。中には、看護や介護、福祉の分野を志望している者もいます。

部活動も盛んになってきましたが、経済的な理由（毎日の費用は自分でまかなう。親から小遣いをもらっていない。）でアルバイトをする生徒が多数です。主に、コンビニ、スーパー、ファミリーレストラン、ファーストフードショップなどで働いています。

通学域は、昭島市、福生市、立川市、武蔵村山市、東大和市、あきる野市からの生徒が多く、八王子市や日野市からの入学も増えています。府中市、国立市、小平市他の市からもそれぞれ数人ずつ毎年入学しています。

地元の昭島市からあきる野市、日の出町にかけては、老人ホームやケアハウスが多い地域で、保護者の中にもヘルパーなど介護職に就いている方も見られます。

アルバイト先や、自分の家の周りで、「認知症」の人に出会う可能性は低くなく、これまでは気づかなかったかもしれないその存在に、これからは気づき、また勇気を出して声をかけられるようになってほしいと思っています。

3. 活動の内容

授業づくりに協力してくださった方々

NPO法人ACT 理事長 香丸眞理子、事務局長 大谷和子

ACT昭島たすけあいワーカーズ 理事長 上田桂子

NPO法人年輪サポートハウス 理事長 安岡厚子

東京都福祉保健局 認知症支援係 係長 高田朋子、担当 柴 多恵子

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議事務局 大上真一、渡辺紀子

1) 事前学習① 映画「明日の記憶」鑑賞(7/13金5・6時限、7/16月LHRで感想記入)

2) 「認知症サポーター養成講座」実施(9/28金5・6時限)

講師: 安岡 厚子 先生 時間90分

使用教材: 認知症サポーター養成講座「認知症を学び地域で支えよう」

補助教材として講師の用意した資料

「認知症サポーター100万人キャラバン」キャンペーンビデオ

概要: 65歳以上の人口の1割が認知症、その半数(東京都は70%)が在宅で地域に暮らしている。高齢者だけでなく、壮年期に発症する若年性認知症もある。認知症に最初に気づき、苦悩するのは本人であり、それぞれが人として普通に暮らしていきたいと願っている。「特殊なかわいそうな人」ではなく、少しの不便を抱えた隣人として私たちはどう接すればいいかを考える。

※受講前と後でアンケートを実施 ※終了後、講座受講者にオレンジリングが渡される

※都立高校の生徒を対象に実施するのは初めての取り組み

3) 事前学習② DVD「SPSD演習」(アビリティクラブたすけあいから借用)を視聴、認知症と認知症模擬演技者の対応について、予備知識を得る。

(9/14金に実施予定だったが台風のため休校となり延期)

4) 「SPSD(認知症模擬演技者)による演習講座」(NPO法人アビリティクラブたすけあい、NPO法人ACT昭島わーかーず大きなかぶ)

(10/5、10/12、10/26金5・6時限、各日2～3学級ずつ、HR単位で実施)

講師: 1HRに2～3人配置(演技者2人、ファシリテータ1人)、時間100～110分

概要: 認知症模擬演技役の講師と生徒とで実際の接し方を考えていく、参加型ロールプレイ演習。導入ビデオを見たあと、ロールプレイ。

＝具体的な事例(2例)について、「どうしたらよいか」考え、やってみて「どうだったか」「こうしたらよかったのではないか」「こうしたところがよかった」などお互いに評価しあい、演技者自身が「どう感じたか」を表明する。

留意点: 教室の設営 机を全部教室後方に寄せ、教室前方を1/3演技用のスペースとして

空け、椅子のみを配置しRPを行う。※この授業の最後にDVD「共に生きる」を視聴

5) 事後学習 DVD「町で暮らす」、「認知症本人会議アピール」の視聴、「認知症サポーター養成講座」でテキストに使用した「認知症の本人の思いを聴こう～本人は思いを伝えている～」を再度読み直し、ワークシートに記入、最後に「自分たちができること」について生徒に自由意見を書かせる。(10/26以降、「SPSD演習講座」の終わったクラスから実施。)

拝島高校 認知症の理解(プログラム)
あなたの暮らしている地域で認知症の人とであつたら

時間	授業内容	教室・生徒の状況
13:20 ～	1. 導入 (30分) ・自己紹介：進行役のファシリテーター・SPSD各自 (介護の現場で働いていることも話す。) ※「みんなで、一緒に考える授業です!」をつたえる。 ・今日の授業の目的…認知症の人が安心できる 関わりと環境を理解する ※黒板に板書 ・体験ビデオを見よう! (10分) …感想を2～3人から聞く! ・復習…認知症を理解する…資料に基づき説明(10分)	・生徒は名札を付ける。 ・机は後ろに下げ、椅子だけ持ってSPSDを囲む ようにU字になる。 ・体験ビデオを見る ※ファシリテーターの合図で先生がビデオ(約9分)を 操作する。 ・テキストで説明
13:50 ～	2. 事例を行なう ＜デモ…何回も繰り返す＞ 20分 ・ロールプレイの手法の説明(よくある場面で実演) ①担任の先生の協力で今からやろうとしている ロールプレイを理解してもらう。 ②シートの書き方の説明 ③デモを行なう。先生⇒SPSDの順でコメントを聞く。 ・事例の関わる生徒を選ぶ コンビニ…1名() 公園…2名() ・今日の川上良子さんのプロフィールの説明	・先生が登場することで場を和らげる。(ショート コント) ・教室からロールプレイに参加したい人を募る。 ＜良子さんのプロフィール＞ アルツハイマー中期、娘が近所に住む ・出来るだけみんなに意見を聞く。 ・SPSDは、できるだけ良いところを評価する。 また、こうするともっと良かったと感じたこと を分かりやすく話す。
14:10 休憩	…休憩 10分…	
14:20 ～	＜事例1…コンビニ＞17分 ・ロールプレイ(3分) ・関わった生徒の感想 ・SPSDの感想 ・周りの生徒の感想 * シートにメモは随時行なうよう促す。 まとめ 2分 ＜事例2…公園＞ 17分 事例1同様に行なう	先生に手伝ってもらい、 模造紙にポストイットを分類しながら貼り付ける。
14:37 ～	3. <u>自分ができること、できるといいなと思うこと、感じた ことを書く。(10分)(イラストでもいいよ!)</u> ・シートを使って記入(3分) ポストイットにも書いてもらう!⇒模造紙に張る。 ・認知症の人へのかかわりのポイントをあげまとめるにする。 ⇒授業の目的である認知の人が安心できる関わりと環境を生 徒の意見から拾い上げまとめるにする!	＜ポイント＞ ・感情は豊かで、手助けがあれば充分生活で きる。 ・認知症の人が安心できる関わりと環境を作 ることを心がけることを理解してもらう。 ・後日、感想のまとめを配布 (先生がまとめを行ない、ACTへ送付する。)
14:55 ～	4. DVDで認知症の人にいきいきした姿をみる(5分) ……老いのくらしDVDを映す……	
15:10	5. 4のシートを回収する。 <終了>	



川上良子さんのプロフィール

- ・ アルツハイマー型認知症 中期
- ・ ひとり暮らしで、近所に娘家族が住んでいる。
- ・ 最近、火の始末が心配なので、ガスの元栓を閉められている。
- ・ コンビニにマッチを買いにいくが、コンビにはマッチは置いていない。
- ・ 昭島市拝島町に長年暮らしている。

【場面 1】 コンビニで何か困っていそうな認知症の人をみかけたら

- ・ おばあさんがお店に挨拶しながら入ってくる。しばらく店内をうろうろしながら、困った様子で何か探しものをしている。
- ・ さあ、あなたはどのように声をかけますか？声をかけてください。
※SPSDポイント ガスがつかなくて、ご飯が炊けないのよ！

【場面 2】 公園のベンチにすわっていたら声をかけられた。

- ・ 高校生 2 人で、公園のベンチに座って携帯電話をいじりながら話をしている。
- ・ そこへ、知らないおばあさんが、高校生の 2 人に話しかける。
- ・ 「わたしのうち知らんかね」
- ・ さあ、あなたは、どうしますか？

ロールプレイを見て『気づき』メモ 拝島高校： 年 組

氏 名

	ショートコント	場面 1 (コンビニ)	場面 2 (公園)
見ている自分の気づき	自分：ちょっとお母さんが かわいそう！		
認知症の人に関わった生徒の気づき	先生：何度も同じことを聞かない でくれ、急がしいのに…		
模擬演技者の気づき	母親：何かとつてもいらいらして いて、いつもの息子ではない。も っとやさしく欲しい。		
教室からの気づき			

自分ができること、できるといいなと思うこと、感じたこと！（イラストでもいいよ！）

授業の評価：①大変良かった ②良かった ③よく分からなかった

<感想>

「奉仕」第10～12回 認知症を理解し、できることを考えるプログラム

07.10.12

1年()組()番氏名()

1 DVD「町で生きる」を見て思ったこと。

--

2 DVD「本人会議アピール」を見て思ったこと。

--

3 「サポーター養成講座」のテキスト「認知症の本人の思いを聴こう」を読み、考えてみよう。

Q1「本人会議」とは？

(ア)の人同士が集まり、お互いの(イ)や(ウ)を話し合う会議が(エ)で開催されました。

(オ)人の人が発言をしましたが、会議での生の言葉を元に、参加者同士で話し合っ社会への(カ)を決めました。

Q2「本人会議アピール」の内容から

(キ)の声を大切に、互いが (ク)町と一緒に築いていきましょう。

認知症であることをわかってください どんなことを？
--

(シ)か。
(ス)か。
早く(セ)し、いい(ソ)が早く必要です。

自分たちの意向を施策に反映してほしい どんなこと？
--

(ト)サービス。
(ナ)つづけ、
(ニ)を得る機会がほしい。
(ヌ)を楽にしてほしい。

本人同士で話し合う場を作りたい

どうして？

仲間と(ケ)で進みたい。

(コ)したい。

仲間の役に立ち、(サ)たい。

わたしたちのこころを聴いてください

どんなことを？

(タ)。

(チ)。

(ツ)と決めつけないで。

(テ)まず、

わたしたちにきいてほしい。

Q3 裏面を読んで考えよう。

サポーターが増えたらどんないいことがあるだろう？

わたしたちにできることは何かないだろうか？(チラシをよお〜く読んでね)

4. 活動の成果と今後の展望

活動の成果

1) 映画「明日の記憶」を見ての感想（多数意見抜粋）

認知症になったとか聞いたら絶対パニックと思う。本人もめっちゃつらいと思うけど…。奥さんとか、恋人、家族や周りの人もかなりつらいと思った。

すごい感動した。認知症は、大変な病気だと思った。自分もつらいし、世話をしてる人も大変だと思う。怖かった…。今までの記憶や、した事など忘れちゃうなんて…。『かわいそう』なんて、言葉にしたり、思ったりするのめっちゃ最低だと思うけど…。でも、かわいそうって思ってしまう…。アルツハイマーの、『TeddyBear』の事を思い出して…。なんか泣けてきます。

最初は普通の社員がだんだんいろんなことを忘れるということはとても恐ろしいです。もし自分になったらと考えてしまうととても大変です。

認知症はとても怖い病気だと思いました。大切なことだけはせめて覚えていたいと思いました。

最後に奥さんのことまで忘れてしまったのは、かわいそうだと思った。

もし自分の家族もあんな風になったら、この映画のようにみんなで力を合わせたいと思いました。

自分の妻もいずれ忘れてしまうのを見て、相手もつらいし、自分もつらいから本当に悲しい病気だなと思った。

認知症になった本人も大変だけど、その家族も大変だと思いました。

自分もこれから認知症になるかもしれない。自分の周りの人が認知症になったら悲しいと思った。

主人公の男の人の会社の周りの人たちが、認知症と知っても、前と変わらず、主人公の人を慕っていたところに感動しました。認知症になった本人が一番悲しいし、家族も悲しいんだなと思いました。認知症の人がいたら、そのことを思っていきたいと思いました。認知症の人を支える人になりたいと思いました。

認知症のこわさとは、前までに普通に健康だった人が急に物忘れやさっきやったことが忘れてわからなくなってしまうのがすごくびっくりでした。そして、認知症は誰でもなってしまうのもびっくりしました。あの人の演技力は本物だ。認知症がどれほど苦しいことなのかわかった。あと先くらい人生がある中で、どうゆう風に生きていくか考えさせられた。そんな中で家族・友達の大切さなどがあつた。認知症にはならないように気をつけよう。

かなり認知症はこわいと思った。なりたくないと思った。

かわいそう。

認知症はいろんなことを忘れてしまうだけではなく、忘れたことにすら気づけない悲しいものだと思うた。

2) 「認知症サポーター養成講座」受講後のアンケート

Q 1 次の設問に答えてみてください。（受講前&受講後）

設 問	Yes ↓ Yes	Yes ↓ No	No ↓ Yes	No ↓ No	合計
①認知症の症状は対応や環境によって変化しない。	19	24	11	158	212
②認知症のものの忘れは、今のことは比較的覚えているが昔のことは覚えていられない。	54	37	14	113	218
③認知症は治らないので早期受診するのは意味がない。	37	30	7	141	215
④何度も同じことを言ったりするときには時々たしなめたり、怒ったりすることが効果的である。	13	44	3	152	212
⑤認知症の人は自分の「もの忘れ」に初期には気づいていない。	63	102	7	43	215

Q 2 受講前の認知症に対するイメージを自由にお書き下さい。

物忘れが激しい。ついさっきのことをする。変なことをする。何もかも忘れてしまう。なんか子どもっぽくなるというか。あまりしゃべらなくなって物忘れが激しい。かわいそう。ぼーっとしてる。治る方法がない。買い物に行こうと思っても買うものを忘れてしまっって何も買うことができなそう。同じことを何度も言う。

性格が少し変わりそう。普段普通にできることが出来なくなってくる。周りのことが認識できなくなる。怖い。どこか障害がある。普通の人とは少し違う。自分の思っていることができない。ボケだと思う。老人がなりそう。昨日食べたものが思い出せない。不自由。理解しがたいことを発言する(意味が分からない)。質問に対して的が外れた答えをする。友達や家族のこともすぐ忘れて思い出せなくなる。相手をするのが大変そう。暗いイメージ。ボケてるからもう遅いと思った。あまり近づきたくない。本人も大変だが周囲も大変そう。病気。障害。なりたくない。老人ホームにいるような人がかかるもの。子どもの頃の記憶とまざってしまう。

Q3 受講後の認知症に対するイメージを自由にお書き下さい。

認知症の人にも意志や、意識がある。プライドもあったり、皆と一緒にだと思う。本人が一番つらいんだとわかった。それぞれの思いがちゃんとあるんだって思った。ちょっとした障害を持っているだけで、自分とあまり変わらないんだって思った。重い病気。誰もがなりうるありふれた病気、少し怖い。人によっては普通に生活できることを知ってイメージが軽くなった。つらいんだって思った。かわいそう。みんななる可能性があるもので、だから別にその人がおかしくなるものではないともわかった。介護してあげるじゃなくて、杖になってあげる。サポートしてあげれば普通に生活することもできるんだなって思った。周りが対応を変えるべき。早口ではなくゆっくり説明してあげれば、できる。最初からそんなに物忘れが激しいわけじゃないし、ひとそれぞれだということがわかった。周りの人が手伝ってあげることが必要。ちゃんとした接し方をしなくちゃいけないんだなと思った。いろいろな症状がある。確かに他の人と違う所はあるけれど、ほとんどみんなといっしょ。認知症の薬が開発されている。誰でも認知症の人を助けてあげられるんだとわかった。受講前は明るく元気に生きようとしているというイメージがなかったけど、受講後はそのようなイメージを持った。人なんだからちゃんと接しなければいけないと思った。助けてあげるというイメージでなく、支えてあげるというイメージを持った。忘れていってしまうが周りの環境で変わるものだなと思った。

Q4 イメージは変わりましたか。

大きく変わった	変わった	あまり変わらない	変わらない	合計
21	125	52	20	218

Q5 あなたの仕事や日常の暮らしの中で、これまで認知症の人と思われる人との関わりや、サポーターとしての知識が役立つ場面があると思いますか。 回答「ある」=78

「ある」=具体的にどのように？どんな場合に？(全回答掲載)

自分の親や、将来に役立つ。「おじさんが認知症なのでこれから役立てたいです。」自分のおばあさんと接する時。おじいちゃん。知り合いの認知症の人に対して言葉づかいに気をつけることができる。

周囲の人が認知症になった場合。自分の家族がこれから発病したりする可能性もあると思うから。親など身近な人に可能性があるから。親がぼけたとき。親や自分になる可能性がある。どんな強い人でも支えは必要だ。高齢者の方と接するときなど。家で家族の介護をしているとき。

(認知症の人への)言い方。やさしく声をかける。自分のできる範囲で(福祉の仕事がしたいので)。将来介護の仕事がしたいので、勉強になりました。認知症の人のことをよく考えて行動する。手をさしのべることはできる。これから働く職場や、自分の知り合い、家族がなってしまった場合。周りの人がそうなった時に対処できる。

もし親や周りの人が認知症になっても、対処のしかたがわかったから役立つと思う。おじいちゃんおばあちゃんなど。もし身内の中で認知症になった人がいた場合、知識があれば適切に対応できる。自分がもしそういう人に会ったとき、今日教わったことを使えるから。それなりの対応ができると思う。普通に接する。今日聞いた全てのこと(が役立つ)。

困っている人がいたら、言葉づかいなどを気をつけられる。公共の場などで。

人のことをもっとわかってあげられる。近くに認知症の人がいるとき。近所にいるような気がする。

道ばたとかで。いろんなところで。認知症の人が困っているとき。町で会って困っている所を見たとき。迷子になっている人がいたりしたら声をかけてあげる。

私の住んでる団地が老人がいっぱいだから、エレベーターでお話するとき。道で会った時とかに話しか

けてあげられる。道に迷っているような人をビデオでみたような接し方で接する。道を尋ねられた時等。困っていたら丁寧に聞こうと思う。困っている人がいたら優しく接することができる。バイト先や身内の人との関わりが増えてくると思うから、このプリントなどを見て対応しようと思った。バイトのレジでの対応。老人ホーム(認知症の方もいらっしゃる)に行った時。私はコンビニのバイトをしているので、お客さんとして来られてもおかしくないと思います。なので、そのような場面になっても嫌な顔などをせず優しく接したいと思います。具体的に説明できませんが必ずあると思います。まだ認知症のことを知らない人がたくさんいるのでサポーターの人がいれば生活が普通にできると思う。

3)「SPSD演習講座」ロールプレイ「気づき」メモ(10月5日実施3クラス分)

	①大変良かった	②良かった	③よく分からなかった	無回答
合計	51	35	0	12

自分でできること、できるといいなと思うこと、感じたこと！(多数意見抜粋)

自分の周りには認知症の人は居ないけど、今回のロールプレイのようなことがあったら、できるだけ優しく接してあげたいと思った。

やさしくする。早口で話さない。普通の人みたいに生活できるんだなと思った。

困っていたら一言でも声をかけてあげたい。優しくする。相手につくす。ちゃんと向き合う。

できるかぎり、自分も働いている立場で、声かけられた時は、安心させてあげることと、わかりやすく話してあげる。&聞いてあげる。

ちゃんと接してあげられるようになったらいいと思った。

相手の話をよく聞いたり、自分が助けられることはなるべくやっていきたいと思う。

極力、親身になって協力してあげたい。出来る限り、その人のしたい事に近づけるようにする。

なるべくいろんな事きいて助けてあげたい。少しでも力になりたい。

自分がができる範囲でなら全力を尽くして対応したいと思う。

ここ2回の授業と今日で学んだことを生かして行けば、自分のできることは沢山あると思う。あとは自分の勇気が一番必要だと思う。もし自分も認知症にかかってしまったら困ることを考えれば、人にやさしくすることは簡単だと思う。

何を聞かれてもすぐ対応できるようになったら、自分のためにもいいなと思いました。最低でもきょうやったことを他の日に役立てたいです。

こんな場面に遭遇したくないなと思いました。困ったら話をかけてみる。落ち着いて話す。

自分がができるささいな事ぐらいいは助けてあげたいと思う。

落ち着く。やさしくする。助ける。もっと優しくできたと思う。

感想

体験とかもあって、スゴくべんきょーになった。眠かったけど勉強になった。

最後に見たDVDはとても感動しました。またこうゆう授業をやってほしい。

あまり学校では習えないことを教えてもらいました。

最後のTVを見て、認知症にもかかわらず、笑顔はすてきだなって思った。

難しい仕事だと思った。でも素晴らしい仕事なので気になります。

すごく大変だと思う。でもすごくいい仕事。参加できてよかった。

認知症の人が意外といろいろなことに気づいているんだなと思った。

身近に認知症を感じる事ができた。優しい心を持った人達が来て、うれしかった。

来た人が最後の方に、「認知症の人っておもしろいよね」って言ったことが心に残る。分かる人には分かる。授業的には悪くはないと思った。この学んだことを活かせる時がいつかくると思う。

認知症の症状が詳しくわかって良かったと思いました。

将来介護の仕事につきたいので、とてもよい勉強になりました。親がヘルパーさんで認知症の人の話をよく聞いていたので、もっと理解が出来ました。

認知症は不幸なことではない。認知症の人や周りの人もいろいろ学べて得ることができると思う。

「認知症」という言葉すらなじみのない高校1年生が、映画を「奥さんの名前まで忘れちゃうんだ」と涙を流しながら見ていました。それでも、この段階では、「認知症」はまだまだ、映画の中のかわいそうな病氣、「世界の中心で愛を叫ぶ」と同じように、「なったら怖い、自分になりたいくない」ものでした。

「認知症サポーター養成講座」で、「認知症」の中核症状や、若い人でもなりうるありふれた病氣だということを知り、少しずつ印象が変わっていったようです。特に、「認知症に一番最初に気づき、その症状について一番悩んでいるのは本人だ」ということに、とてもショックを受けたようでしたが、ビデオの中の大人達のように、自分たちもちゃんと「認知症」の人に出会ったら向き合いたい、自分にできることを何かしたい、周りがみんなであえば大丈夫なんだというように考えるようになっていきました。

「SPSD演習講座」では、担任の先生がまずショートコントで、朝でかけようとする「どこに行くの？」と繰り返し尋ねる、認知症初期の母親との対話を演じて見せ、それぞれの気持ちを語ります。次に、コンビニにマッチを買いに来た認知症のおばあさんと店員、公園で迷子になってしまった認知症のおばあさんと二人の高校生のロールプレイを、生徒が演じ、それぞれの気持ちと、他の生徒の気持ちをやりとりしました。実際にやってみると、認知症の人の焦りがこちらに伝染してしまったり、繰り返し繰り返し自分に迫ってくるように見えるのが恐く感じられたり、と戸惑うことも多くあったようですが、自分たちなりになんとか向き合っただけで対応しよう、勇気が必要だがなんとか頑張っていきたい、という思いを強くしたようです。

今後の展望と課題

コンビニやファミリーレストランのアルバイト先や、自分の家族や隣人など、日常生活の中で認知症の人にあつたら（きっと会えるだろうと生徒は考えています）、学んだことを生かして頑張りたいという気持ちを生徒が持ってくれたことはとても嬉しいことです。

もちろん、そうした直接の生かし方は大事で、ぜひ頑張ってもらいたいのですが、もっと簡単なことでも役に立つことはできるんだよ、ということを、今回はまとめられなかった事後学習の中でつかんでほしいと思っています。「本人会議」のリーフレットをもう一度読ませたいのは、「このチラシをコピーして、～大切な支援者のひとりです」という部分に気づいてほしいからです。

オレンジリングを腕にはめていて、友達に「それ何？」と尋ねられたとき、「認知症サポーター養成講座でもらったんだよ」「え？」「認知症って、ものを忘れちゃったり、わからなくなっちゃやう病氣なんだけど。誰でもなる病氣なんだよ」「へえ」「だけど、ゆっくり落ち着いて話を聞いてあげれば、安心してもらえるんだよ」「とにかく、優しく聞いてあげることが一番なんだって」などという会話が広がっていったら、それはすばらしいことなのではないかと思います。こんなに立派に説明できないかもしれませんが、「認知症」という言葉や「ゆっくりと落ち着いて」などという対応の仕方を、別の誰かの記憶の中に少しずつとどめていく、そういうメッセージ役もまた、大切な彼らの役目だということ、を、わかっていってもらいたいと思っています。

「奉仕」の授業のない3年生から、アルバイト先のファミレスに、毎日財布を持たない認知症のおじいさんがやってくるという話を偶然聞きました。上着に名前と連絡先を縫いつけたおじいさんが来ると、まず客席に案内し、水を出しメニューを広げて「ご注文は？」と聞くのだそうです。おじいさんは、ゆっくり考えた後「これ」と指さします。「ではお会計をお願いしますね」とレジに案内し、値段を告げると、おじいさんはポケットを探し、財布がないことを確認した後、「また来る」と言って帰っていくのだそうです。中には、席に案内して水を置いたまま放っておく店員もいるのだそうですが、そういう時にはしばらくして、ちょっと不満そうに「また来る」と言って帰るそうです。そうやって毎日、同じように来るおじいさんを、店員がわかっていてそれなりに時間を過ごさせて帰してあげる。こんな風景が、どこの地域でも当たり前のように見られるようになるには、1年生が受けたような授業を継続していくことが大切だと思っています。

活動報告(4)

活動名称	この町にこんな病院があったらいいな（地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み）
活動要旨	県指定第一号の認知症センター。総合病院の利点を活かし、医療と連携しながら在宅介護、早期診断を支援。認知症について家族向け学習会や社協や医師会での講演など地域での啓発活動に尽力。家族会とスタッフの会合も設けている
応募者	財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター（オアシス）
連絡先	〒529-1168 滋賀県犬上郡豊郷町八目 12（豊郷病院内）

1) 推薦理由

- ・ 総合病院における認知症センターの設置が、その病院だけで完結せず、他医療機関、関連機関との連携を図っている点は重要。本来あってほしい姿であり、連携していくプロセスを、全国の病院で参考にしてほしい。
- ・ 病院が中核となって地域での取り組みを推進していることの、安心感が大きい。医療を拠点にしつつも、在宅ケアのサポートの充実、地域住民、家族との交流、生活関連領域との協働などに力を入れ、地域で暮らし続けられることを大切に取り組んでいる点が重要。
- ・ まさに、わが町にこんな病院があったらいいなと思わせてくれる活動である。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン 2007

『この町に、こんな病院があったらいいな！』
(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)

財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター・オアシス

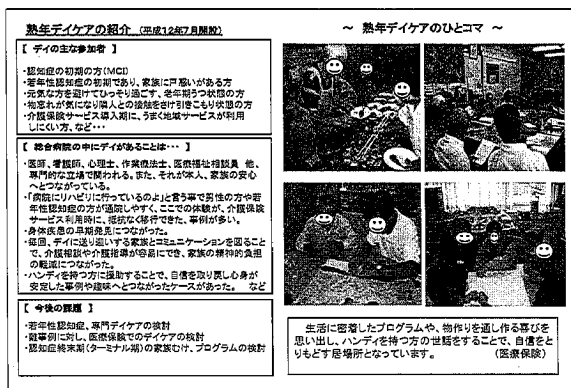
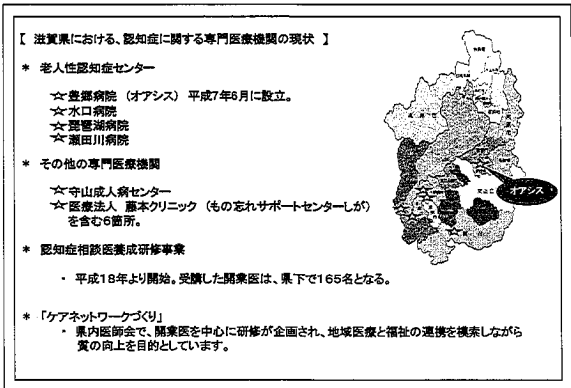
豊かな郷で心と体の健康を！



豊郷病院 老人性認知症センターと関連施設の お ち ゃ ん (豊郷病院内 各事業及び施設等の開設報告は省略)

大正 14 年 (1925 年)	4 月	財団法人 豊郷病院
昭和 32 年 (1957 年)	4 月	精神科・神経科新設
33 年 (1958 年)	10 月	総合病院の指定
45 年 (1970 年)	3 月	医療相談開設
平成 7 年 (1995 年)	6 月	老人性(痴呆・夜盲)認知症センター・認知症外来開設
8 年 (1996 年)	6 月	老人保健施設ノストラルとよさと開設
9 年 (1997 年)	12 月	訪問看護ステーションレインボウとよさと開設
11 年 (1999 年)	11 月	医療相談室から医療相談相談室へ名称の変更
	12 月	訪問看護ステーションレインボウはたしよ開設
12 年 (2000 年)	4 月	介護保険制度対応
	7 月	居宅介護支援センターマックスとよさと開設
	7 月	ヘルパーステーションピンポンとよさと開設
		精神科デイケア開設(精神科デイ・晩年デイ)
13 年 (2001 年)	5 月	訪問リハビリテーションアイルとよさと開設
14 年 (2002 年)	2 月	夢遊市デイサービスセンターきらら
		夢遊市在宅介護支援センター
		夢遊市グループホーム ゆうゆう 開設
15 年 (2003 年)	3 月	甲斐町デイサービス けやき
	7 月	甲斐町グループホームらくらく 開設
	7 月	総合リハビリセンター開設
	9 月	地域連携室開設
16 年 (2004 年)	8 月	訪問看護ステーションレインボウとよさとサテライトひこねと
		居宅介護支援センターレインボウひこね開設
17 年 (2005 年)	11 月	訪問看護ステーションレインボウひこねに名称変更し開設
	12 月	オアシス家族会の発足





3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

豊郷病院の老人性認知症センター・オアシスは、(以下『オアシス』という) 滋賀県第1号として、総合病院である財団法人豊郷病院に平成7年6月開設されました。高齢者は多くの身体疾患を抱えており、認知症に罹患している方の中でも身体合併症を抱えている方の多い現状で、既存の総合病院の中に設立された利点を生かした医療を展開しています。(※老人性認知症センターは、名称が変更される以前は、老人性痴呆疾患センターと称されていました。)

老人性認知症センターの多くは単科の精神科病院に併設されているのがほとんどです。オアシスは、総合病院の中にあるので、「かまえず受診できる」「安心できる」など、受診しやすい環境にあるのは利点の1つです。名称の変更や認知症への理解が進んだことにより、健康診断感覚で受診される方も多くなり、軽度認知障害(MCI)と診断される方も増えてきました。

オアシス開設以降、高齢者の在宅生活を支える関連施設も病院内で事業化されました。現在では、各関連機関との連携を密にとりつつ、入院から在宅療養を支援する体制を整えています。

在宅生活をサポートする中には認知症患者も多く含まれており、入院に際しては戸惑いから混乱をきたしやすい人も多い為に、入院生活がより安心した状況で送れるよう配慮しています。

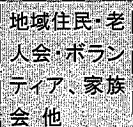
症状に伴う混乱と進行の予防、さらに退院後の生活支援を念頭に退院調整を行い関連機関との連携を取り、スムーズな入院医療から在宅医療への移行に努めています。最近では、地域連携室を通して、他の医療機関に入院している方の退院の援助などにも関わる機会も増えています。

オアシスは、認知症についての医療情報の発信源として、院内・外の職員、住民の方の啓発啓蒙活動を通じて認知症の理解を地域に広め、本人及び家族や在宅支援スタッフ、施設スタッフを支える要としての役割を担ってきました。開設からの12年を振り返り、誰もが「この町に、こんな病院、こんな施設やサービスがあったらいいな」また、住みなれた地域で安心して医療提供ができるよう地域の皆さんと考え、実現させてきたあゆみや活動をここに報告したいと思います。

〔 熟年デイケアの紹介 〕

熟年デイケアは、平成12年7月開設(火曜日)されました。現在、介護保険の改正とともに、認知症の予防も幅広くサービスとして受けられるようになってきましたが、当院では、まだまだ模索段階であった時から、精神科デイケアの1日を熟年デイケアに当てました。特に、デイサービスの利用をしづらい方、老年期うつ状態の方、認知症の初期の方へのアプローチとしてプログラムを準備し、治療と同時に家族ケアを行ってきました。医師、看護師、心理士、医療福祉相談員、作業療法士等が、専門的立場で個々に関わることができました。元気な方を避けひっそり過ごすうつ状態の方、物忘れが気になり隣人との接触を避け引きこもりとなった方、現在MCIと診断される方や若年性認知症の初期の方などが、同じ時間と空間をそれぞれの目標に向け、プログラムを通して楽しみながら治療・援助を受けていただきました。それにより、「病院にリハビリに行っているのよ」と言うことで若年性の方や男性の方が通院しやすく、デイケアになじむことにより介護保険サービスを利用していく時には抵抗なく移行できた事例が多くあります。ハンディキャップを持つ方に援助する事がきっかけで、自信を取り戻し心身が安定した方、趣味へとつながった方もいます。今後は、『難事例のサポートも必要では』と展開を検討しています。

～熟年デイケアのヒトコマ～



- * 豊郷病院とオアシスの連携
- * 豊郷病院を母体に持つ関連施設との連携
- * 医療・福祉・介護ケアネットワークづくり

2. 地域の紹介

1) 滋賀県における、認知症に関する専門医療機関の現状

(イ) 老人性認知症センター：県内に4カ所



豊郷病院（オアシス） 平成7年に開設。

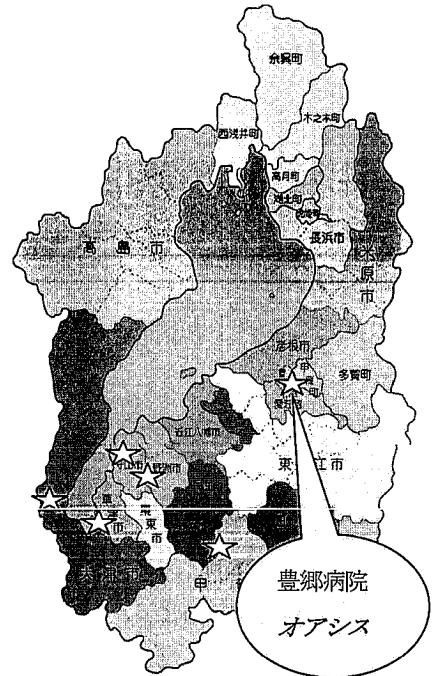
水口病院

琵琶湖病院

瀬田川病院

(ロ) 地域的な位置関係と来院される患者の居住地

豊郷町は、琵琶湖の東に位置し、
長浜市・米原市・彦根市
多賀町、甲良町、愛荘町
東近江市、近江八幡市、安土町
などが主なエリア。



(ハ) その他の専門医療機関

守山の成人病センター、医療法人藤本クリニック（もの忘れサポートセンターしが）を含む6ヶ所のもの忘れ外来があります。

また、平成18年度より始まった認知症相談医養成研修を受講した開業医は県下140名以上になり、県内各医師会では、開業医の医師を中心に「ケアネットワーク」の研修会が企画され、地域医療と福祉の連携を模索しつつ認知症医療福祉の質の向上を目指しています。一方で、病院と地域の連携については、認知症患者の入院医療から地域へのスムーズな受け渡しについての試みは、始まったばかりです。

(二) 豊郷病院の地域背景

豊郷病院は滋賀県東部に位置し、彦根保健所管内の唯一の有床精神科を持つ病院です。オアシスの専門外来には、滋賀県の東部（東近江、彦根保健所管内）及び湖北（長浜保健所管内）の一部の地域に居住する方が通院しています。

この地域は、彦根市を中心に旧市街地からJR沿線の京阪神への通勤者が住む新興住宅街が広がっています。一方、郊外は田園風景が広がる農村から山間部までが含まれます。古くから、地縁、血縁を大切に、お互いの関わりを大事にし、どこに誰が住んでいるかが分かり合う地域と、他府県からの転居者が集まり、明るく集う町並みの広がる地域になっています。郊外での移動は、もっぱら自家用車が使われ公共機関の利用は限られた範囲にとどまっています。高齢になっても日常の移動に自家用車は欠かせません。

2) 地域で必要とされて設立された豊郷病院の創立史

琵琶湖の東、風光明媚な田園地帯に位置する財団法人豊郷病院は、豊郷町出身の起業家、七代目伊藤長兵衛翁が、当時のこの地の深刻な医療状況を憂い、郷土愛と報恩の精神から1925年（大正14年）に浄財を寄付して設立されました。当初の病者、社会的弱者の側に立った病院の理念は、今日に脈々と引き継がれ、福祉・介護にも厚い地域支援病院として運営されています。同時に医療技術の進歩、医療を取り巻く社会環境の変化に立ち遅れないように、常に知識を吸収し病院の改革を行い、地域の中心的な医療施設として認知されています。

「医療人である前に常識ある社会人であることをモットーに、先人の築いてきた歴史ある病院をさらに地域と密着した病院へと発展させたいとの思いで、スタッフ一同日々努力しています。」

病院の基本理念

豊かな郷で心と体の健康を 家族のように

豊郷病院の基本方針

- 1, 郷土愛と博愛の創立精神に基づき、地域の医療・保健・福祉を支える。
- 2, 医学進歩に同調し、わかりやすく信頼される医療を行う。
- 3, 温もりと心をこめたサービスで、快適な療養環境を築く。
- 4, 患者さまの権利を尊重し人権をまもる。
- 5, 職員の労働環境に配慮し、効率よい安定した病院経営を行う。

3) オアシスの開設時の状況

高齢者人口の増加に伴う認知症患者の増大が危惧されたおり、滋賀県内でも認知症啓蒙活動にいち早く彦根保健所が取り組み、認知症ケアに関して、現在の宅老所のようなものを実践した事例もありました。同時に保健所内で浜松方式等の普及や他の認知症ケアや診断について、積極的に普及活動を行ってきました。管内の市町村でもこれに呼応する形で保健センターが中心となり「かなひろいテスト」や認知症に関する知識の普及活動を行ったのですが、実際の現場では、認知症（痴呆症）という言葉だけが先走り、実情は「どうしていいのかわからない」「そのメカニズムさえ理解できていない」状況であり、『認知症になるとみんなが困ってしまう』現状に直面しました。患者の援助には地域活動が重要であることは間違いないものの、そのためには中核となる疾患の理解が不可欠であり、認知症の診断、及び関連する知識の普及や啓発が可能な認知症センターの開設が切望され、県下初めての認知症疾患センターを豊郷病院が開設することになりました。

「お年寄りの脳とこころの相談室」としてセンターが開設された翌年、老人保健施設パストラルとよさと、を開設。この2つの事業は、浜松医療センターが、近隣の老人保健施設と連携することで、医療と認知症ケアを科学的に分析し、認知症のより良いケアを見いだそうとされたことによるものでした。このことをきっかけに、医療機関と在宅をつなげ、慣れ親しんだ地域で安心して生活が続けられるよう、数々の諸施設が豊郷病院を母体として開設されました。

豊郷病院 老人性認知症センターと関連施設の あ ゆ み

大正	14年	(1925年)	4月	財団法人 豊郷病院
昭和	32年	(1957年)	4月	精神科・神経科新設
	33年	(1958年)	10月	総合病院の指定
	45年	(1970年)	3月	医療相談室開設
平成	7年	(1995年)	6月	老人性(痴呆疾患)認知症センター並びに認知症外来開設
	8年	(1996年)	6月	老人保健施設パストラルとよさと開設
	9年	(1997年)	12月	訪問看護ステーションレインボウとよさと開設
	11年	(1999年)	11月	医療相談室から医療福祉相談室へ名称の変更
			12月	訪問看護ステーションレインボウはたしように開設
	12年	(2000年)	4月	介護保険制度発足
				居宅介護支援センターマックスとよさと開設
				ヘルパーステーションピンポンとよさと開設
			7月	精神科デイケア開設 (精神科デイ・熟年デイ)
	13年	(2001年)	5月	訪問リハビリテーションアイルとよさと開設
	14年	(2002年)	2月	彦根市デイサービスセンター きらら
				彦根市在宅介護支援センター及び
				彦根市グループホーム ゆうゆう開設
	15年	(2003年)	3月	甲良町デイサービス けやき及び
	15年	(2003年)	3月	甲良町グループホームらくらく開設
				甲良町グループホームらくらくに、訪問看護ステーションレインボウが、モデルケースとして訪問開始となる。この研究事業が後に、他の施設にも必要とされ、訪問看護事業が展開していく。
			7月	総合リハビリセンター開設
			8月	地域連携室開設
	16年	(2004年)	8月	訪問看護ステーションレインボウとよさとサテライトひこね開設
				居宅介護支援センターレインボウひこね開設
	17年	(2005年)	11月	訪問看護ステーションレインボウひこねに名称変更し開設
			12月	オアシス家族の会発足

(豊郷病院内 各事業及び施設等の開設報告は省略とする)

3. 活動の内容

(イ) 組織・事業内容

目 的：この事業は、滋賀県から指定され設置し、保健・医療・福祉機関との連携を図りながら、老人性認知症患者の専門医療相談、鑑別診断、治療方針の選定を行い、夜間、休日の救急対応や関係者に技術援助を行うことにより、地域の老人性認知症患者の保健・医療・福祉サービスの向上を図ることを目的としています。

① 職員の組織

医師、看護師、医療福祉相談員、臨床心理士、(作業療法士) 他。

② 事業内容

I) 専門医療相談

；初診前医療相談

・患者家族等の電話、面談照会

；情報の収集・提供

・高齢者総合相談センター・健康福祉センターとの連絡・調整

II) 鑑別診断、治療方針の選定

；鑑別診断→頭部CT・MRI（SPECT検査は他院に依頼）心理検査

；治療方針の選定、移送先の紹介（必要な場合）

III) 救急対応；救急外来にて対応→休日も豊郷病院精神科医師が対応

IV) 個別の患者処遇に係る関係機関との調整

V) 技術援助、啓発・啓蒙活動

VI) オアシス・センター機能の充実；職員の資質向上、研修会、学会出席

VII) その他；熟年デいの運営援助、家族会のサポート など。

(ロ) 診察内容（診察の場から安心が得られる連携へ・バトンをつなぐことの大切さ）

オアシスは完全予約制の専門外来であり、地域に生活する方の通院医療が中心です。受診には院内・外の医師からの紹介により、また、福祉関連機関からの紹介や、家族、本人からの申し出により予約を受けます。診察は、一般検査と脳機能の各種の検査を通じ鑑別診断を行い、治療の選択、同伴の家族や介護スタッフへの介護指導が含まれます。鑑別診断・治療方針の選定後に、かかりつけ医へ継続通院される方は、結果の報告（診療情報提供書）とともにこれまでの医療の継続を勧めます。一方で専門医療を必要とするケースは、かかりつけ医と連携しつつ継続通院となります。当院を希望される場合は、オアシス外来の通院も可能です。

オアシスが総合病院の中にあるということは、認知症の鑑別に際し、治療可能な身体疾患についての対応が可能ということにもつながります。いわゆる行動障害の中には身体疾患の治療により改善可能なケースもあり、並行して他科専門医を受診することで容易に専門治療を受けることができると考えられるからです。また、このことが逆に各専門外来医の認知症への理解が進み、継続して通院している方やその家族の変化までにも気づき、認知症鑑別診断の依頼が増え、認知症の早期発見、早期治療ができる事にもつながっています。「最近様子がおかしい。認知症が進行したのでは？」といってこられる方の中には、身体疾患の継続治療が中心の方もおられます。重度の貧血が見つかり治療することで意欲が出た方や、「食事への意欲がない」といって来院された中には、便秘や逆

流性食道炎の方もおられ、専門医による治療が容易に受けられることで早期治療へとつながることは、認知症を罹患した高齢者の健康の維持についての総合病院の利点を生かしていると思われます。内服に関しても他の専門医に相談ができ、より適切な薬剤管理が可能であり、患者、家族にとっても、一カ所の病院でみてもらえる安心感にもつながっていると考えています。

認知症は、日常生活がうまく送れないという生活障害が問題となります。広く「認知症」が認識される一方で、日常生活をうまく送れる工夫については、個々のケースで同じやり方が通じるとは限りません。医療従事者の多くは治療、処置には長けていても生活障害を医療の目で評価し在宅で援助することは、まだまだ未熟であり容易ではありませんでした。認知症の症状によって引き起こされる日常生活の送りにくさを本人の立場で受け止め、本人の毎日の生活で苦痛に感じる場面を減らすための関わりの工夫が必要となってくるのですが、なかなか理解までいかない時期もありました。

また、本人を支える家族への配慮も同時に必要であり、認知症の方が日常を自宅で安心して過ごしていただくためには、日によって変化する本人の症状・病気の理解と介護の方法を個別に指導する場面も必要となります。時間をかけて関わらないといけないうケースや難事例に対しては、必要な場合は、家族のみに来院していただき話し合いをすることも多々ありました。

また、当院は、病院を母体として在宅医療に携わる訪問看護ステーションを3カ所併設しています。初めから3カ所あった訳ではなく、需要と供給で増えていった経緯があるのですが、関連施設であるということから必然的に認知症の方の訪問看護を依頼するケースも増えていきます。訪問看護師は、混乱期の認知症の方や家族を支えるバックアップ的役割として重要であり、また、在宅医療を支えるスペシャリストとして、今後も重要なものと考えています。オアシスでは、認知症専門の研修を受けた看護師が、訪問看護師の経験を重ね、生活をともにする家族の心情をくみ取り、個々のケースによりますが、外来での顔なじみ関係で訪問看護師と同行訪問することで安心感や信頼関係が得られました。これは、今後も必要な活動と考え、新たな展開も検討の視野に入れていきます。在宅に看護の目が入ることは、他の家族の認知症の早期発見にもつながりました。そしていつの間にか『併設の訪問看護ステーションの看護師は、認知症の方の看護に長けている』と評判をいただき在宅医療の担い手としての役割を果たしています。また、同訪問看護ステーションは、併設のグループホームに制度化される以前より研究モデルとして訪問し、看護職として身体管理をすることで医療との連携を図り、早期発見・早期治療の役割を果たし、そこで働くスタッフの信頼や安心感にもつながりました。この一連の流れは、今後も必要とされ、現在では、他の施設にも訪問事業が展開されています。

オアシスもこの事業をバックアップしています。

(平成19年6月：訪問看護STレインボウひこねの看護師の活動、フジTVで放映)

(ハ) 連携の大切さ：

このように、オアシスは、病院という医療の現場から、住み慣れた地域で継続して療養生活ができ、また、本人や家族が安心していただける為に、受け皿である在宅でのサポートの大切さ、充実さをこの12年を通し身近で感じてきました。

豊郷病院自体も総合病院として在宅施設を整えていったなか、介護のバトンを渡すには、信頼関係が必要です。相談も専門施設からの件数も増え、専門職からも、オアシスのセンターとしての役

割を期待されるようになってきました。

認知症は、病状の進行とともに、身体合併症の発生頻度も多く、当院にかかりつけ医がおられない場合は、地域の開業医や必要に応じて、院外の専門医との連携を図りながら、認知症の診断、治療、介護のみならず、老年期疾患を抱える方の日常生活を見守る事ができるよう、事業を展開してきました。安心して住み慣れた地域で生活していただくために、在宅を支える各種介護サービスのスタッフと研修会とともに開き、常に連携を取ることで、本人や家族が安心して医療が受けられるようにと、依頼や、必要に応じて、ケース検討会やカンファレンスにも参加してきました。現在も、医療情報の発信源として、在宅医療・介護を支える各種関連機関（MAX・レインボウ・アイル・ピンポン等）や他の事業所、福祉関係、開業医や地域の病院とも広く連携を図り、長くなじみのある環境で暮らしていただけることを目標に、医療を提供していきたいと考えております。

4. 活動の成果と今後の展望

1) 活動の成果とその後

(イ) 連携を取った事例・・・ある若年性認知症の男性

平成14年頃は、ご自分の母親がオアシスに通院するので車で送迎のため付き添いに来られていたS氏。平成15年のある日、突然一人でオアシスに来られる。「一度、自分をみてほしい」と言われ、詳しく尋ねると、「妻に言われた」と……。当時59歳。

頭部CT所見で前頭葉と頭頂葉に軽度の萎縮を認め、長谷川式スケールは25～23点でした。認知症の診断で薬物治療が始まりました。まだ自動車の運転はでき、ADLも保たれていました。平成16年より、当院の熟年デイケアに通院を開始。2年後進行がみられ車の運転をやめ妻の送迎に移行して行くのですが、まだ60代前半であったため、妻の動揺は大きく、自宅での様子を話されるたびに、涙、涙でした。その都度、診察や家族会、介護教室、個別の相談でスタッフが関わりサポートするのですが、認知症は悲しいかな、現段階では進行形です。医療福祉相談員と連携し、介護保険の申請をすすめ、介護保険の通所デイサービスへと切り替わっていかれました。診療はオアシスが受け持ち現在も通院中です。そのころには本人は、集団になれ介護保険のサービスもスムーズに利用でき、家族も当初の混乱を切り抜け関わりを学び、次のスタッフにゆだねられた後も安心して地域のサービスが利用できた、という例でした。

このケースは、オアシスで診察を受け、当院の熟年デイケアに参加され、オアシスとしてケース検討会が開かれ、顔なじみの看護師が自宅訪問をかさね、家族の厚い信頼と希望で同系列の居宅と訪問看護が受け持ち、地域の通所介護サービスへと移っていかれたケースです。在宅では、家族の不安を軽くし安心されることにより、認知症患者が安心して生活できると考えます。

(ロ) その他、認知症の啓発・啓蒙

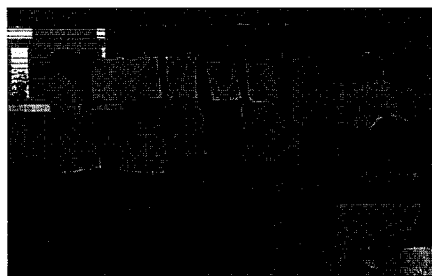
- ① ファミリー教室：現在では、併設の3つのデイサービスとともに行っています。
- ② 豊郷病院公開セミナー（地域住民を対象に身近な疾患の予防と啓発活動を実施）

平成18年3月11日「認知症って老化？それとも病気？」出席者数 約90名

医師・心理士・看護師・医療福祉相談員による講演とパネル展示。

平成19年3月10日「認知症の治療とリハビリ」出席者数 約110名

医師・薬剤師・作業療法士による講演。



本館外来待合いホールにて公開セミナー開催

③ 社会福祉協議会からの依頼：(年に約5件以上)

平成7年オアシス開設当時より毎年各地域より依頼があり、センターの医師や看護師・医療福祉相談員が出向く。

内容としては、主に専門スタッフ向けと地域住民向けに大きく分かれる。

④ 医師会からの依頼：

「認知症サポート医」として医師会の研修会、認知症相談医養成研修などに協力。

⑤ 介護保険関係施設からの依頼：

訪問看護、居宅や在宅支援センターなど。(時には、職種をこえてともに学ぶ)

⑥ 関連施設からの依頼：

とよさと関連施設及び院内職員向けの研修。

⑦ その他：ボランティア・老人会・民生委員・各地域の家族会からの依頼や認知症専門誌の依頼で座談会に看護師が出席するなど。

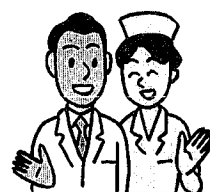
(ハ) 家族のサポート体制と家族の要望

また、オアシスは、開設当初より、各地域の家族会の紹介をその都度してきました。まず平成12年に開催されたのですが、それ以降は、地域の家族会の紹介に終わっていました。しかし、「病状を知っている先生や看護師さんがいるところで・・・」「本人は介護サービスが受けられるが、24時間休みなしの私達は、どこで癒されたいのでしょうか？」等、通院されている家族からの声を受け、平成17年12月より、月1回、運営は家族会側で、病院は、場所の提供と、その時々テーマを受けてスタッフが参加するという形で開催しています。

現在、「この日があるから日々がんばれるのよ。」「仲間がいることで癒される」「新しい認知症情報が分かりました。」等の声を聴きます。今後は、他の家族会との交流を・・・と考えていますが、「まだまだ、自分たちのことで精一杯」との声が多いのが現状です。



外来終了を待って
月1回、オアシス家族会
を開いています。



また、介護する立場により、思いや、接し方、視点が違ってきます。毎日の家事に戸惑いながら日々変わっていかれるご本人を前に、途方にくれ、社会から孤立されていく男性介護者からの相談も増えてきました。オアシスでは、「男の介護」と題して新たなサポートも必要ではないかと考えています。

家族会が発足して1年がたった時より、オアシス家族会通信が発行されました。

家族の思いが詰まった原稿がたまるつど、スタッフがまとめ、発行しています。

～ オ ア シ ス 家 族 会 通 信 ～

(No. 1 娘が自分の母親を他府県から引き取り介護しているケース)

初めてオアシス家族会を開いて早いもので1年が過ぎました。回を重ねるうちに個人個人の悩みや困っていることを話せるようになってきました。「自分だけがどうしてこんな思いをして介護するのか。」という時期もありましたが、皆さんの話を聞いたりしているうちに、「みんな一緒なんだ。」「もっと困っている人がたくさんいる。」事を知らされました。反省しています。この会に出会い、「こんな時にどうしたら。」と相談できる事も、私にとって随分助けられました。「次回にはこんなことをみんなに聞いてほしい。」と思い、1ヶ月の来るのが待ち遠しい時もあります。介護している人は、親、嫁、舅、ご主人と立場も生活も違いますが、『一日一日を本人が無理なく過ごせるように』と願う気持ちは一緒です。昼夜の区別なく生きていく本人と向き合って、その日その日を越えていく時に、やっぱりオアシス家族会に出会えて良かったと思っています。

先生方のアドバイスをいただいて、『本人たちがこれから病気の進行を少しでも遅らせ、人格が変わることなく生きていけるように』私たちも、一日一日を頑張っていきたいと思っています。今を話せる、聞いてもらえるこの会をこれからもよろしくお願いします。今は“ 今日一日が、私の命！ 今日一日をどう生きる？！ ”という気持ちでいっぱいです。今後とも私たちをどうぞ、見守ってください。

(No. 2 ご主人の父親を嫁の立場で介護しているケース)

他の病気の場合とは違って認知症の場合、介護する側の努力や思いやりで、認知症患者はそれなりのリズムある生活が送れると思います。でも私たち介護者は、聖人君子ではありません。日々の生活に追われる平凡な人間です。毎日、毎日張りつめた気持ちを維持することはできません。弱音を吐きたいこともあります。しかし、無理解な人々（友人でさえも）に、胸の内を明かしても愚痴としか思ってもらえません。ただ、受けとめてもらいたいだけなのに・・・。

“オアシス”の集まりでは、同じ悩みや苦しさを共有する仲間、同志の存在を実感できます。介護者の“孤立感”を遠ざけてくれます。そして、この実感が何よりの日々の空しさの支えとなります。今年も無事乗り切っていけそうです。ありがとうございます。

(No. 3 ご主人の母親を嫁の立場で介護しているケース)

『オアシスの仲間に入れて頂いて・・・』

オアシスの診療を受けてからもうすぐ4年が過ぎます。要介護の認定を受けてから丸5年、もっと永い日が過ぎたように思います。オアシスで私たちが愚痴りながら話していると、看護師さんが体験談を話され、この病気の人の対応を教えてください、『おばあさんは病気なんだ、“焦らず”“やさしく”“否定せず”接しなければ』と思っても大変難しいことです。そしてこの病気は『おおきに』が言えないのですね。その一言があればもっと素直に付き合えるのに・・・・。この頃は、できる限り、起きているときは私のそばにいてもらうようにしています。次から次へ思っていないことが起こります。これからも指導してください。

先日も診療時間前に電話しました。先生が電話に出てくださいって、教えてください助かりました。また、その日の午後、看護師さんからも電話をもらって心強かったです。ありがとうございました。

これからもデイサービス、ショートステイ、そして豊郷病院のオアシスの方々に助けて頂きながら、おばあさんと交わっていこうと思っています。よろしく願いいたします。

(No. 4 娘が、母親を長距離介護しているケース)

長距離介護を始めてちょうど3年が過ぎた頃、訪問看護師さんにお誘いを受けてこの家族会に初回から参加させて頂いております。おかげさまで、私たちの心のよりどころとして文字通り泉が湧くように、日頃の悩みを顔を合わせるにより、『その時だけでも笑顔になれば』と思います。私の立場は、他の家族の方とは少し違いますが、身体的な病気と違い認知症患者をかかえる家族の悩みは、皆同じです。そんな悩みをこの家族会に行けば『聞いてもらえる』『自分の痛みとして聞く耳が持てる』話の和の中に加わって頂ける看護師さん、要所での確かなアドバイスをいただける先生、ほんとうに感謝しております。テレビで同じ病気を苦にした痛ましい事件を見るにつけ、この会のおかげで私も思いを新たに気持ちを切り替えて頑張れます。これから日々変わりつつある人格に、諸先輩方のご意見を聞かせていただきながら、どんな形であれ最後までつきあっていくつもりです。

(No. 5 奥様が、徘徊するご主人を介護され、寝たきりとなられた今も、在宅で介護されているケース)

『同士から元気をもらって帰路につく！！』

先日の新聞で、西明寺のご住職中野様の記事で《苦しい事を素直に『苦しい』と話せる“避難所”が人には必要である。周りに誰も話せる人が居なければ、寺に話しに来る、という道もある。》と書かれていました。また、この頃の介護事件報道でも、「どちらの味方にもなれるなあ」と思うこともあります。

私達は、先生や看護師さん、オアシスの同士（家族会の皆さん）の方々に、話す事で救われているように思います。私は、世間では余り人前で苦労話はしない方ですが、家族会では違います。時に、私の話でワンマンショーに成る事もあります。思い起こせば、7ヶ月の間、一日に1時間しか眠れなかった時期もありました。「なぜ私だけこんな思いをするのだろう」、と聞いていましたが、今では、可哀相に思え、愛おしくも思えます。一時期の苦労も一段落し、他の方の話を聞くと、「ああ、そうだったなあー」と振り返ることができます。

今回の集まりを楽しみに、同士から元気をもらって帰路についています。

2) 今後の展望 (課題)

老人性認知症センターは、介護保険制度が整備される以前の認知症医療の黎明期に開設され、現在に至ります。介護保険制度により高齢者医療、特に認知症の方の支援に関わる職員も増えてきていますが、基本的な関わり方は変わるものではありません。医療、福祉や介護の視点の違いはあるものの認知症の方を支える目標は同じです。医療の場が敷居が高く相談がしづらいという福祉関係者がいることも事実ですが、一方で、気楽に受け持ちケースの相談を持ちかけてくる管外の福祉施設の職員もいて、今後も気軽に受診や相談のできるつながりを用意していきたいと考えています。最近では、以前にも増して(平成15年8月 院内に地域連携室開設)地域やその他の医療機関からの受診依頼が増えてきました。その中には、入院中のケースの紹介もあり、相互のつながりが強まった感があります。認知症の困難なケースを抱え、看護に悩む病棟や家族の様子も見えてきました。今までの地域との連携の視点を、当院だけでなく入院生活をサポートする管内・外の病院職員へと、認知症センターとしての役目は広がっています。

また、介護施設が均質化し従来の介護保険制度になじめない方がいることも事実です。

今後は、高齢者のうつ病、若年性認知症や集団になじめず地域に受け入れが困難なケースのデイ等も医療の立場として検討していかなければならないと考えます。

オアシスは、何も特別な事をしてきたわけではありません。誰でもが少しの工夫で可能となることを伝えあい広げていきたいと考えています。認知症でも慣れ親しんだ地域で安心して暮らしているように、医療提供の場として皆さんを応援していきます。

認知症を理解することでご本人や家族、そして、そこに関わるスタッフが落ち着いて向き合えることが大切で、それを適切な医療情報として提供することが、認知症を知っていただく第一歩だと考えています。

「脳とこころの相談室」 オアシス より。

平成19年10月15日

財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター・オアシス 看護師：斉藤 容子

協力・財団法人豊郷病院 老人性認知症センター・オアシス・センター長・医師：成田 実
・財団法人豊郷病院 老人性認知症センター・オアシス・非常勤医師：世一 市郎
・介護老人保健施設パストラル・とよさと 副施設長：種村 栄二
・財団法人豊郷病院 医療福祉相談室
・財団法人豊郷病院 地域連携室
・訪問看護ステーションレインボウ
・オアシス家族の会

活動報告(5)

活動名称	おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！認知症高齢者と楽しむ「あしがらシニアキャンプ」
活動要旨	「Camping for All（すべての人にキャンプを）」を理念に認知症高齢者のキャンプを10年以上実施。地域の行政、福祉、学校関係者の協力を得て、少子高齢社会のキャンプ場の使い方を開発・普及し、キャンプのもつ地域づくりの可能性を伝えている
応募者	あしがらシニアキャンプ実行委員会／ 社団法人 日本キャンプ協会
連絡先	（社団法人 日本キャンプ協会）〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内

1)推薦理由

- ・ 楽しいキャンプの中で認知症の人と一緒に過ごすということを10年以上の歴史の中で地道に取り組んでこられた実績がある。その中で認知症に対する体験的な理解を広めてきており、継続的に取り組まれている活動である点がすばらしい。
- ・ 自然とふれあう貴重な機会の中で、自然な形で世代間の交流ができ、支え合いも生まれている。認知症の人が持っている能力を発揮できる場となっている。また、キャンプを支えるスタッフの変化も生まれており、関わる人たちすべてに意義ある活動となっている。
- ・ キャンプ設備の有無でなく、「話し合い、アイディアの出せるスタッフがいるところならばどこでもできる」ことが示されている。そんなことできる？という先入観で見のではなく、若者が企画から参加し、いろいろなボランティアの参加と支えにより実現可能な活動である。全国各地で取り組まれることが期待される。

2)3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！
認知症高齢者と楽しむ
「あしがらシニアキャンプ」

日 程:2007年10月7日(日)～8日(祝) 1泊2日
実行委員会 5月～11月 計4回(このほかに実施担当委員会が1回)
事前研修会 7月～8月 計5回
事前キャンプ(下見・準備) 9月29日(土)・10月6日(土)～7日(日)



あしがらシニアキャンプ実行委員会
(社)日本キャンプ協会

どうしてキャンプなのか？

目標:認知症高齢者のQOL向上

発想:認知症高齢者の住みやすいまちづくり
+
足柄上の環境を生かした
レクリエーションの開発
↓
認知症高齢者キャンプ

+αの要因
担当者のキャンプ経験
1993年からの
認知症キャンプの実践

Camper

女性12名・男性5名(66歳～89歳)



Program

選択プログラム・キャンプファイアー・生活プログラム etc...



玉入れに真剣な表情



ファイアーも
楽しめました



のんびりとおしゃべり



プロの手でお化粧



休憩も大事なプログラム

認知症高齢者キャンプならではの場面も...



堂々と立派なあいさつでしたが、
そのことを忘れてしまわれました



詩吟披露のために用意した
舞台は使われませんでした

夕方少し不安定になられる方や、夜中に何度もトイレに行かれる方、
通気口のレモンを口に運ぶ方など、認知症高齢者キャンプならではの場面も見られました

Smile ! Smile ! Smile !



参加者のお年寄りもスタッフも
たくさん笑顔が見られました

キャンプの評価

- お年寄りのたくさんの笑顔...もちろん、スタッフも (^_^)
- スタッフとして参加した人、それぞれの気づき
 - 認知症について知る→連続講座とキャンプ
(学生・地域住民)
 - 認知症高齢者の可能性と地域のチカラを知る
(家族の立場、福祉施設職員の立場、行政の立場、社協
の立場、地域住民の立場、医療関係者の立場、ボランティ
アの立場、野外活動施設の立場...)

たくさんの種が地域にまかれた



認知症のお年寄りに キャンプは向いている

- キャンプは危険な活動ではない
 - 意欲ある挑戦を可能にするためのリスクマネジメント
- 認知症のお年寄りにキャンプは向いている
 - キャンプの素朴な生活は昔の生活に似ている
 - 柔軟なプログラム変更ができる
 - マンツーマンスタッフが安心を与える
 - 新しい出会いと新しい体験の場となる

...そして、周りの人間が学ばせていただける

おじいさん、おばあさん、
いっしょにキャンプしませんか？

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

キャンプというと、子どもたちが行く林間学校のようなものや、家族で楽しむオートキャンプのようなものを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか？「キャンプは若くて元気な人が楽しむもの」というイメージがあるかもしれません。しかし、それだけではありません。私たち日本キャンプ協会では「Camping for All（すべての人にキャンプを）」を理念のひとつに掲げていますが、その言葉の示すとおり、さまざまな対象のキャンプが実際に行われています。その歴史は意外と古く、昭和28（1953）年には日本で初めての肢体不自由児のキャンプが行われました。ここで紹介する認知症高齢者のキャンプも平成5（1993）年に始まりましたので、すでに10年以上の歴史があることになります。

日本キャンプ協会としても、平成11年に「第1回全国痴呆性老人キャンプ in にいがた」を開催し、以降、大阪、熊本、和歌山…と場所を変えながら、認知症高齢者キャンプの普及に取り組んできました。そして平成19年度は、神奈川県足柄上保健福祉事務所から声をかけていただき、実行委員会の一員として参加する形で「あしがらシニアキャンプ」実施のお手伝いをしました。

お年寄りといっしょに過ごすキャンプ本番は、平成19年10月7日～8日の1泊2日という短いものでしたが、この事業そのものが地域に暮らす認知症高齢者に対する理解を深めるための活動と位置づけられ、そのための仕掛けが作られました。それが「あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～」という5回の連続講座であり、本番の1週間前に行われたプレキャンプでした。この事前準備を通じて、「このキャンプの意味はなに？」「そもそも認知症ってなに？」「認知症のお年寄りとうどう接すればいいの？」「どうすれば認知症のお年寄りと一緒に楽しく安全に過ごすことができるの？」といったことを学び、キャンプに臨みました。

参加された認知症高齢者は女性12人、男性5人の合わせて17人。それぞれにマンツーマンで高校生・大学生を中心としたボランティアスタッフが付き、1泊2日のキャンプを楽しみました。最初はお年寄りもマンツーマンスタッフも緊張気味で、元気よく交わされる「こんにちは。どうぞよろしくお願いします」のあいさつもどこかぎこちなさを残しています。しかし、時間がたつにつれ会話も交わされるようになり、選択プログラムの始まるころには自然な笑い声があちこちから聞こえるようになりました。ボランティアスタッフの作ってくれたおいしい食事をとり、キャンプファイアーの火を囲み、コテージでいっしょに眠り、みんなで歌をうたう。こうして時間はあっという間に過ぎ、無事にキャンプは終わりました。

このキャンプを通じて、お年寄りに楽しい時間を持ていただいたことはなによりでした。マンツーマンのボランティアスタッフがいたことで、とてもリラックスした状態でさまざまなプログラムを体験していただきました。「普段見られないような、とてもいい表情をされていました」というグループホーム職員の声が、楽しんでいただけたことを証明しています。

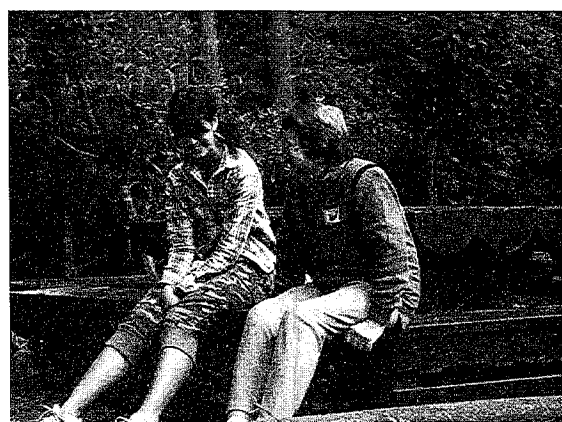
しかし、このキャンプでわかったことはそれだけではありません。ボランティアとしてかかわってくれた多くの人は、自分たちの住む地域に認知症という障害をもった方々が暮らすことに気づきました。認知症がどのような障害なのかということも、少し、学びました。そして、認知症のお年

寄りの心強い味方になってくれる人たちが、身近なところにたくさんいることもわかりました。また、ちょっと車を走らせれば、認知症のお年寄りにも利用しやすい野外施設があることもわかりました。そして、その野外施設も、高齢者の方々に利用していただくために必要な配慮を知ることができました。

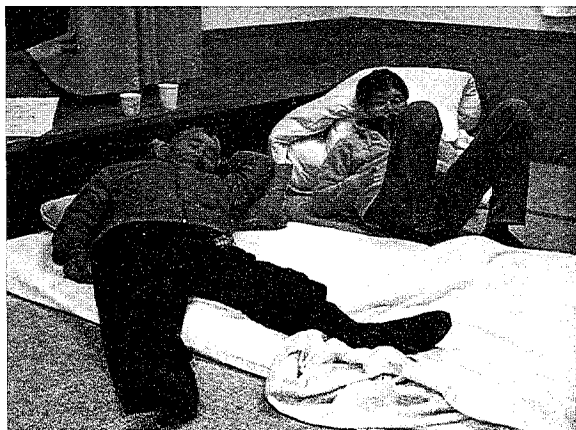
このキャンプでは、17人のお年寄りのために100人を超える人々が集まりました。そのすべての人が、それぞれなりに認知症にまつわる気づきを得てくれたのではないかと思います。すでに、グループホームや社会福祉協議会から、来年もキャンプをしたいという前向きな声が上がっているそうです。そうして、この地域で認知症高齢者のキャンプが当たり前のことになれば、より多くの気づきが積み重ねられ、より多くの人にその気づきが引き継がれるでしょう。それはとても楽しいことですし、キャンプにかかわる者として、キャンプがそのきっかけを提供できたことをとてもうれしく思っています。



赤いバンダナはシニアキャンプの主役の印



マンツーマンスタッフとのんびりおしゃべり



休憩時間も大切なプログラムです



ストロー吹き矢で高得点をねらいます



キャンプの最後に記念撮影

2. 地域の紹介

まちづくり+キャンプ場＝認知症高齢者キャンプ！？

「あしがらシニアキャンプ」のプロジェクトは、約1年前に、神奈川県西部の足柄上地域を管轄する足柄上保健福祉事務所の保健師である山本恵子さんから「認知症のお年寄りのキャンプをやりたいんです」というご相談を受けたことから始まりました。山本さんはキャンプナースとして多くのキャンプの経験があり、地域に対して認知症を知っていただく仕事の担当になったときに、その方法としてキャンプをすることを思いついたのだそうです。

このキャンプの企画書を見ると、事業の背景が次のように書かれています。

- 1. 足柄上は、県域の中でも高齢化率が高い。また人口減の自治体もある。地縁・血縁に基づく助け合いなどのコミュニティはこれまで比較的機能してきた。しかし、これから一層進む少子高齢社会においては、地域で認知症高齢者及びその家族を支援する社会資源の充実を、はっきり課題として意識した上で取り組むことが必要である。※コラム参照
- 2. 足柄上は、キャンプ施設が多い。少子高齢社会では、高齢者のデイ・キャンプなどキャンプ場の新しい使い方も、開発・普及していく必要がある。

足柄上地域の高齢化率は20.0%で、神奈川県全体の17.0%よりも高い。また、その中で高齢化率の高い松田町と山北町では人口も減少しており、高齢化によって従来の地域コミュニティの機能が低下することが危惧される。一方、高齢化率の低い大井町と開成町では、域外からの人口流入によって人口が増えており、従来の地域コミュニティとの融合に課題を抱えている。

	高齢化率(%)	H9.4.1.人口	H19.4.1.人口	人口増加率
南足柄市	20.2	43,798	44,087	100.7
中井町	19.3	10,369	10,064	97.1
大井町	15.9	16,006	17,749	110.9
松田町	22.0	13,235	12,054	91.1
山北町	25.0	14,105	12,317	87.3
開成町	18.7	12,914	15,833	122.6
足柄上地域	20.0	110,427	112,104	101.5
神奈川県	17.0	8,282,288	8,854,830	106.9

※高齢化率は平成18年1月1日のデータ

「認知症高齢者の住みやすいまちづくりが必要である」ということと、「近くにキャンプ場がある」ということを結びつけるのは、山本さんがご自身の経験を通じて、キャンプの持つ地域づくりの可能性を感じていたからだと思うのですが、周囲の人はさぞびっくりしたのではないのでしょうか。心の中で「キャンプなんていやよ」とか「そんなのムリムリ」と思っていた人もいたかもしれません。それでも、それをおもしろいと感じてくれる人々に恵まれ、ゴーサインが出されたのです。

大規模な実行委員会

実施にあたっては実行委員会が組織されました。足柄上地域の1市5町（南足柄市、中井町、大井町、松田町、山北町、開成町）それぞれの行政の福祉担当部署と社会福祉協議会、医師会、病院、広域福祉センターのほか、ボランティア部のある県立大井高校、福祉と看護の学科を持つ東海大学など、多くの機関、団体が名前を連ねていました。もちろん、この事業の目的を考えると、このように幅広いかわりが必要であることはわかるのですが、1泊2日のキャンプのための実行委員会としてはとても大きいなあという印象を受けました。

実行委員名簿

南足柄市高齢介護課長	中井町保健福祉課長	大井町介護福祉課長
松田町福祉課長	山北町福祉課長	開成町福祉課長
南足柄市社会福祉協議会職員	山北町社会福祉協議会職員	開成町社会福祉協議会職員
足柄上医師会会員	足柄上病院職員	広域福祉センターひかりの里職員
県立大井高校職員	東海大学健康科学部看護学科職員	東海大学健康科学部社会福祉学科職員
足柄ふれあいの村職員	足柄上保健福祉事務所保健予防課長	日本キャンプ協会職員

実際、第1回の実行委員会では「なんで私はここにいるのだろう?」「認知症のお年寄りとキャンプなんて危ないよ」と思いながら席に着いていた人もいただろうと思います。淡々と進む実行委員会に「こんなに大がかりな実行委員会にすると、かえって大変じゃないかな?」と心配になったのも事実です。

しかし、その心配は取り越し苦労でした。それぞれの役割が明確になるにつれ、いろいろなことがスムーズに動くようになってきました。もちろん、最後まで最初に抱いた否定的な気持ちを払拭しきれなかった人もいたでしょう。しかし、企画書の中の「地縁・血縁に基づく助け合いなどのコミュニティはこれまで比較的機能してきた」という一文の背景には、ボランティア精神が自然な形で存在しているのでしょう。ボランティアの方々も含め、一度「一肌脱ぐぞ!」となると、大きな力を発揮するのです。

足柄ふれあいの村

そんな中、実行委員の中でいちばん重要な変貌を遂げたのは、「あしがらシニアキャンプ」会場となった足柄ふれあいの村職員の加藤さんかもしれません。

足柄ふれあいの村は南足柄市にある県立の野外教育施設です。利用者の中心はやはり子どもたちなのですが、地域の少子化に対応して利用者の多様化を図りたいという思いを持っていました。また、バリアフリー対応エリアもあるということで、会場として使うことになったのです。しかし、最初からこの認知症高齢者キャンプにぴったりの施設だったというわけではありません。

お年寄りのさまざまな条件を考慮して、たとえば「雨天時にコテージ横まで車を入れられないか」などのいろいろなお願いをするのですが、「ちょっとそれは難しいですね」と言われたこともいくつかありました。ほかの利用者もいるので、その安全も確保しなければいけませんから、ルールを変えるのは簡単ではありません。しかし、参加するお年寄りの身体状況などを考えると、こちらも譲れません。

山本さんをはじめとする保健福祉事務所の方々が、足柄ふれあいの村の方々と何度もひざを交えてこのような話をし、足柄ふれあいの村の責任者である事務所長さんの理解も得ることができました。こうして、全面的なバックアップを得て、キャンプが安全に、円滑に進むためのたくさんの配慮と提案をしてもらえるようになっていきました。キャンプ当日も、加藤さんの配慮に助けられたことがいくつもあります。

「認知症高齢者キャンプをするのに向いているのはどんな施設ですか?」という問いの答は、「ユニバーサルデザインの行き届いたところ」ではなく、「話し合い、アイデアの出し合えるスタッフのいるところ」です。その意味では、結果として、とてもいい施設を使うことができたと思います。

3. 活動の内容

キャンプ本番までの流れ

キャンプ本番に向けた準備作業として、連続講座「あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～」とキャンプの予行演習である事前キャンプが行われました。

連続講座は、実際にスタッフとして参加して下さる方々がキャンプについて学ぶ場であると同時に、キャンプには参加できないけれど認知症のことについて知りたいという方の受講もあり、キャンプを素材に認知症のお年寄りとどのように接すればいいかを学ぶことのできる構成になっていました。毎回、40人前後の方が参加され、この中から中心的な役割を担うボランティアスタッフが生まれました。

あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～講座内容

月 日	テーマ	講 師
7月7日 (土)	シニアキャンプとは ～認知症の方といつまでも自然の中へ～	日本キャンプ協会専務理事 石田 易司
7月14日 (土)	認知症者・高齢者の介護の基本 認知症高齢者への望ましい対応	東海大学健康科学部講師 下西 潤子 川崎幸クリニック院長 杉山 孝博
8月1日 (水)	キャンプのしくみ キャンプのプログラムを考えよう	日本キャンプ協会職員 金山 竜也 足柄ふれあいの村職員 加藤 文昭
8月22日 (水)	高齢者のレクリエーション 認知症の方への地域支援 開成町円中自治会の取り組み	芸術教育研究所所長 多田 千尋 開成町円中自治会 開成町社会福祉協議会
8月29日 (水)	シニアキャンプの安全管理 高齢者の食事 足柄上地域の郷土料理	日本キャンプ協会職員 金山 竜也 保健福祉事務所栄養士 食生活改善推進団体いくみ会

キャンプ本番の1週間前、9月29日には事前キャンプが行われました。参加者は救急法を学び、キャンプ場内の危険箇所をチェックして、その対策を話し合いました。

このとき、食生活改善推進団体いくみ会のみなさんは、キャンプの夕食として提供される食事づくりのリハーサルを行いました。いくみ会の方は大量の食べ物を作ることには慣れているのですが、野外炊事場は勝手が違います。「子どものころは薪でごはんを炊いていたわ」という方もいましたが、すぐに思い出せるものでもありません。注文していた材料とは違うものが届くというハプニングもあり、少し雑然とした状態でした。しかし、その後に綿密な打ち合わせが行われ、キャンプ本番の炊事場は完ぺきに統制の取れたものになっていて、リハーサルの大切さを実感させてくれました。この事前キャンプは、雨が降ったりやんだりする肌寒い中で行われ、時間的にも短いものでした。この条件下で参加者のみなさんが十分に当日のキャンプの様子をイメージできたかどうか少し心配だったのですが、このキャンプの総合ディレクターである足柄上保健福祉事務所の栗原部長の「これで雨の場合のシミュレーションができたわ」というおおらかな一言に、「このキャンプは成功する」と確信することができました。

そして、キャンプ本番の前日、10月6日から多くのスタッフが集まり、事前準備を行いました。

前の週にチェックした危険箇所が目立つようにカラーテープを張り、トイレを使いやすいように整え、楽しい雰囲気を出す飾り付けを準備し…というように、キャンプに向けたしつらえが整えられていきました。また、お年寄りといっしょに生活をする担当のスタッフは、それぞれのお年

寄りの認知症の状況や介助方法、コミュニケーション方法についての情報交換を行いました。

できる限りの準備はしました。しかし、はじめて認知症のお年寄りとキャンプをする多くのスタッフにとって、不安を完全にぬぐい去るのは難しいことだったかもしれません。

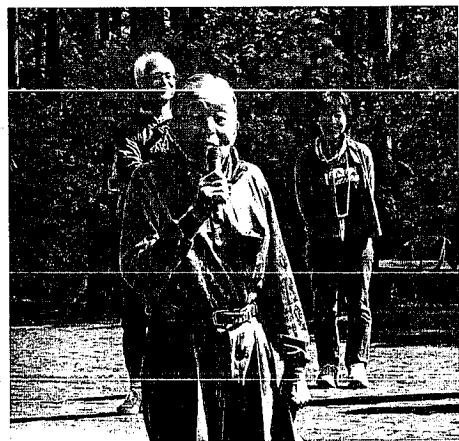
キャンプ本番

翌日、さわやかな秋風の中、キャンプ本番を迎えました。参加者は施設の車に乗って、三々五々集まり、スタッフに温かく迎えられる。

マンツーマンスタッフは事前に顔合わせをしていますから、「こんにちは～。〇〇さん、覚えてますか？」と聞くのですが、その反応はさまざま。「覚えてるよ～」とニコリする人もいれば、ただただほほえみ返すだけの人、「うん、うん」と機械的にうなずく人も。参加者のお年寄りも慣れない環境、見慣れない人たちに緊張しているのでしょう。あるいは認知症の状況によって、マンツーマンスタッフと少し前に会ったことをまったく覚えていない人もいるのかもしれません。少しごちなさの漂う、しかし楽しげな雰囲気でキャンプは始まりました。

はじまりの集いは、いわばキャンプの開会式です。Iさんは認知症高齢者の参加者代表として、キャンプに臨む意気込みを朗々と語りました。思わず、聞いている私たちにも笑みがもれ、緊張がふっと解けたような感じがしました。Iさんに対して盛大な拍手が巻き起こったのは言うまでもありません。

ところが、あとでスタッフの一人がIさんに「いやあ、立派なおあいさつでしたね」と声をかけると、Iさんからは「誰が言うたんか？」との返事。直前の記憶がふっと抜け落ちてしてしまったのでしょう。これは「認知症のお年寄りとキャンプをしているんだな」ということを改めて感じさせられるエピソードでした。



Iさんのあいさつでスタートです

昼食を挟んで、午後は選択プログラムの時間です。広場を囲むようにぐると用意されたプログラムを思い思いに選びます。たくさんさんのプログラムが並んだ様子は、秋祭りの縁日のようです。参加者とマンツーマンスタッフは肩を寄せ合い、「次はボウリングをしましょうか？」「お化粧してもらいましょうよ！」と話しながら、広場を行ったり来たりしています。

選択プログラム一覧

	プログラム名	内 容
1	きんちゃくづくり	リサイクル布を使ったきんちゃくなどを作る
2	フレームづくり	既成のフォトフレームにドングリや木の枝を使って飾り付ける
3	お化粧コーナー	プロの美容スタッフにフェイスマッサージとお化粧をしてもらう
4	詩吟・歌謡コーナー	詩吟を披露していただいたり、みんなで歌をうたったりする
5	お休み処	座ってのんびりおしゃべりしたり、ゲームを楽しんだりする
6	ペットボトルボウリング	ペットボトルのピンをゴムボールを転がして倒し、点数を競う
7	ストロー吹き矢	大小のストローで作った吹き矢で点数を競う
8	玉入れ	10個のゴムボールを的に向けて投げ、入った数で競う

お化粧コーナーはプロの美容スタッフがお化粧をしてくれるのですが、「お化粧してもらいましょうよ！」と呼びかけると、たいてい「こんなおばあちゃんに化粧してもしょうがない」という答が返ってきます。「そんなことないですよ。お化粧はしなくてもマッサージだけでもしてもらったらどうですか？気持ちよさそうですよお」と言いながら、なかば強引に席についてもらいます。最初は「化粧なんかいらん、いらん」と口にされていますが、やがてうっとりとした、気持ちよさそうな表情に。口紅をさした顔を鏡で見ると、より一層明るい表情になりました。

詩吟コーナーは、Tさんが詩吟を披露したいとの要望を事前に聞いて、小さな舞台をしつらえてありました。ところが、人が集まるお休み処で「ここでいいわ」とばかりに、Tさんはよく響く声で詩吟を披露し始め、「え〜、Tさん、始めちゃったの?!」と、あわてて観客が集まります。私たちのあわてぶりをよそに、Tさんはマイペース。その声を引き金に、お休み処のテーブルはやがて歌合戦の会場に姿を変えていました。

ペットボトルボウリングや玉入れのコーナーからは、ときおり、大きな歓声が響きます。お休み処はいつの間にか黒ひげ危機一髪のコーナーにくら替えして、大きな笑い声を発しています。クラフトのコーナーからは穏やかなおしゃべりの声が絶え間なく聞こえてきます。こうして、2時間の選択プログラムの時間は終わりました。



お化粧の仕上がりを確認



力強い声で詩吟を披露



的めがけてボールを投げます

しばらく休憩したあと、いくみ会のみなさんが用意してくれた食事がテーブルに並びました。テーブルに置かれたランタンときれいなお品書きで雰囲気は満点です。献立は、懐かしさを感じさせる郷土料理を取り入れ、けんちん汁にシャケのホイル焼き、小松菜の煮浸しとフルーツヨーグルト。事前キャンプでのリハーサル的成果もあって、しつらえは完ぺきです。夕方になったせいでしょうか、少し情緒不安定になられたのか、「味がついてない」との声をあげられる方がいて、あわててお醤油を用意する場面もありましたが、みなさんがほぼ完食。マンツーマンスタッフと会話を交わしながら、ゆっくりと食事を楽しみました。

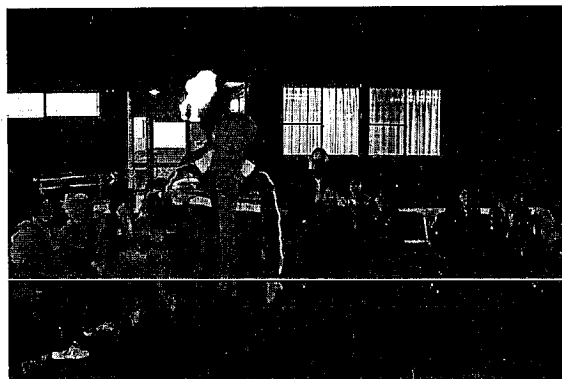
夜のお楽しみはやっぱキャンプファイアーです。しっかり防寒着を着込み、ひざ掛け代わりの毛布を用意して広場に集まりました。Sさんによる点火でキャンプファイアーはスタート。「夕焼け小焼け」のような誰もが知っている歌をうたったり、簡単な手遊びをしたりして楽しめます。30分あまりの短い時間でしたが、最後は徐々に小さくなる炎を見ながら、静かにそれぞれのお部屋

に戻りました。

その後、9時ころにはほとんどの方が眠られたようですが、なかなか寝付けない方もいたようです。その方は日常的に夜になると少し不安になって、「うちに帰る」と言われたりするそうなのですが、いつもと大きく環境の異なるキャンプ場で、その不安がいつもより少し大きくなったのかもしれない。また、お休みになった方も夜中に何度もトイレに起きてこられます。2つのコテージそれぞれに寝ずの番がついたのですが、1時間おきに起きてこられる方もいます。その横には眠そうな顔のマンツーマンスタッフ、そして、ごく自然に寄り添う施設のスタッフがいて、参加者が安全に寢床に戻れるように誘導しています。早朝3時ころには目を覚まされる方もおり、寝ずの番のスタッフとともに、あんパンをおやつにのんびりとお茶の時間を楽しみました。



お品書きもあって、料亭気分？



キャンプファイアーに点火

夜のうちに天気は崩れ、2日目は朝から雨になってしまいました。

小雨になり、「このままやんでくれるかな？」と思えた瞬間もあったのですが、結局、雨が降りやむことはなく、雨用のプログラムに変更。広い集会室に移動しました。

みんなが扇状に座り、歌をうたいます。歌のリクエストを聞く合間に出身地をうかがうと、この土地で生まれ育ったという方々に混じって、会津、北海道、そして台湾や朝鮮の出身だという声も聞かれ、参加者のみなさんの生きてこられた歴史が感じられます。

その後、車いすダンスを楽しみ、おわりの会を迎えました。一人ひとりにマンツーマンスタッフとのツーショット写真の張られた表彰状が渡されます。これはプログラムスタッフの労作で、参加したプログラムが一目でわかるように工夫され、この2日間を思い出すためのアイデアにあふれたものでした。

記念撮影が終わると、参加者のみなさんはそれぞれの施設の車に乗り込みます。「さようなら」「ありがとね」「お元気で」それぞれに言葉をかけながら、車を見送りました。



車いすに乗ってダンス



写真の入った表彰状を受け取ります

4. 活動の成果と今後の展望

6つの理由

こうしてキャンプは無事に終わりました。日本キャンプ協会から参加していた2人を除くと、認知症高齢者のキャンプを経験したことのある人はいないわけですから、お年寄りを見送るまでのスタッフのみなさんの緊張と、その後の安堵はとても大きなものだったでしょう。お年寄りが帰られた直後のスタッフミーティングでは、「参加してよかった」という声が多く聞かれました。

このときもっとも大きな安堵を感じていたであろう、この事業の言い出しっぺである足柄上保健福祉事務所の山本さんに「このキャンプをやってよかったなあと思う理由を“5つ”教えてください」とお願いすると、次のような“6つの理由”が返ってきました。

- ① 認知症高齢者の方とボランティアスタッフにたくさん笑ってもらえた
- ② 足柄上地域の課題であると考えている世代間交流がさまざまな形で図れた
- ③ 多様な立場の人たちの出会いの場が作れた
- ④ グループホームのプログラムに野外活動を入れてもらえる可能性が出てきた
(ふれあいの村に自分たちで行こうというグループホームが現れた)
- ⑤ 認知症の方の健康的部分に周囲がかかわり、幸せそうな顔を見られたことで家族の積年のつらい気持ちと和らいだ人がいた
- ⑥ 家族も高齢者も施設職員もボランティアもスタッフも、それぞれ関係を持つことで「やる気」「勇気」「がんばる気」を与え合うことができた

どれも「なるほどなあ」と思えることばかりです。

①の笑顔は、確かにキャンプの期間中、あちこちで見られました。はじめりの会で見事なあいさつをしたIさんの得意げな笑顔と、それを見つめる周りの人たちの笑顔。広場の片隅でマンツーマンスタッフと話しながら、自然とあふれてくるほほえみ。プロの手で化粧をしてもらって、鏡を見つめるうっとりとした笑顔。ペットボトルボウリングで高得点を取ってニコリ。キャンプファイアーのときのゲームで失敗して、大きな笑い声が起こったこともありました。そう言えば、夜中に「おなかすいた～」と本部にやってきて、カップラーメンをすすする若いスタッフも笑顔でした。記念撮影はもちろん笑顔で。そして、参加者のお見送りのときも、笑顔で手を振り合いました。

キャンプ終了直後のスタッフミーティングでは、涙顔もちらほらと見られましたが、それはうれしい涙だったように思います。

②の世代間交流については、シニア世代のボランティアの方々の張り切りと、心遣いが印象的でした。認知症がテーマの講座であれば、受講者がシニア世代に偏るということはよくあるでしょう。しかし、今回はそこにキャンプという実践が伴ったため、高校生や大学生も参加していました。おじいちゃん、おばあちゃんと孫ほどに違う世代がいっしょにうまくやれるかなというのは無用の心配でした。

シニア世代の方々がリーダーシップを発揮し、若者はそこから素直に学ぶ。そして、自分たちで動き出し、シニア世代の方々が温かく見守る。そんなことが自然に起きていたような気がします。

③の多様な立場の人たちの出会いは、今回のキャンプを支えた重要な要素でしたし、これからの新たな展開を生み出す種子となるものでもあります。キャンプの期間中、「今度、うちにもボランティアに来てくださいよ」という、“ボランティア活動の商談”があちこちで行われているのを耳にしました。こうして地域の中でボランティア活動が広がり、ボランティアの存在が定着していく

ならば、確かに「キャンプをやってよかったなあ」と思えます。

高校生や医療や福祉を学ぶ大学生、研修医、社会福祉施設職員などが協力して動く中で、進路や将来の夢について話し合う場となったことも評価できる点です。

④の認知症グループホームが野外活動をレクリエーション活動に取り入れる可能性が出てきたことは、「キャンプをいろんな人に楽しんでもらいたい」と考えている私たちにとって、とてもうれしいことです。自然の中で素朴な生活を体験するキャンプは、今の高齢者に向けた活動です。認知症の方にとっては、マンツーマンスタッフとともに過ごす時間は心地よいものですし、回想法のような効果も期待できます。季節の変わり目ごとに自然の中に出かけてみる、そんなことが当たり前になったら素敵です。

⑤のご家族に与えた影響については、キャンプの数日後、こんな話を聞きました。

グループホームで暮らすYさんは、奥さんとともにキャンプに参加されていました。キャンプ期間中のYさんは穏やかにほほえんでいて、「やさしそうな方だな」と思っていたのですが、若いころには家庭内で暴力をふるうこともあったとのことで、奥さんは大変苦労されていたそうなのです。しかし、キャンプの1泊2日の間、若いボランティアスタッフと過ごすYさんはとても穏やかで、楽しそうで、奥さんは「昔のことはもういいわ」と思えたというのです。私には奥さんの心の中まではわかりませんが、奥さんがそう思える場面をこのキャンプで提供できたことは本当にうれしく思います。

また、Aさんの息子さんご夫婦は、「手伝うつもりで来たのに、母のことはボランティアさんに任せっきりで、私たちもすっかり楽しませてもらいました。こんなに手伝ってくれる人がたくさんいるなんて思ってもいませんでした。夢のようです」という感想を残してくれました。たとえ自分の親のことであっても、日々の介護はとても大変なものです。献身的に働くボランティアの姿を見て、元気とか勇気とかを持ち帰ってもらえたとしたら、これもまた本当にうれしいことです。

⑥のみんなが「やる気」「勇気」「がんばる気」を与え合うことができたというのは、山本さん自身が「やる気」「勇気」「がんばる気」をもらったということを意味するのでしょうか。これは心強いことです。

このキャンプの準備を進める中で、私は山本さんから「このキャンプは足柄上だからこそ、できるんだと思うんです」という言葉を何度か聞きました。これはたくさんの人たちの理解と協力を得られたことに対する、山本さんの感謝の気持ちの表れでしょう。もちろん、私の立場からは「ほかの地域でもできますよ」と言いたくなりますけれど、このキャンプを通じて、山本さんが足柄上という地域に対する信頼を強くできたことは、本当によかったと素直に思います。ボランティアとして参加した県立病院の研修医からは「認知症というレッテルを貼って社会的に制限するのは間違いかも」という声が聞かれました。こんなふうにこのキャンプに参加した施設職員や行政職員、社会福祉協議会職員、そして地域の方々が「やる気」「勇気」「がんばる気」を見つけたなら、今後、この地域には認知症のお年寄りが暮らしやすくなるための試みがあちこちで生まれてくるはずです。

この事業の企画書には事業の趣旨が以下のように書かれているのですが、山本さんの“6つの理由”を見ると、事業の目的はほぼ果たされたと評価していいと思います。

【事業の趣旨】

- ① 認知症高齢者等が野外でのキャンプを通じ、自然やボランティアとふれあい、安心のおける環境のもとで自分を取り戻すプログラムに参加し、QOLの向上を図る。
- ② 若者を中心とした地域のボランティア参加を促進し、ボランティア養成講座やキャンプへの参加により認知症への理解を深め、認知症になっても安心してノーマルに暮らせる地域づくりを考えるきっかけとする。
- ③ 地域で認知症高齢者等の支援にかかわっている、市町の地域包括支援センターや民間の老人ホーム・訪問介護等の関係機関が、日常生活とは異なる環境・プログラムでの高齢者とのかかわりにより、認知症高齢者が生き生きと暮らす時間を持つ可能性について模索し、理解を深める機会とする。
- ④ キャンプ場関係者や市町の観光振興担当者が、高齢者向けの野外活動プログラムの検討・実践を経験することを通じて、地域内の野外活動施設における高齢者利用の拡大を図る一助とする。

もっと気軽にキャンプができるように

地域における認知症の理解を深めるという意味では、高い点数を与えることのできるキャンプでしたが、ここでは少し違った視点で評価をしてみたいと思います。

今回のキャンプでは、17人の参加者に対して20人以上がかかわる実行委員会が組織され、100人以上のスタッフがキャンプを支えました。この規模の大きさについては、少しマイナスの部分があったのも事実です。

まず、この大きな組織を動かすための大変な労力が必要だったことが指摘できます。資料を作り、時間の調整をし、スタッフの出入りを把握するといったことに事務局は多くの時間を割くことになりました。また、100人のスタッフは1泊2日の間ずっといたわけではなく、ある人は選択プログラムの時間だけ、ある人は食事づくりだけというように、たくさんの人が出入りしていたため、雑然としてしまった部分もあります。

もちろん、今回のキャンプは、キャンプをきっかけにできるだけ多くの人に認知症の方を支えるチカラになってもらおうという目的があったので、たくさんの人がかかわることのできるこの方法を否定することはできません。しかし、この次はもっと気軽に、もっと小さなグループでキャンプができるようになればいいなと思います。

この私の願いは、山本さんの“6つの理由”の中にもあったように、この地域で来年、さっそく実現するかもしれません。

キャンプでのお年寄りのイキイキとした姿を見て、あるグループホームが生活の中に野外の活動を取り入れたいと考えているというのです。グループホームの入居者は9人。マンツーマンのスタッフと、食事などの生活部分をサポートしてくれるボランティアが全部で15人も確保できれば、キャンプは可能になります。デイキャンプならば、もっと気軽にできるでしょう。

グループホームなどの福祉施設では、利用者の生活の質を高めるレクリエーション活動の必要性を強く感じながら、実際にはなかなか難しいという現状があります。しかし、このキャンプを通じて、その必要性を再認識し、ボランティアの協力を得て行うキャンプという方法の可能性を確認しました。同時に、地域の中で認知症のお年寄りのキャンプをサポートしてくれるボランティアも育ちました。社会福祉協議会などが両者をつなぐコーディネートすることができれば、この地域に認知症高齢者のキャンプが根付いてくれるのではないかと思います。

お年寄りにキャンプは向いている

スタッフとしてかかわった人の中には、今でも「やはり認知症高齢者にキャンプは危険なのではないか」という思いを持っている人がいるかもしれません。考えれば考えるほど、野外での活動は施設の中にいるより危険がいっぱいあるような気がしてきますし、普段と異なる環境に置かれることでお年寄りを不安な気持ちにさせてしまうこともあるでしょう。

でも、私は認知症のお年寄りにキャンプは向いていると思っています。自然の中で遊んだり、薪で炊いたご飯を食べたりすることは、若く元気だったころに体験してきたことです。懐かしい環境の中での活動には回想法のような効果も期待できるでしょう。安全に関しても、周囲の人がいくつかの配慮をすることで、危険を極力小さくすることが可能です。そして、キャンプに来たことで、いつもと違う環境に不安な気持ちになって、少し不安定な状況になられたとしても、それは必ずしも悪いことではないと思っています。たとえ認知症になっても、新しい人に出会い、新しい経験することによって人は成長すると考えれば、なんの刺激もなく、なんのトラブルもないことがベストな選択だという考え方は消極的に過ぎるでしょう。キャンプの中で少し不安定になれる場面があっても、それはイキイキと楽しく過ごした時間を帳消しにするものではないと思います。

キャンプという非日常の場だからこそその気づきがあります。今回のキャンプでも、保健福祉行政の立場から、社会福祉協議会の立場から、社会福祉施設の立場から、高校や大学といった教育機関の立場から、野外教育施設の立場から、そして地域住民であるボランティアの立場から、さまざまな気づきがありました。これらの気づきも、認知症のお年寄りがキャンプに参加してくれたからこそ得られたものです。もちろん、1回のキャンプで地域社会ががらっと変わるとは思っていません。でも、小さな種子はたくさんまくことができたかなと思います。この先、この種子から認知症のお年寄りの生活の質を高める小さな芽が、たくさん出てくることを期待しています。



たくさんの地域のチカラがキャンプを支えた

活動報告(6)

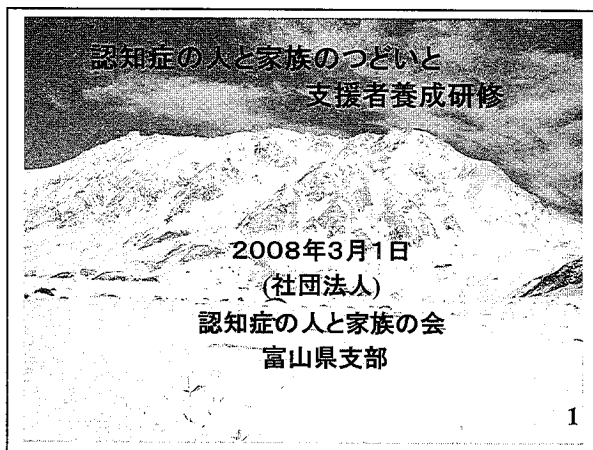
活動名称	認知症のひとと家族のつどいと支援者養成研修
活動要旨	認知症の本人を中心とした「つどい」は、昨年より、寒さの厳しい1月を除いて毎月開催。家族の会会員への支部報や県の高齢福祉課を通して案内。余暇活動のほか、専門職も対象にした支援者の養成講義や本人同士の話し合いを実施
応募者	社団法人 認知症のひとと家族の会 富山県支部
連絡先	〒930-0093 富山県富山市内幸町 3-23 菅谷ビル 4 階

1) 推薦理由

- ・ 各地に家族会が多いが、認知症の本人と家族と一緒に「つどう」ことは、まだあまり取り組まれていない。介護者の息抜きや学びのための活動であると同時に、本人たちのつどい、本人自身の活動の芽吹きを感じる活動である。
- ・ 専門職も含めたサポーター養成も共に行っている。家族や本人の力を最大限引き出す中で、専門職も多くのことを学んでいる。特に専門職から「こんなにゆっくり認知症の方にむきあったのははじめて」との声もあがり、実際の認知症ケアの変化につながっている。
- ・ 大きな仕掛けを必要とせず、定期的で丁寧な活動の継続、居場所を設け、そこから絆が生まれ、さまざまな活動に発展していく活動は他の地域でも展開できるものである。

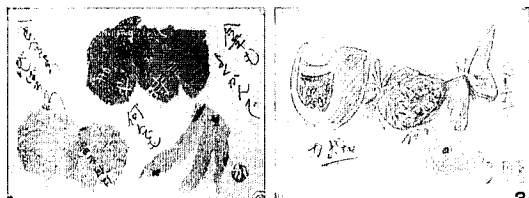
2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。



認知症の本人と家族のつどい

高齢者も若年も本人家族も一緒に



3

家族支援プログラムへの 取り組み

県との協働事業として



4

2007年

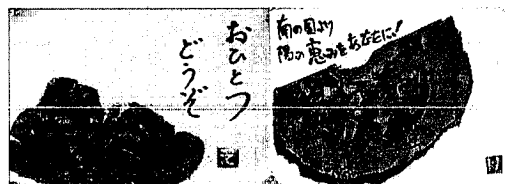
認知症の本人と家族のつどい
支援者養成

本人・家族から学ぶ専門性



5

ひとりひとりが輝き 家族が
気楽に話せる場(環境)作り



6

2007年

「てるてるぼうずの会」11月発足
若年認知症の本人と家族が
企画運営を
サポーターの協力のもと行う。



2007年12月16日 手づくりクリスマスパーティー「ふきのとう」にて

7

<<これからの取り組み>>



認知症であっても笑顔で
健やかに暮らせるように
がんばらない あきらめない ゆっくりと

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

認知症のひとと家族の会富山県支部では、昨年より認知症のひとご本人を中心にした「つどい」を始めている。日本各地でこのような活動が始まっているが、これから始める方のご参考になればと思い、私たちの経験をご紹介します。

数年前より、毎晩行っている「電話相談」に若年の介護家族から相談が相次いでくるようになった。その介護家族に「つどい」にお誘いしたところ、「本人を置いては行けない。一緒に参加していいだろうか」との声があり、「どうぞ、どうぞ」ということで高齢者も若年の家族もそして認知症の本人も参加するつどいが始まった。つどいは昨年からはまり、本年は2年目となる。寒さの厳しい1月を除いて残りの月は毎月開催されている。家族の会会員への支部報などを通した案内や県の高齢福祉課からの案内で呼びかけている。

毎回の参加者は家族と支援者も合わせて40人～50人で、認知症の本人は、若年性のひとと高齢のひとを合わせて12～13人が参加している。ボランティアで参加している支援員は、専門職の方と支部の世話人である。

午前中はゲームや歌、絵てがみなど室内で行う活動で、午後はグループに分かれて卓球や散歩などからだを動かす活動である。同時に支援者養成のための講義が行われたり、本人同士の話し合いも行われる。そして本人を中心にして質問をして生活や気持ちの話しを聞くことも積極的に行っている。また、このつどいを通して本人や家族の交流も盛んになっている。たとえば、親しくなった家族同士で集まって話をしたり、山に登ったり、また今年からはまったこととして5月と8月には1泊旅行の「お楽しみ交流」に5家族程度が参加している。

こうして、以下のような成果を得ている。

- ・若年の本人たちが集まり、家族同士も日常的に連絡をとりあうなど、本人のネットワークが広がっている。
- ・本人の一人ひとりの力を最大限に引き出している。
- ・専門職である若い支援者から、このつどいに参加して改めて「認知症のひとの心を知った」「こんなにゆっくり 認知症のひとにむかったことははじめて」との声が上がっている。

また、今後は以下の課題もだんだん明らかとなっている。

- ・物忘れがあっても「仕事」を続けたいと願っている若年の方々と本人をひとりにはしておけないと悩む家族、そんな願いをかなえる「デイ」が作れないだろうか。
- ・若年の場合、経済的な問題が大きいのしかかってくる。特に本人が男性の場合深刻である。障害者年金には病名が決まって1年半かかる。病気があっても支えがあれば仕事ができる。社会的にも貢献したいという願いをかなえるために、社会的なシステムがつくれないだろうか。

2. 地域の紹介

(「富山県高齢者保健福祉計画(平成18年度～平成20年度 平成18年3月)」より)

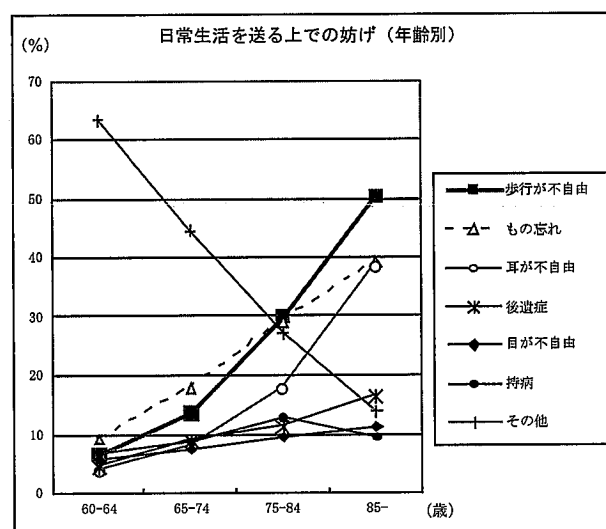
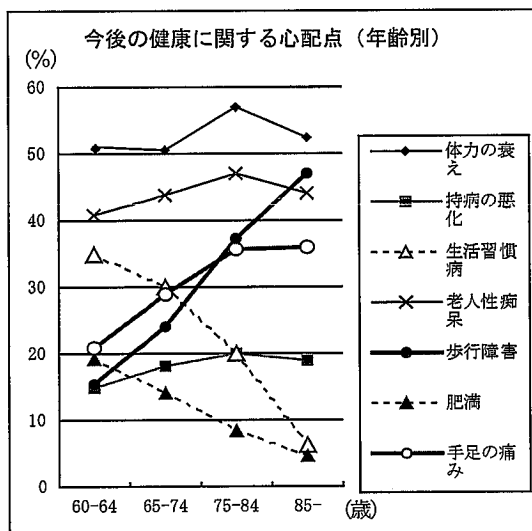
- ・総人口 1,115,393人
 - ・65歳以上人口 256,587人(23.0%)
 - ・75歳以上人口 125,111人(11.2%)
- (以上、平成17年)

・要介護(要支援)認定者数

65歳以上認定者数 40,393人(15.9%)

40～64歳認定者 1,218人

富山県「高齢者生活意識調査(平成17年)」より



3. 活動の内容と成果

1) 活動の実際

「認知症の人と家族のつどい」は昨年からはまり、本年は2年目となる。寒さの厳しい1月を除いて残りの月は毎月開催されている。

つどいはまず、集まりを告知するところから始まる。その方法は1つは家族の会会員への支部報などを通した案内で、もうひとつは県の高齢福祉課から各市町村や介護支援専門員あるいは介護福祉士などに連絡をする際に集いの案内も入れてもらっている。つどいは若年性認知症の人の気持ちに沿うことを進める「本人ネットワーク支援者養成」もかねているので専門職の方への参加を募る意味でこのような県の協力はたいへんありがたいことである。

毎回の参加者は家族と支援者も合わせて40人～50人で、主に富山県民共生センター「サンフォルテ」の部屋を借りて集まっている。認知症の人本人は、若年性の人と高齢の人を合わせて12～13人が参加してくださっている。ボランティアで参加している支援員は、主に若年の方への対応をあらためて学びたいという専門職の方で、それに看取りを終わった支部の世話人が加わっているという人たちである。支援員は毎回同じメンバーだが、本人とご家族は入れ替わることもある。

午前中はゲームや歌、絵てがみなど室内で行う活動で、午後はグループに分かれて卓球や散歩などからだを動かす活動である。一般的なデイと違うところは、同時に支援者養成のための講義が行われたり、本人同士の話し合いも行われることである。そして本人を中心に質問をして生活や気持ちの話を聞くことも積極的に行っている。また、このつどいを通して本人や家族の交流も盛んになっている。たとえば、親しくなった家族同士で集まって話をしたり、山に登ったり、また今年から始まったこととして5月と8月には1泊旅行の「お楽しみ交流」に5家族程度が参加されている。つまり、私たちは介護を提供するというよりも文字通り本人がネットワークを広げていくためのお手伝いをしているのである。

つどいが終わった後、1時間程度支援者が会場に残ってその日の振り返りを行っている。

2) 活動の中から

(1) 富山県支部4半世紀の歩み

呆け老人を抱える家族の会（現・認知症の人と家族の会）が京都に誕生して3年後、富山県支部が産声をあげた。地方新聞の片隅に「痴呆性老人の会が結成された」という記事が掲載された。当初は認知症の人をかかえる高齢者の家族が集まった。小さなつどいは毎月開催されたが、認知症の人本人が参加されることはあっても介護家族が話し合っている間に「預かる」程度であった。

数年前より、毎晩行っている「電話相談」に若年の介護家族から相談が相次いでくるようになった。その介護家族に「つどい」にお誘いしたところ、「本人を置いては行けない。一緒に参加していいだろうか」「どうぞ、どうぞ」ということで高齢者も若年の家族もそして認知症の本人も参加するつどいがはじまった。でも、若年の本人はただ預かるというわけにはいかなかった。

(2) 若年の本人たちが集まる

若年の本人Aさんは57歳、現役のサラリーマン「なんとか定年まで勤めたい」という願いをもっている。55歳の大工の棟梁のBさんはお抹茶のお師匠さん。笑顔がすてきだ。仕事で全国をまわったというCさんは 右半分しか見えないという症状あり・・・この3人がとても仲がいい。家族同士も日常的に連絡をとりあっている。3家族一緒に近くの銭湯に出掛けた。大きなお風呂に入

りたいというCさんの願いはかなえられた。

(3) 本人 一人ひとり の力を最大限に引き出す

高齢者も若年もその介護家族も集まった。毎回の運営は介護家族のつどいは「高齢者」と「若年」や「配偶者」「娘・息子」「嫁さん」の立場別のつどいを開催、若年の本人を中心に「卓球」「キャッチボール」など体を思いっきり動かすこともはじめた。高齢者向きには「散歩」「お話」「歌」「ゲーム」など一人ひとりができること、やりたいことをききながら 行っている。なかでも「絵てがみ」は好評である。絵にむかっているときは集中するDさんは、それ以外はいつも奥さんのまわりをぐるぐるまわっている。

(4) Eさんの音頭にあわせて 全員が輪になって「おわら」を踊りだす

Eさんは建具屋さん。今は息子が引き継いでいる「景気がいいと仕事もたくさんあるが、これからは・・・」と顔を曇らせる。会員がつくってきたビー玉のゲームに夢中、EさんルールはEさんが考案したもの、普通はまっすぐしか進めないルールだがEさんのみはななめに進める。常勝してご機嫌のEさんは、ツヤツヤした顔をほころばせる。

つどいの最後を飾るのは、このEさんが音頭をとる「越中おわら」は富山県人のほとんどは踊れる民謡である。Eさんの声が響く中で汗をかきながら踊って、その輪のままつどいは終了する。「じゃまたね」と声をかけあう。

(5) Bさんのお抹茶で一服

「おはよう」「おはよう。元気だった」と手を握ったり肩をたたいたり、つどいの日はみんな笑顔で集まってくる。「どうぞ、どうぞ」座ったらお抹茶と手作りのおはぎが振る舞われた。Bさんのお抹茶はとてもおいしい「空気をいれるように」という指導で若いサポーターが習いながら手伝う。Bさんの笑顔が最高のよい笑顔になる。おいしいお抹茶を飲んでからつどいがはじまる。

(6) 認知症の人の心に沿うサポーター養成

毎回のつどいの参加人数が増えるに従い、世話人だけでは手に負えなくなった。「認知症の人により沿うサポーター養成研修」を呼びかけたところ今年は30名が集まった。福祉のプロの人が多い。でも、このつどいに参加して改めて「認知症の人の心を知った」「こんなにゆっくり認知症の人にむかったことははじめて」という人たち、つどい終了後の「振り返り」の中で多くのことに気づかされるという。素人の世話人も多くのことを学ぶ機会にもなっている。

(7) 認知症があっても 「働きたい！」

物忘れがあっても「仕事」を続けたいと願っている若年の方々、本人をひとりにはしておけないと悩む家族、そんな願いをかなえる「デイ」が作れないだろうか。世話人のFさんは認知症の人も家族も一緒にすごせる「デイ」がつかれないか模索中。できれば本人が仕事をするのできるデイができないかなど検討中である。

(8) 本人も家族も笑顔ですごせるように

若年の場合、経済的な問題が大きいのかかってくる。特に本人が男性の場合深刻である。障害

者年金には病名が決まって1年半かかる。Aさんの奥さんはパート勤務から正社員へチャレンジした。Bさんの奥さんは2級ヘルパーの受講中、認知症と向き合っていこうと話合っている。Aさんはアルツハイマーと宣告されてから3年、10月20日に無事定年を迎えることができた。

「これから就職先を探したい」というAさん。病気があっても支えがあれば仕事ができる。社会的にも貢献したいというAさんの願いをかなえるために、社会的なシステムがつかれないだろうか、模索中である。

3)「認知症の人と家族のつどい」2007年度の計画(一部)

*活動は寒さが厳しい1月を除いて毎月行われている。下記は最近の例として掲げる。専門職や家族の方を対象とした講義も随時行われている。このほかに、

- ・ 5月27日 午前10時～午後3時
第1部 お話と実技「口腔ケアを始めましょう」
第2部 ご本人と家族のつどい
- ・ (5月、お楽しみ交流。1泊旅行)
- ・ 7月28日 午後1時～午後3時
- ・ 7月29日 午前10時～午後3時
本人ネットワーク支援研修、「本人会議」「介護家族の集い」
- ・ 8月18日 午前10時～午後3時
センター方式にチャレンジ
講義：本人の思いを聞く、「本人会議」「介護家族の集い」
- ・ (8月、お楽しみ交流。1泊旅行)
- ・ 9月2日 午前10時～午後3時
講義、「本人会議」「介護家族の集い」
- ・ 9月30日 午前9時半～午後4時
シンポジウム「介護家族を支える認知症ケアの現場から」、
講義：「認知症の人を地域で支える」、講義：「若年性認知症・最新情報」
- ・ 10月14日 午前10時～午後3時
「本人会議」「介護家族の集い」
- ・ 11月11日 午前10時～午後3時
「本人会議」「介護家族の集い」

クリスマス料理にチャレンジ、「本人会議」「介護家族の集い」



活動報告(7)

活動名称	若年性認知症デイサービス “おりづる工務店” の取り組み
活動要旨	まだまだ働きたいという若年性認知症の方の声をうけ、『会社のような組織をつくり、社会とつながる実感と仕事を成し遂げた充実感をもてる場所』として始まったデイサービス。保育園や市役所から “工務店の仕事” を受注。介護保険サービスの一環のため無償ボランティアだが、就労支援につながることを目指し、実績を積み重ねている
応募者	社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや
連絡先	〒194-0013 東京都町田市原町田 4-26-6 せりがや会館内

1) 推薦理由

- ・ 若年の認知症の方々への支援として、ただ客体とするのではなく、できることを通してその存在を自他ともに確認できる活動である。同時に、この仕事ぶりを大切なこととして認め合う社会や人々をつくる取り組みでもある。社会の人々が彼らにペースをあわせることでこの取り組みは大変素晴らしい。
- ・ 認知症の方々が社会経験を活かして社会に貢献したいという思いを大切に、「仕事」という取り組みにつなげている活動は他に見られない特徴と今後の可能性が感じられる。
- ・ 「働きたい」「人の役に立ちたい」という若年性認知症の人の願いは強く、そのためにも全国的にも広がり期待される活動モデルである。今後はさらに、収入も保障された就労にもつながることを期待したい。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。

若年性認知症デイサービス
“おりづる工務店”の取り組み

社会福祉法人 町田市福祉サービス協会
おりづる苑せりがや 前田 隆行

若年性認知症ご本人の思い・・・

「まだまだ働きたい」
「人の役に立ちたい」
「体を動かしたい」
「社会経験を活かしたい」
「できることからやってみたい」



若年性認知症デイサービス

男性の場合・・・

〈出勤〉→〈仕事〉→〈帰宅〉

何十年と繰り返してきた、当たり前の日常

そこには、

- ・仕事を成し遂げる充実感
- ・社会とのつながり
- ・人の役に立っているという気持ち

おりづる工務店とは？

- ・若年性認知症の男性グループ
- ・市立保育園から“仕事”を受注
- ・ボランティアとして活動
- ・自然と身体を動かす内容
- ・食事は現場付近の定食屋
- ・お茶は園児と一緒に



“会社”の雰囲気作り

- ・タイムカード
- ・打ち合わせ
- ・揃いの作業着
- ・肩書き付きの名刺
- ・リアルな仕事内容
- ・仕事は現場に出向く



仕事内容



- ・プール掃除
- ・壁のペンキ塗り
- ・園庭掃除
- ・落書き消し
- ・ワックス掛け
- ・砂場掘り起こし
- ・剪定

・・・等々

～ある一日の仕事～

- 10:00 事務所到着
作業着に着替え
タイムカード
今日の仕事流れ(ミーティング)
倉庫で道具準備&車両積込
- 10:30 出発
保育園到着
・プール非常階段ペンキ塗り
・床の古ワックス落とし
・砂場の掘り起こし
- 12:30 昼食(現場保育園付近の飲食店)
昼食後は保育園へ戻る
休憩(コーヒータイム)
- 13:40 午前の続き
・プール非常階段ペンキ塗り
・園庭掃除
- 15:10 現場片付け
- 15:20 園児と一緒にお茶
- 15:45 事務所到着
地下倉庫に道具片付け
タイムカード
着替え
- 16:05 終了、帰宅



成果と課題

〈成果〉

- ・社会とのつながりを保っている
- ・一般のデイサービスでは見れない表情、行動(積極性等)が見られた
- ・同年代、同性ならではの会話が弾む
- ・“勤務”を楽しみにされている
- ・生き生きと働く場面がある
- ・若年性認知症の方の想いを表現
「人の役に立っている」
「仕事を成し遂げる充実感」
「身体を目一杯動かせる」・・・等々
- ・発語が多くなった
- ・回覧板で活動の様子が紹介される
- ・夜よく眠れる

〈課題〉

- ・病状の進行と仕事内容のギャップ
- ・利用者数の確保
- ・就労支援となるため、報酬の確保
- ・女性利用者の過ごし方

↓
おりづるバングワ
探索性

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概要

おりづる苑せりがやは、東京都町田市の駅からほど近い市街地にある認知症デイサービスセンター。デイサービスの参加者は、駅前商店街へ歩いて買い物に行く日もあります。そのおりづる苑せりがやの母体は、社会福祉法人町田市福祉サービス協会です。元々、認知症の分野に特化して力を注いできました。

そんな中で、人数は少ないものの何名かの若年性認知症の方がデイサービスを利用し始めました。しかし周りの方と比べると断然若く、ご本人も「ここは自分の来る所ではない」と思われていました。それもその筈で、周りの高齢者は皆80歳～90歳とご自分の両親と変わらない、もしくはそれよりも上の方たちばかりなのですから。おりづる苑せりがやは、高齢者にとってはかなり活動的なのですが、それでもやはり高齢者向けの時間が流れるデイサービスに変わりはありません。そこで、彼らに対して何ができるのか考察していたところ、一人の若年性認知症の方が訪れてきました。その方も「自分のいる所ではない」と例外なく思われていましたが、法人が賃借している民家の修繕を男性スタッフと二人でするようになると、生き生きと汗水流して働く姿がそこにはありました。

若年性認知症の男女比率は男性が多く、その多くの方が在職中に発症され退職を余儀なくされています。実際に想いを聞いてみると「まだまだ働きたい」「まだ身体は動くし、今までの社会経験を活かして人の役に立ちたい」と、皆さん口を揃えて言われます。そこで、修繕等で一緒に活動したケア経験を活かして、若年認知症の方のデイサービスを発足してみようと思いました。『何か会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら社会とつながっている実感と、仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることができる場所』と考えて始めたのがおりづる苑せりがやの若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”です。



まず環境を整えて“仕事”という雰囲気を作り上げるために、朝、利用者・スタッフが同じ作業着に着替え“出勤(来苑)・退勤(帰苑)”時に事務所のタイムカードをそれぞれ押して頂いています。作業着には“おりづる工務店”とネームの刺繍入り。また名刺もそれぞれが持ち歩き、今までの経験を活かす形での肩書きも付いています。

それこそ活動当初は、以前と同じように民家の修繕や倉庫整理等を行なってお

りましたが、やはり『全くの外部から依頼された仕事のほうが社会の一員とじて頂けるのではないか、そして社会とのつながりが広がり、そこには普通の生活があるのではないか』という思いが強くなりました。そこで、従来から交流のあった保育園の園長先生や市役所子育て支援課の担当者に説明し、協力を仰ぎました。現在では、市内の全保育園から理解を得て、仕事の依頼が連日のように届き、年内の予定はぎっしりと詰まっています。

その仕事内容は多岐に渡っていて、プール掃除・園庭掃除・マット下の砂出し・下駄箱等のペンキ塗り・落書き消し・剪定・床磨き・砂場掘り起こし・・・等々、数えると限りがありません。



自宅にいと、身体を動かす機会が少なく、不安感から閉じこもりがちになり、社会との接点も限られてきてしまいますが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、先生や園児達に感謝され生き生きと過ごされているように思います。ある方は、「まだ人の役に立てる、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店“勤務”を非常に楽しみにされています。ご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉を実感できるような環境がようやく整い始めました。仕事内容も、自然に身体を動かし、高齢者とはまた違うストレスや欲求を発散できるものとして定着してきています。さらに最近では、園長先生が保育園発行の便りに載せて下さったり、民生委員や町内会長さんが、自主的に回覧板で活動の様子を回して下さったりと、地域への輪が広がり、嬉しい状況でもあります。まだまだ若年性認知症のことは余り知られていませんが、“おりづる工務店”の活動を通して地域の方々に知ってもらいきっかけとなっていると思います。

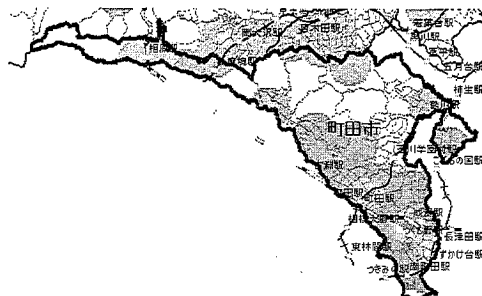
ただ、現在は、介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しています。そのため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることで、より一層モチベーションも高まりますが、何よりも〔仕事〕をすれば対価として〔給与〕を受け取ることが至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。しかし、それにはもう少し実績を作っていかなければなりません。今は実績を作り、来るべき日に向けて一つ一つの積み重ねだと思っています。

また“おりづる工務店”の現況が変化することも想定しています。皆さんのADL低下も考えられます。まして若年性認知症は進行が早いと言われています。個人差はあるものの、病状が進行し、現在の仕事・活動が困難になった時のための過ごし方も考えております。その一つとして、つい先日“おりづるパン工房”なるデイサービスをスタート致しました。このデイサービスの内容も〈地域社会との交流〉をモットーとして、手探りながら色々な工夫を図っていききたいと考えています。

2. 地域の紹介

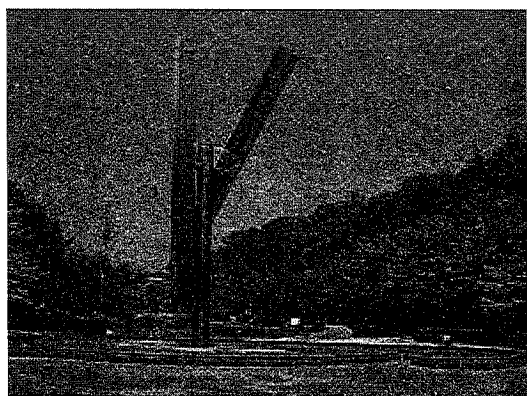
おりづる苑せりがや（おりづる工務店）がある東京都町田市は、東京都の中心部よりやや西側に位置し、横長い地形で八王子市や相模原市、横浜市、川崎市等に隣接しています。古くは縄文時代まで遡り、多摩丘陵地域で生活していたとされる遺跡が数多く出土しています。

現在は、その発掘調査の跡地にマンモス団地群が建設され、現在も「団地の町」と呼ばれています。その「団地の町」でも団塊の世代や高齢者世帯が圧倒的多数を占めていて、今後の高齢化社会を迎えるにあたり、一つの課題となっています。



総人口は415,848人となっており、毎月の人口増加傾向に伴い高齢者向けのサービスは充実しています。ただ、若年性認知症の方向けのサービスは他の地域と同じように皆無に等しく、おりづる苑せりがや（おりづる工務店）だけです。若年性認知症の方は、高齢期認知症の方と比べると人数は少ないのですが、実際に少ないながらもデイサービスを利用し始めました。そこで必要性から、“おりづる工務店”が誕生しました。

最寄り駅は、JR横浜線、小田急線の町田駅で、駅前の古くからある商店街を抜けて市立芹ヶ谷公園を目指します。市立芹ヶ谷公園はかなり広く、家族連れに人気のスポットで、四季折々の季節が楽しめます。版画美術館も併設していることもあり、美術や芸術に触れることもできます。



また、園内では、現在も湧き水があり、この水を利用した大きなシンボルマークの噴水があり、夏になると子供たちの遊び場になっています。この公園の隣という好立地におりづる苑せりがや（おりづる工務店）があります。

3. 活動の内容

【若年性認知症デイサービス発足まで】

最近、人数は少ないものの何名かの若年性認知症の方が、デイサービスを利用し始めました。しかし周りの方と比べると断然若く、ご本人も「ここは自分の来る所ではない」と思われていました。それもその筈で、周りの高齢者は皆80歳～90歳とご自分の両親と変わらない、もしくはそれよりも上の方たちばかりなのです。おりづる苑せりがやは、高齢者にとってはかなり活動的なのですが、それでもやはり高齢者向けの時間が流れるデイサービスに変わりはありません。若年性認知症の方をデイサービスに合わせるのではなく、デイサービスが合わせるとしたら、そこで、彼らに対して何ができるのか考察していました。そうした時、一人の若年性認知症の方が訪れてきました。その方も「自分のいる所ではない」と例外なく思われていましたが、法人が賃借している民家の修繕を男性スタッフと二人でするようになると、生き生きと汗水流して働く姿がそこにはありました。

若年性認知症の男女比率は男性が多く、その多くの方が在職中に発症され退職を余儀なくされています。実際に想いを聞いてみると「まだまだ働きたい」「まだ身体も動くし、今までの社会経験を活かして人の役に立ちたい」と皆さん口を揃えて言われます。そこで、修繕等で一緒に活動したケア経験等を活かして、若年性認知症の方のデイサービスを発足してみようと思いました。『何か会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら社会とつながっている実感と仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることが出来る場所』を目指しました。それにはデイサービスの殻を破るような斬新な考えが必要でした。まず特に男性は「仕事」が生きがだったということ、加えて、高齢者とはまた違ったストレスや欲求を抱えている彼らが、自然に身体を動かしてそれらを発散できるような仕組みが必要だと考えました。〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉も視野に入れると、やはり外での仕事、活動となるのではないかと考えました。そこで、まず環境を整えて「仕事」という雰囲気を作り上げました。朝、利用者・スタッフが同じ作業着に着替え、“出勤（来苑）・退勤（帰苑）”時に事務所のタイムカードをそれぞれ押して頂いています。作業着には“おりづる工務店”とネームの刺繍入り。また名刺もそれぞれが持ち歩き、今までの経験を活かす形での肩書きも付いています。



次に活動内容として、当初は、以前と同じように民家の修繕や倉庫整理等を行なっておりましたが、やはり『全くの外部から依頼された仕事のほうが社会の一員と感じて頂けるのではないかと、そして社会とのつながりが広がり、そこには普通の生活があるのではないかと』という思いが強くなりました。そこで、従来から交流のあった保育園の園長先生や市役所子育て支援課の担当者に説明し、協力を仰ぎました。現在では、市内の全保育園から理解を得て、仕事の依頼が連日のように届き、年内の予定はぎっしりと詰まっています。

【ある一日の仕事】

10:00 事務所到着

作業着に着替え

タイムカード

今日の仕事の流れ説明

倉庫で道具準備&車両積込

10:30 出発

保育園到着

- ・プール非常階段ペンキ塗り

- ・床の古ワックス落とし

- ・砂場の掘り起こし

12:30 昼食（現場保育園付近の飲食店）

昼食後は保育園へ戻る

休憩 → 園庭でサッカー

13:40

午前の続き

- ・プール非常階段ペンキ塗り

- ・園庭掃除

15:20 お茶、片付け、撤収開始

15:45 事務所到着

地下倉庫に道具片付け

タイムカード

着替え

16:10 終了



【保育園での仕事～就労支援の一步手前～】

現在は、介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しています。そのため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることでより一層モチベーションも高まりますし、何より【仕事】をすれば対価として【給与】を受け取ることは至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。一度、一般的な考えから、ご家族よりお預かりした金額をそのまま給与袋に入れてご本人にお渡ししたこともあります。最近まで一家の大黒柱として社会の第一線で働いてきたことと、それなりの給与額を受け取っていたことからすると、『何か違う』という思いもありましたし、ご家族からの『騙している感じがする』という意見もあり、中止しました。実現すべきはやはり介護保険サービスの中であっても、もしくは介護保険サービスとは別の外部団体となっても、報酬を得ることが可能な仕組みを考えていく、もしくは作っていくことだと思います。そんな意味で、現在は就労支援の一步手前という事です。

今では、保育園から依頼される仕事内容は多岐に渡っていて、プール掃除・園庭掃除・マット下の砂出し・下駄箱等のペンキ塗り・落書き消し・剪定・床磨き・砂場掘り起こし・・・等々、数えると限りが無いほどです。当初、若年性認知症の方々にどんな仕事ができるのかわかりませんでしたし

たので、その点を見極める必要性がありました。まずはやってみて、保育園の先生と相談しながら、その内容に近い仕事の試行錯誤を繰り返していました。

その他にも、保育園の先生が、若年性認知症についての知識がそれほど多くはなかったもので、保育園へ行くと園児たちを教室の中へ誘導し、仕事中は園児の全くいない園庭等での活動となったこともあります。これは正直寂しかったです。今では、先生にもご理解頂き、園児が大勢いる中での仕事となってきました。ちょっかいを出して逃げる園児を、「しょうがねえなあ」と嬉しそうに見守る社会の一員がそこにはいます。

たまたま、保育園では雑務の仕事に追われていたことと、先生は女性が多く力仕事のものは敬遠しがちだったこと、また大きな補修や修繕は予算的に後回しになりがちだったことにニーズがありました。おりづる苑せりがや（おりづる工務店）としてもご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉がまさに実感出来るものと思い、仕事内容としても、自然に身体を動かし、それらを発散出来るものとしてニーズがありました。ここにすばらしい出会いがありました。仕事の依頼は絶えることが無いほどに順調です。ところで、仕事はやはりそれなりに完成度が高いものを提供していかなければなりません。それは、将来の報酬を得るという考えの下、その完成度を維持していかなければ報酬は発生していかないと思いますし、完成度が低くなった時点で仕事の依頼も少なくなってくるだろうと考えています。そこをフォローするのが私たちの仕事です。

自宅でも身体を動かす機会は少なく、社会との接点も限られてきてしまいがちですが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、先生や園児達に感謝され、生き生きと過ごされているように思えます。ある方は、「まだ人の役に立て、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店「勤務」を非常に楽しみにされています。

トピックス・トピックス・トピックス・TOPICS・トピックス・トピックス・トピックス

都社報 福祉版
2007年10月号

町田市の認知症通所介護「おりづる苑」の取組み 若年性認知症のデイサービス おりづる工務店の挑戦



土曜日の朝10時、おりづる工務店に50〜60歳の男性たちが現れ、スタッフが「社長、部長、おはようございます」と声をかけます。今日の仕事は、保育園の下駄箱のベンキョーと園庭の掃き掃除。10時半にはスタッフの運転する車で保育園へ出向きました。

おりづる工務店のメンバーは皆、若年性認知症の男性たち。空間認知に障害があり、剪定するはみみの片側をつかんでいて、もう片側を自分でつかむことが難しい方もいます。できることを自分でやりながら、スタッフが手助けします。

◆「まだまだ働きたい」を支える
町田市のせりがや会館にある「おりづる苑」では、介護施設の認知症対応型通所介護を提供しています。冒頭の

◆「仲間がいる」ということ
おりづる苑スタッフの石渡清次さんは、「自宅でも身体を動かす状況がなかなかない。そうした中、二家族からは、平日に通うデイサービスとは違う姿をのぞく工務店では見えている」という感想が聞かれる。利用者同士もコミュニケーションがとれている」と話します。若年性認知症という障害を抱える不安の中、同年代の仲間がいるという状況で一日を過ごしているというところが、メンバーの明るい表情からもうかがえます。さらに、スタッフの横柄ずみさんは「つい先日、社長の一言で成し遂げたという充実感を持って、自分の力が必要とされていると感じてもらえることが大得意」とスタッフのやり方を話します。

外に出る活動するということに伴うリスクにスタッフが配慮する必要があります。3名のスタッフが総動員で打ち合わせをしながら、毎週、工務店の仕事をプログラムしています。

◆「仲間がいる」ということ
おりづる工務店は、認知症通所介護として若年性認知症の方のグループとして活動しています。市内からの利用は多いが、社会の一員として感じていただけるのではないかと考え、市内の保育園の園長会やアビール、6月からは冒頭の通り、保育園へ仕事に出かけるというスタイルが生まれました。

4. 活動の成果と今後の展望

【成果】

自宅にいと、身体を動かす機会が少なく、不安感から閉じこもりがちになり、社会との接点も限られてきてしまいますが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、保育園の先生や園児達に感謝され、生き生きと過ごされているように思います。ある方は、「まだ人の役に立てる、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店“勤務”を非常に楽しみにされています。ご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉を実感できるような環境がようやく整い始めました。仕事内容も、自然に身体を動かし、高齢者とはまた違うストレスや欲求を発散出来るものとして定着してきています。当初の『会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら、社会とつながっている実感と、仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることが出来る場所を作りたい』という目的は果たせたと思います。

また保育園の先生が、若年性認知症についての知識がそれほど多くはなかったのですが、仕事をしていくに連れ、先生にもご理解頂く事ができ、園児が大勢いる中での仕事となってきました。園長先生が保育園発行の便りに載せて下さったり、民生委員や町内会長さんが、自主的に回覧板で活動の様子を回して下さったりと、地域への輪が広がり、嬉しい状況でもあります。まだまだ若年性認知症の事は余り知られていませんが、“おりづる工務店”の活動を通して地域の方々に知ってもらえるきっかけとなっていると思います。

園児がちよっかいを出して逃げる。「しょうがねえなあ」と嬉しそうに園児を見守る社会の一員がそこにいます。他の仲間やスタッフ、保育園の先生はもちろんですが、園児だけではなく園児の保護者や関係者、昼食の飲食店従業員、そのお客、すれ違う人々、まさに地域社会との交流で、地域の様々な方と接し会話をするということは、それこそが普通の生活であり、私たちも同じことをしている筈です。

【今後の展望】

現在は、先に述べましたとおり介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しているため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることでより一層モチベーションも高まりますし、何よりも〔仕事〕をすれば対価として〔給与〕を受け取ることは至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。しかし、それにはもう少し実績を作っていかなければなりません。今は実績を作り、来るべき日に向けて一つ一つの積み重ねだと思っています。

また“おりづる工務店”の現況が変化することも想定しています。皆さんのADL低下も考えられます。まして若年性認知症は進行が早いと言われています。個人差はあるものの病状が進行し、現在の仕事・活動が困難になった時のための過ごし方も考えております。その一つとして、つい先日“おりづるパン工房”なるデイサービスをスタート致しました。このデイサービスの内容も〈地域社会との交流〉をモットーとして、手探りながら工夫を図っていききたいと考えています。

大切なことは、若くして認知症になっても笑って、安心して普通に暮らせる町になればという想いと、若年性認知症の方を敬遠するのではなく、私たちにできるものから始めていくことだと思います。これをきっかけに、若年性認知症デイサービスが全国へ広がることを願います。

患者を生きる

479

社会へ①

認知症

東京都町田市。駅からほど近い市街地にある認知症の人のデイサービスセンター「おりづる苑せりな」に毎週土曜、50、60代の男性数人がやってくる。保育園などから請け負ったベコミ整理や掃除、建物補修などをする「おりづる工務店」。病家になって仕事を辞めたが、まだ働きたいという若年認知症の人たちの希望をかなえようと、今年1月にスタートした。

9月下旬、作業に参加した平本肇市郎さん(69)は笑顔を見せた。「この日が、どこでも待ち遠しいんです」

長年、計測機器メーカーに勤務。5、6年前から妻の眞理子さん(67)らに聞いたばかりの質問を繰り返すなど、異常が見られるようになった。

03年秋、朝、出勤して2時間ほどで帰ってきた。ちやうどパートに出かけようとしていた眞理子さんは驚いた。

「どうしたの」「仕事から帰ってきたんだよ」

電車の中で寝てしまい、仕



保育園の廊下についた汚れを落とす平本肇市郎さん(左)――東京都町田市で

まだ働きたい、訴え続ける

事をしている夢を見て、目覚めたときに帰宅の途中と思い込んでしまったようだ。

翌年2月、川崎市の聖マリアンナ医科大学病院に検査入院し、脳の一部の神経や血流低下が見つかつた。東京都多摩市の新天本病院で「もの忘れ外来」も担当する杉山恒之医師(34)は、若年性のアルツハイマー病と診断した。

現在の医療では治らないと知り、「自分の人生は終わるだ」と思った。薬をのみながら働め続けたが、05年8月から休職し、1年後退職した。会社は「電話番号などできることをやってみれば」と勧めたが、駅の出口もわからないようになり、おきかぬはななかつた。

休職後はほぼ毎日、スポーツジムのプールに通つた。子どもころは家の近くの川で泳いだ。大学時代は水泳部。就職してからも、1日2千、3千泳いでいた。

だが、脳炎所のロッカーの場所がわからなくなり、サウナで頭を洗つてはがきをするなどが続き、昨秋からはプールにも行けなくなった。

体力は十分あるのに、食器洗いや掃除など、家事の一部の手伝いをするだけの毎日。

「体を動かしたい」「社会でかかわりたい」

肇市郎さんは眞理子さんに訴え続けた。

(文・写真・太田康夫)

◇

「患者を生きる 社会へ」は、回連載します。

患者を生きる

480

社会へ②

認知症

04年2月に若年性アルツハイマー病と診断された東京都町田市の平本憲市郎さん(59)は08年夏、長年勤めた計測機株式会社を退職した。フリーのロッカーの場所もわからなくなり、秋以降は好きな水泳もできなくなった。

同年代の人が働いているのに、家に閉じこもっているのは嫌だった。「体を動かしたい」と訴えた。

妻の真理子さん(57)はアルバイトを解雇できる場所を見つけてあげたいと思った。

市内の高齢者向けのフリースペースセンターの情報を集めてみた。70、80代の人が多い。体調などをしている聞き、「未だ利用するところではない」と感じた。

「ちょっと若年認知症の人向けのサークルが始まりますよ」。年明けに市役所に相談すると、担当者が教えてくれた。認知症の人のためのフリースペースセンター「おひつる苑せりがや」を運営する町田市福祉サービス協会が1月中旬



自宅で話す平本憲市郎さん(左)と妻の真理子さん＝東京都町田市で

「工務店」の作業着を着て

旬にスタートさせる「おひつる工務店」のじいだった。

週一回、50、60代の認知症の人が集まって、掃除などのボランティア活動をするという。昨年2月、「せりがや」にきた50代後半の男性はスワットの前田隆行さん(57)が初めてフリースペースに使用していた民家の修繕をするようになつたのがきっかけだった。男性が生き生きと働く様子をみて、協会は工務店の構想を検討。フリースペースに通う男性も人に声をかけるよう、「せり」と全責が担いだ。

憲市郎さんは1月下旬、「せりがや」に真理子さんと説明を聞きにやってきました。

「できるんじゃない、何でもします」。その話を憲市郎さんに前田さんは、ぐーぐー地に「おひつる工務店」と縁起の文字の刺繍が入った作業着を試着してもらった。

「よく似合っていますよ」

前田さんが声をかけるよう、憲市郎さんは喜んで、その日はそのまま着て帰った。後日、「作業担当主任」と肩書の入った名刺ももらった。

毎週土曜の朝10時、「せりがや」の事務所に集合し、作業着に着替える。タイムカードを押して作業場へ。みんなで昼食を食べ、午後作業を続ける。その後はスワットも一緒にカラオケをする。

間もなく、憲市郎さんは「次はいつ工務店があるの？」と毎日のように真理子さんにはたずねるほど、活動を楽しみにするようになった。

患者を生きる

481

社会へ③

認知症

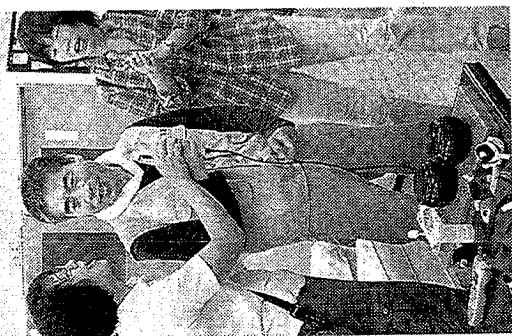
アルツハイマー病と診断された東京都町田市の平本慶市郎さん(69)は今年2月から週1回、若年認知症の人が集まる「修繕や掃除などをするサービス」に「おとりこ工務店」に通うようになった。

最初はサービスを運営する町田市福祉サービス協会の空き家の修繕や掃除、倉庫整理をしていたが、7月になると、五つの保育園からも、仕事の依頼が入るようになった。仲間も6人に増えた。

どひきり疲しかった今年の夏。冬天下でのプール掃除や、金魚の水槽の掃除、花壇の整備……。慶市郎さんは仲間たちと作業に取り組んだ。

昼食は近くの飲食店で好きなものを注文する。できる人は自分で、できない人はスタッフがあらかじめ預かっておいた中から代金を支払う。

9月上旬の土曜日は、前田隆行さん(51)らスタッフ5人と計10人で、市立町田保育園に出かけた。道すがらスキップをする人。アニメ「鉄腕アトム」の主題歌を口笛で吹きながら、色の落ちた箱にペンを塗る人。



「おとりこ工務店」のスタッフとカラオケを楽しむ平本慶市郎さん(中央)＝東京都町田市で

人の役に立てる、それが喜び

慶市郎さんは、廊下にごみくさい汚れをこまめな掃除を担当。前田さんと一緒にくらの床をこする。額から汗がしたたり、水泳で鍛えた腕には力こぶが盛んだった。

午後3時。げた箱は鮮やかな水色になり、廊下の床にはくっきりと木目が浮かんできた。

「きれいになりました」と藤田義江園長(58)。「ありがとうございます」。約40人の園児が手をそろえて、全員が笑顔でこたえた。

慶市郎さんは、夏ごろから自宅の洗面所やトイレの場所を間違えるようになった。

5年前に建てた家のローンを返済まであと20年。妻の眞理子さん(57)は近くの紳士服縫製工場で働く。生活費はそのパート収入と慶市郎さんの傷病手当金の中だ。心の中で悲鳴をあげることもある。でも明るくなった慶市郎さんを見ると、頑張ろうと思う。

川崎市の聖マリアンナ医科大学付属病院に2カ月は1回通う。主治医の杉山恒之医師(84)が工務店に話を聞ける。慶市郎さんは「最前です」と夢中になって話す。「豊かな感情や意欲を生かせるのはいいですね」と杉山医師。アールくも厚い。工務店のスタッフと行くようになった。

「ありがとうございます、また来てください」

その言葉が励みだ。

「まだ人の役に立てる。それがうれしくんです」

活動報告(8)

活動名称	地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動
活動要旨	「認知症にならない、なっても暮らせる地域づくり」をキーワードに活動。住民ボランティアグループと、地域の行政、生協が協力してできたNPO法人で、グループホームを拠点に、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援など活動は多岐に渡る
応募者	NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク 高井 道子
連絡先	〒509-3303 岐阜県高山市朝日町浅井 736 番地

1)推薦理由

- ・ グループホームを拠点に世代や事業の枠を超えた活動が、認知症の方の生きがいや地域住民の理解の促進に結び付いている活動である。
- ・ 小さなグループホームでも認知症を理解してもらう情報発信基地としての役割を担っている。小さな町、地方でも先進の認知症ケアが可能であるモデルとなろう。
- ・ 住民自身のボランティアから大きく発展していきっており、地域に根ざした活動をしている。オープンで自然な流れの中でご本人たちものびやかに暮らしている様子が素晴らしい。
- ・ 最期まで地域社会の一員として暮らすことができるこのような活動が、全国各地で展開されていくことが期待される。

2)3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。



ほのぼの朝日の家の理念

・ 安心して楽しくかつ尊厳のある暮らしがしたい

・ 自分らしく生きがいを持って地域の中で楽しく暮らしたい

みなさん毎日充実してる？

料理 買い物 掃除 ごみ捨て 洗濯物干し 農協での支払い おしゃべりetc

どこでも行きます

とらやで饅頭 同級生の家の近くで栗拾い 高山市政70周年の舞台を見に

朝日町文化部研修で盆梅展 朝日小学校の同級・同窓生 お寺にも行きます

春祭り 闘鶏楽 すずらのペンションでお茶 ご近所さんお手玉遊びを小学生に教えて帰ります

傾聴ボランティア研修

来るもの拒まず 同じ釜の飯を食う

朝日に住みたい若夫婦の家探しもお手伝い 土曜教室のクッキーを届けに

避難所生活学習会 NPO法人ルビナス 獅子だ〜い好き(中のイケメン?) 僕に(杵)貸して〜

にわか かご網教室 ハンドベル演奏 田んぼの持ち主のお孫さん

生きがい支援も

この子わしを見ているんや

高山へお願います 10年ぶりの三姉妹再会 認知症セミナーで「ふるさと」

ひだ朝日伝統芸能祭に参加 作 坂倉勉

みんなで歌う歌詞を 外出支援でスケッチ 絵は気の向いたときに

グループホームは暮らしの拠点としての役割も担う

朝日小学校4年生がお手玉遊びを習いに 岐阜経済大学佐藤・樋下田ゼミの学生

認知症サポーターを 養成 ご近所さんが散歩の途中ちよっと一緒に

日本福祉大学石川ゼミの学生 終の棲家としても

平成19年1月18日97歳で逝去される 紙パンツ・オムツの学習会 毎年恒例の餅つきと花餅作り 97歳のお誕生会

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概 要

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークのコンセプトは、「認知症にならない、なっても暮らせる(赤ちゃんから高齢者までほのぼの暮らせる)地域づくり」です。定員6名の「グループホームほのぼの朝日の家」を拠点として、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援にも取り組んでいます。

そのほか、活動の一環として、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」をほぼ毎月近隣の町にも新聞折込みで発行し、グループホームでの暮らしを知っていただき、認知症になっても楽しく暮せるというメッセージを発信してきました。そして、グループホームの利用者さんの地域での活動を通して、認知症になっても生きがいを持って暮らせることを理解してもらい、また、理事長(高井)がキャラバンメイトとして認知症サポーターを養成する活動にも取り組んでいます。

平成17年9月のある日、グループホームの一人の利用者さんが、世間話をしている時に、「これからは歌と絵で他人を楽しませたい。」と、ボソッと言われました。ちょうど朝日町の伝統文化祭の出演者を募集していたので、ご本人に出演の意思を確認し、ご家族の了解を得て、早速申し込みました。

10月当日、スタッフが利用者さんの紹介をした後、歌われました。一曲目は、マイクを持つ手が震えてみえましたが、2曲目の「籠の鳥」を歌い終わると、その堂々たる歌唱力に会場の方の大きな拍手に包まれ、舞台を降りてから、「感動しました。がんばってくださいね。」と何人もの方から声をかけられ、ご本人も大感激されたようでした。

その後、12月には、各務原市での認知症セミナー、翌18年4月には、コープぎふくらしたすけあいの会総会、10月には、朝日町伝統文化祭2回目と、張りのある声を披露されました。さらに、11月には、飛騨文化交流センターで行われた飛騨地区コープぎふくらしたすけあいの会・飛騨市共催の認知症セミナーに、スタッフとともに出演し、理事長(高井)のグループホームほのぼの朝日の家の実践報告とともに参加者に大きな勇気を与えました。

絵のほうも、平成17年9月にスタッフと二人で好きなところへ出かける「外出支援」といううちのグループホーム独自のサービスを利用し、野麦峠に出かけ、日和田高原でスケッチを楽しんで、勘が戻られたようで、すてきな絵を連続して描かれました。

これは、我がNPO法人自体が、もともと地域の住民と行政(当時の村役場)とコープぎふが協力しあってできたので、地域とのつながりが深く、小学校の運動会、祖父母学級、文化部研修会、盆踊り大会等への参加や、小学校の総合教育で小学3年、4年の生徒」がお手玉の遊び方を習いに来たり、グループホームはどんなところかを学習に来たり、土曜教室の子供たちが、自分たちの手作りクッキーをプレゼントしに来てくれたり、近所の子供が遊びに来てくれたり、祭に獅子が踊りに来てくれたり、農協へ1日おきに買い物に出かけたり、日常的なつながりを大切にしている中で育まれたように思います。また、複数の福祉系大学のゼミの学生さんたちが、見学・研修に来て認知症についての理解を深めたり、子育てママたちが利用者さんと一緒に餅つきをして、花餅を作るのは、毎年恒例になっています。さらに、町内の高齢者、高山旧市内や岐阜市、美濃市、可児市などのボランティアグループの訪問も、多く、利用者さんとスタッフが協力して昼食を作ってふれあい会食会の活動もしています。

一方、理事長(高井)が、キャラバンメイトなので、高山市だけではなく、飛騨市、下呂市の市民グループや傾聴ボランティアの認知症サポーター養成の活動にも岐阜県飛騨地域振興課や、高山市社会福祉協議会などと共に取り組んでいます。平成19年10月までに、300人近く養成しま

した。

こうした活動を通して、朝日町、高山市だけでなく、飛騨地域全体が少しずつ認知症についての理解を深めているように思いますので、これからも引き続き取り組んでいこうと思います。



祭の獅子（イケメン？）に恋心！



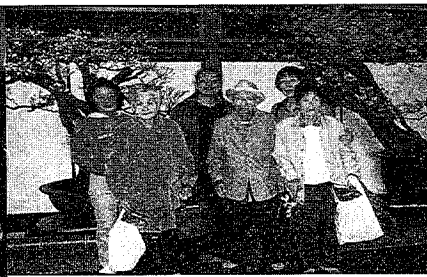
朝日小学校の運動会



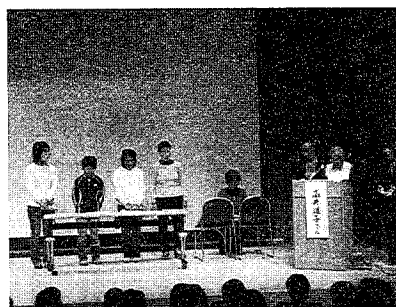
「あああ、大玉が・・・」



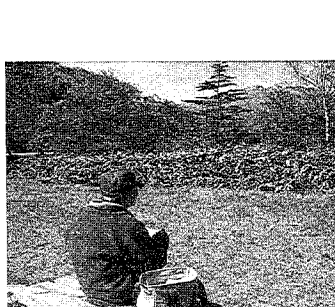
朝日町文化部の皆さんとバスで長浜の盆梅展に行き蟹を食べてきました。



カクレハ高原のもみじ祭り



この日は、ふるさとを熱唱
平成 18.10.29 飛騨文化交流センター



外出支援でスケッチ平成 17 年 9 月



サインして描き終わり！



金山町のグループが、ふれあい会食



町内の農協で買い物です



餅つきは、ここ 4 年間（開所時より）毎年恒例行事になりました



子育てネットと野中ファーム
利用者さんとスタッフの協力で
合計 43 食作りました～～

2. 地域の紹介

高山市朝日町(旧大野郡朝日村)は、岐阜県飛騨地域の南東部に位置し、高山から車で約25分、乗鞍岳と御岳の山懷に抱かれた自然豊かな溪谷型の美しい小さな町です。総面積の92.5%が林野で、標高712m以上、標高差は2kmを超え、農林畜産業を中心に発展した町で、高冷地野菜の生産と、繁殖牛が盛んです。朝日ダムを境に朝日地区と秋神地区に分けられ、秋神地区には、すずらん高原スキー場がありましたが、昨年閉鎖になり、さらに、平成20年4月より、秋神地区にあった小学校が朝日地区の小学校と合併されることになりました。

平成18年11月現在、人口2千人、そのうち15歳未満は、261人で全人口の12.9%、65歳以上の高齢者が680人で高齢化率は、33.8%の典型的な少子高齢化の進んだ地域です。

また、高山市(平成17年2月1日に合併)全体としては、面積2,179.35km²うち92.5%が林野の日本一大きい市となり、人口9万4千人高齢化率24.1%でやはり全国平均を上回っています。

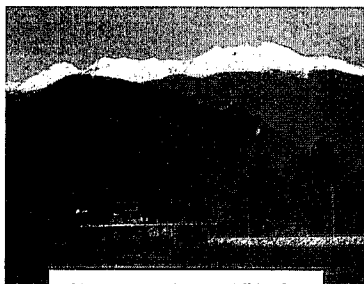
高山市は、「個性ある地域の連携と強調」を基本テーマに、市域の広大さや変化に富んだ地形など地理的・地形的な生活条件の克服、市域全体の早期一体性の確保と均衡ある発展に向けて、新たな町づくりに取り組んでいこうと、住民参加型の高山市地域福祉計画を作成し、「思いやり・支えあいで、安心して暮らせる町づくり」を目指し、認知症について行政で取り組む内容として、

- 1) 認知症グループホームの開設支援
- 2) 認知症に対する理解を深め誰もがサポートできるよう講座等の開設・研修
- 3) 講座等を受講した市民のグループホームへの活用支援

を掲げています。

そして、地域の取り組みとして地域福祉計画策定に関わった市民ワーキンググループ委員を中心にした地域の住民やNPO・ボランティア団体等をつなぐ地域福祉ネットワーク作りの協力を呼びかけています。高井も微力ながら市民ワーキンググループ委員として参加して、認知症についての取り組みを働きかけたので、計画に反映され嬉しいです。

どこの過疎地も同じだと思いますが、ここ朝日町も、どんなに厳しい条件の中でも、住民は、自立を迫られています。行政に頼るのではなく、行政とともにみんなで知恵を出し合い、過疎化をストップさせ、死ぬまで暮らせる町が私たち住民の切実な願いなのです。



朝日町からの乗鞍岳

グループホームほのぼの朝日の家兼
NPO 法人ほのぼの朝日ネットワーク
事務所

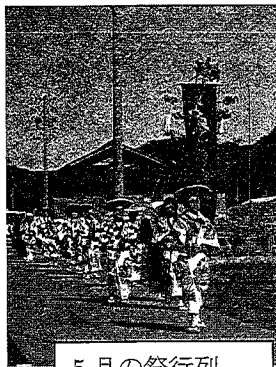


朝日町の真ん中を流れる飛騨川

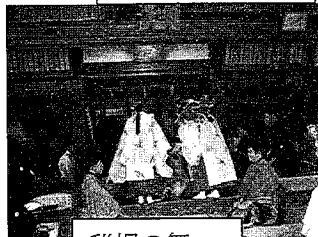


甲地区の七百五才の七本榎

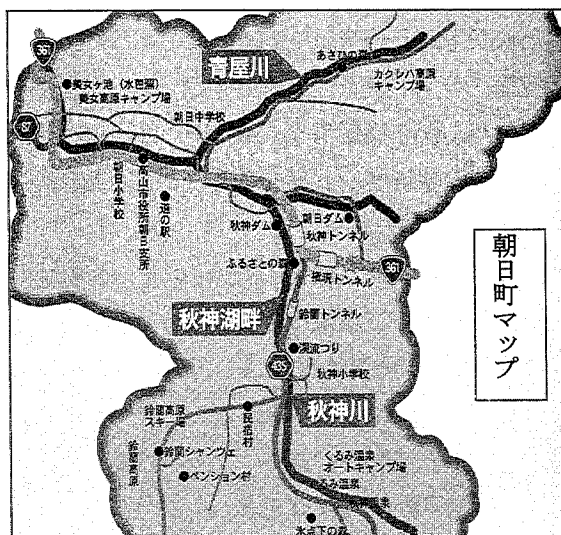
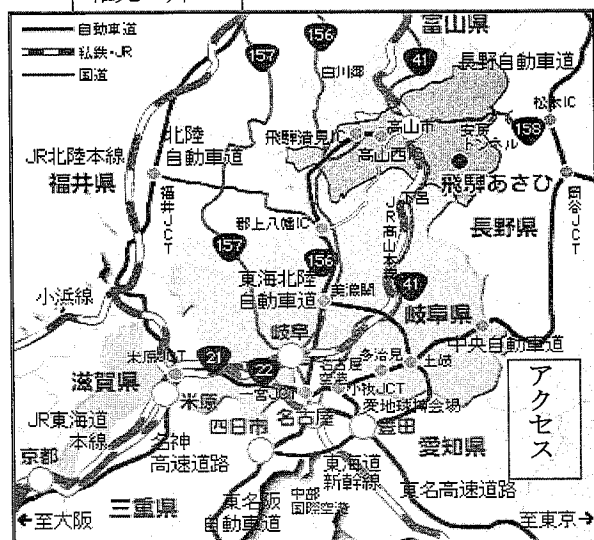
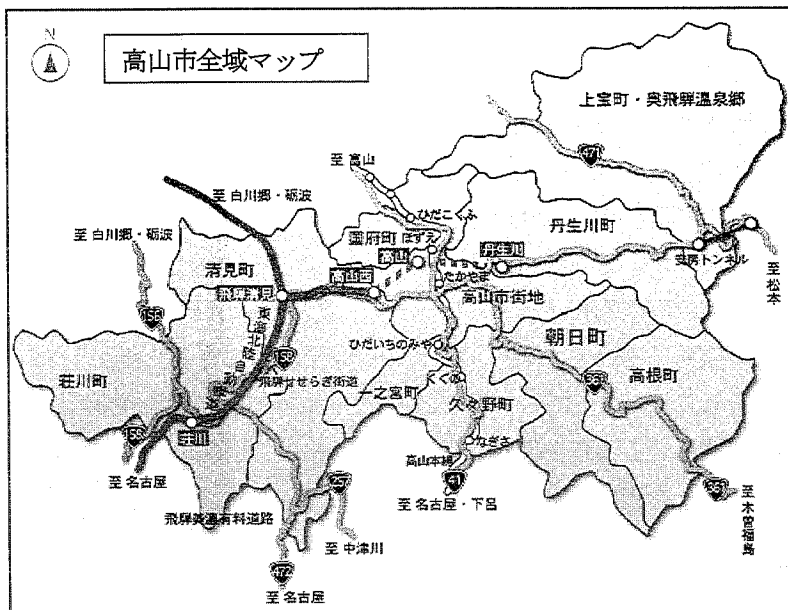
秋神地区胡桃島のもみじ



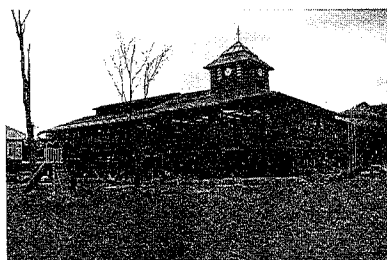
5月の祭行列



稚児の舞



出荷を待つ飛騨牛



木の匂いと温もりの朝日小学校



朝日支所とふれあいホール



たった一軒のコンビニ



長野に抜ける道路



特産 よもぎうど
んと美女餅

ひだ朝日道の駅

3. 活動の内容

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークのコンセプトは、「認知症にならない、なっても暮らせる（赤ちゃんから高齢者までほのぼの暮らせる）地域づくり」です。定員6名の「グループホームほのぼの朝日の家」を拠点として、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援また運営資金捻出のため、「ふくろう」のブローチとストラップを製作して販売する活動にも取り組んでいます。

そのほか、活動の一環として、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」をほぼ毎月近隣の町にも新聞折込みで発行し、グループホームでの暮らしを知っていただき、認知症になっても楽しく暮せるというメッセージを発信してきました。

そして、グループホームの利用者さんの地域での活動を通して、認知症になっても生きがいを持って暮らせることを理解してもらい、また、理事長（高井）がキャラバンメイトとして、認知症サポーターを養成する活動にも取り組んでいます。

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークは地域の福祉の増進を目的とし、平成14年8月に設立、平成15年1月に認証され、法人としての活動を開始しました。

その基になったのは、平成11年11月に朝日町小学校の体育館（旧大野郡朝日村）で上映された映画『郡上一揆』の上映運動を担った上映実行委員会のメンバー（生協の組合員理事高井、養護教諭、トマト農家、未来の手話通訳、寺の坊守、幼稚園教諭、等）を中心に、死ぬまで暮らせる、赤ちゃんから高齢者まで楽しんで暮らせる地域づくりをしようと設立したボランティアグループほのぼの朝日ネットワークでした。住民自らが自主的に作ったこの地域では、初めてのボランティアグループでした。

村の社会福祉協議会に福祉のニーズの聞き取り調査をして、その中から自分たちがやりたいこと、また自分たちが必要だと感じていることに取り組みました。公民館での食事会や、クリスマス会、調理実習、読み聞かせの会、リサイクルバザー、グループホームの学習会と見学、社会福祉協議会の配食の手伝いなど多岐にわたりました。そのうち、村がオウムから買い戻した古民家を貸してもらえることになり、高井が当初やりたかった宅老所と託児も始めることができました。

当時、気軽に集まっておしゃべりのできる宅老所は、ありませんでした。村のデイサービスは、重度の障害のある方から認知症の方など、20人が一緒に過ごし、認知症の方への個別の対応が難しかったようなので、何とかそういう方の役に立ちたいという思いがあったので、そういう活動のことができることがとても嬉しかったです。さらに、生協での福祉エンパワメントの学習をしていくうちに、急激な高齢化社会を迎えるこの日本で、認知症（当時は痴呆症と言っていた）患者さんが増えるということが明らかになり、当時のアドバイザーだった岐阜経済大学の中井教授が、これからの活動として認知症高齢者のグループホームを作ると、宅老所も一緒に継続できると言われたので、生協の協力で、ほのぼの朝日ネットワークのグループホーム作りが始まりました。日本福祉大学の中井先生のゼミの学生と生協のグループホーム研究会とともに、当時の朝日村役場の住民福祉課長の協力で高齢者福祉調査を三次にわたって行い、住民が、在宅福祉サービスを利用して在宅介護を希望していることがわかると同時に、認知症の症状が出ている高齢者が、32人いることがわかりました。この調査報告と、認知症とグループホームの理解を得るために、グループホームを作っちゃおう集会を平成14年5月に行い、高山市で初めてできたグループホームの理事長に講演していただきました。今、思えば、この集会が、地域の方たちに認知症の理解をしていただく活動の第一歩だったと思います。その後、平成14年10月より、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」を発行、ふれあい会食会も開始し、村の診療所の医師による認知症介護学習会を開催

したり、飛騨寿楽苑、高山旧市内グループホーム認知症基礎講座研修等でのスタッフ研修も行いました。宅老所には、会員さんのお姑さんが週1～2回通ってくださるようになり、高井の82歳の友達も、時々利用してくれるようになり、ふれあい会食会には、毎回5～8人参加して下さり、認知症患者さんとも一緒に楽しみました。

そうした活動が続ける中、この古民家を改装して、平成15年10月に定員6名のグループホームを開所しました。12月には、満員になり、それ以来1人の利用者さんが、このほのぼのでターミナルを迎えられ、逝去されました。現在、この朝日町内の方が2人、高山旧市内の方が2人（内1人は朝日町出身）久々野町1人、荘川町1人と、高山市内にグループホームが5ヶ所しかないので、遠い町でも困った方優先に入居していただいています。

このグループホームの設立過程が、上述のように住民のボランティアグループが主体でしたので、この地域の中で、できるだけオープンに暮らすことを心がけてきました。

開所以来、住民健診も、インフルエンザ注射も、町内の方たちと一緒に受診し、定期受診も往診も、朝日町診療所所長の医師が私たちNPO法人の理事で、看護師たちも会員なので、協力してもらっています。診療所で町内の方と一緒にになると、初めは奇異な目で見られたりすることもありましたが、めげずに何十回と受診の回数を重ねて通いました。

また、食料品も高山旧市内のスーパーのほうが安いのですが、できるだけ町内の農協で買い物をするようにしました。歩いては行けない距離なので、1日おきぐらいに車で買い物に行きます。その上、歩くことが大好きな利用者さんが入居して以来、スタッフは毎日高山方面に向かって町内を一緒によく歩きました。隣町まで1日合計14～5キロ歩いたこともありました。町内の駐在所と一緒に挨拶に行き、お巡りさんと知り合いになりました。高山方面とは反対の近くのお店にも挨拶に行き、毎日通いました。

さらに、町内・各地域のイベントにも、利用者さんの体調の許す限り積極的に参加しました。春は、町文化部の研修バス旅行、高山祭り、すずらん高原祭り、各町・旧市内・萩原・下呂のお花見、夏は、朝日、久々野の盆踊り・花火大会、ドスコイ祭り、高根のかがり火祭り、秋は、小・中学校の運動会、紅葉祭り、荘川祭り、ひだ朝日伝統芸能文化祭、ぶり街道祭り、など。

一方、平成16年6月から平成17年3月まで、各地区の公民館に出かけていって、ふれあい会食会を行いました。認知症の理解を深め、介護予防や、介護サービスの利用方法など、高齢者にとって暮らしやすい情報の提供と体験学習を、行いました。具体的には、朝日村社会福祉協議会職員の話や、お巡りさんの詐欺予防の話、岐阜県障害半減運動研究所の保健師による物忘れ（記憶障害）予防の話、肩こり腰痛予防の呼吸法、雛様作り、貼り絵などと、食事もしみながら学習する機会を作りました。これには、52回開催し延べ418人が参加、ほのぼの朝日の家で行われた、ふれあい会食会の参加者を合わせると、528人の高齢者が参加され、当時の65歳以上高齢者は、ほぼ650人ぐらい（内要介護高齢者101人）なので、かなり多数の方が参加されたことになります。

また、子育て支援事業も行っているので、開所以来毎年暮れには、子供たちと餅つきをして、花餅も作ってきました。去年は米作りにも挑戦しました。

こうして日々の暮らしを、積み重ねていた平成17年9月のある日、グループホームの一人の利用者さんが、世間話をしている時に、「これからは歌と絵で他人を楽しませたい。」と、ボソッと言われました。グループホームの理念が、「尊厳を守り、安心して楽しい暮らし」「生きがいのある楽しい暮らし」だったので、折にふれ、利用者さんに生きがいの話を投げかけていたのです。ちょうど朝日町の伝統文化祭の出演者を募集していたので、ご本人に出演の意思を確認し、ご家族の了解を

得て、早速申し込みました。

10月当日、町内の道の駅脇にあるこだま館で、スタッフが利用者さんの紹介をした後、歌われました。一曲目は、マイクを持つ手が震えてみえましたが、途中インタビューに答えて、2曲目の「籠の鳥」を歌い終わると、その堂々たる歌唱力に会場の方の大きな拍手に包まれました。舞台を降りてから、「感動しました。がんばってくださいね。」と何人もの方から声をかけられ、ご本人も大感激され、涙ぐまれました。

その後、同年12月には、各務原市での認知症セミナー、翌18年4月には、コープぎふくらしたすけあいの会総会、10月には、朝日町伝統文化祭2回目と、張りのある声を披露されました。さらに、同年11月には、飛騨文化交流センターで行われた飛騨地区コープぎふくらしたすけあいの会・飛騨市共催の認知症セミナーに、スタッフとともに出演し、理事長（高井）のグループホームほのぼの朝日の家の実践報告とともに参加者に大きな勇気を与えました。

絵のほうも、平成17年9月に、スタッフと二人で好きなところへ出かける「外出支援」といううちの独自のサービスを利用し、野麦峠に出かけ、日和田高原でスケッチを楽しんでから、すてきな絵を連続して描かれ文化祭に、展示もして、住民の皆さんにも見ていただきました。そして、複数の福祉系大学のゼミの学生、傾聴ボランティア、認知症サポーター、外部評価調査員の見学・研修、町内の高齢者、高山旧市内や岐阜市、美濃市、可児市などのボランティアグループの訪問も受け入れ、利用者さんとスタッフが協力して昼食を作ってふれあい会食会も行ってきました。

一方、高井が、キャラバンメイトなので、高山市だけではなく、飛騨市、下呂市の市民グループや傾聴ボランティアの認知症サポーター養成の活動にも岐阜県飛騨地域振興課や、高山市社会福祉協議会などと共に取り組んでいます。平成19年10月までに、300人近く養成しました。





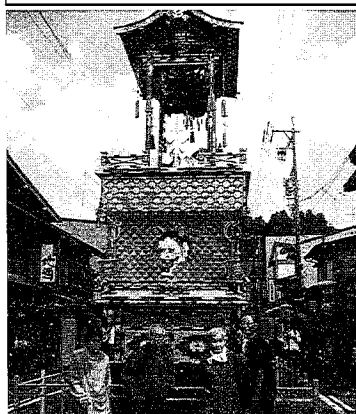
花餅を寄つてたかつて



紙粘土の雛様作り ふれあい会食会ほのぼので



つきたての餅です



高山市政 70 周年の祝い



もみじ祭り 拾った枝です



公民館でヨガ体験



永田先生も利用者さんの作られた
採りたて卵を試食された



田植えも稲刈りも初体験



散歩途中で一休み 誰がご近所さんか
利用者さんかスタッフか



そこまで栗拾いにきたんや



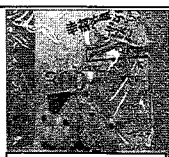
日福大石川ゼミ 2 年目です



ドスコイ祭りは7月第4土曜日



この日は朴葉寿司でおもてなし



ふくろう



長良川国際会議場にも



平成 19.1.18 享年 97 歳
ほのぼので逝去される

4. 活動の成果と今後の展望

こうして、さまざまな活動に取り組んだ成果は、さまざまな場面で見られるようになりました。診療所では、耳の遠い利用者さんが大きな声で話されても、待っていられずに「外を見てくるわ」と診療所の外に出られても、それが当たり前になってきて、スタッフが他の利用者さんに関わっている時は、見守りをしてくださり、外へ出られると知らせてくださるようになりました。

ほのぼの朝日の家の近くでも、高山方面でも、高根方面でも、利用者さんが一人で歩かれていると、「いま、一人で歩いているようだけど・・・」と電話で知らせてくださるようになりました。近くの店の方も、「いま、自動販売機で飲み物買って飲んでいいのかな・・・」他のガソリンスタンドの店の中に入っていくと、「ここには、食料品は置いていないんですよ」と頼んでおいた対応を快く引き受けてくださったりしています。農協では、利用者さんが買い物をする姿が普通になり、レジで、店員さんに気長に待ってもらったり、利用者さんの知り合いに会うと、世間話に花が咲いて「まめなかな（元気だったかな）？」と気遣う言葉をかけあったりしています。

また、運動会、祖父母学級への参加などから、こんどは、ほのぼの朝日の家に小学校の総合教育で小学3年、4年の生徒たちがお手玉の遊び方を習いに来たり、グループホームはどんなところかを学習に来たり、土曜教室の子供たちが、自分たちの手作りクッキーをプレゼントしに来てくれたり、近所の子供が遊びに来てくれたり、利用者さんの近所の友達が散歩の途中で寄ってお茶を飲んでいたり、昼食を食べに来たり、祭に獅子が踊りに来てくれたり、日常的に、いろいろな方が訪れて来るようになりました。昨年から作り始めたお米も、田植え、草取り、稲刈り、稲こきに地域の常連さんがボランティアで参加してくれるようになりました。

そして、グループホームの実践報告を通して認知症と介護の学習としたいというさまざまな市民グループから高井に要請が来るようになりました。岐阜県地域振興課・飛騨市社会福祉協議会（以下社協）共催、高山市社協共催、下呂市社協共催の傾聴ボランティア養成（兼認知症サポーター）講座、河合町介護家族の会、三福寺町ボランティアグループ喜楽の会、生協くらしたすけあいの会・飛騨市共催認知症セミナー、ひだ朝日芸能文化祭、外部評価調査委員学習会、福祉大学系ゼミなど振り返るといろいろなグループに報告しており、これから要請されているグループもあります。報告の中で、認知症の人のためのケアマネジメント センター方式についても紹介し、認知症になった時によりよいケア（自分にとっての快い環境を整えてもらう）を受けられるように、自分史を書いておこうという提案もしています。報告後、見学に訪れる方たちもたくさんみえました。こうした中で、認知症に対して自分の問題として捉える気運が少しずつ芽生えてきているように思います。特に、歌を歌ってインタビューに答える利用者さんの活動は、地域の方たちが認知症に対する理解を深めるとともに、認知症になってもこうして生きがいを持って暮らせるんだという安心感をもたらす重要な役割を果たしました。

今後の展望としては、今までのような活動を継続し、もう少したくさんの認知症の方とその家族の暮らしを支えるためにデイサービスを開設したいと思います。また、そのスペースを利用して、利用者さんの歌や踊りや実践報告ができるようにしていきます。また、他の利用者さんの生きがい探しに引き続き取り組み、他の利用者さんも、参加できるようにしていきたいと思っています。

また、小学校の合併で、コミュニティスペースが空になった秋神地区でのふれあい会食会や、長寿学級と一緒に認知症予防活動にも取り組み、さらに、小・中学校で認知症について取り組むよう働きかけていき、認知症になっても暮らせるやさしい町づくりを住民の方たちと一緒に実践していきます。



レジでおつりをもらいます



坂倉さんの絵



手作りクッキー大歓迎



岐阜市のくらしたすけあいの会



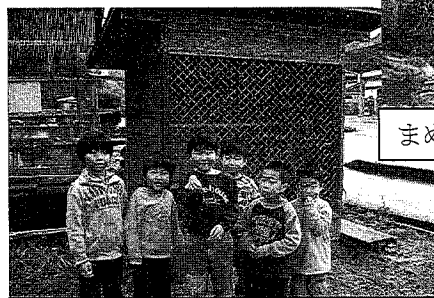
祭の獅子（イケメン？）に恋心！



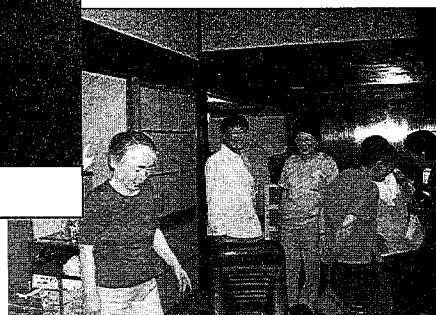
田んぼを貸してくれた方の孫たち



まめなかな？（元気だったかな）



勝手知ったる鶏小屋で、ハイ卵！



各務原市ホットクラブ



どちらに歩いていかれても
だいじょうぶ



床暖のコタツでおやつ



朝日小学校 4 年生がお手玉遊び
を教わりにきました



稲刈りもボランティアさんと



可児市のいしづえの会

5. 各地域活動概要

No. 2

(番号は応募順です。)

活動名称	地域の人達と共に健康体操教室に参加
活動要旨	グループホーム入居者数名が、地元の健康体操教室に通い地域の方との交流を楽しむ
応募者	総合ケアセンター榛名荘内「グループホーム榛名荘」 介護福祉士 小林 秀子
連絡先	〒370-3342 群馬県高崎市下室田町 965-1

- (概 要)
- <ケアセンター榛名荘とは>
- ・ケアセンター榛名荘は、グループホーム、小規模多機能、高齢者住宅などを運営している総合的な高齢者施設です。
 - ・一年を通じて様々な催しが町ぐるみで行われ、町内有志の皆様の協力を得ながら、祭りや花火大会、運動会などへ参加させていただいています。
 - ・榛名高校のボランティアが来訪、ケアセンターからは福祉、看護の講師が出向いて講義を行う等の交流があります。
 - ・ケアセンター内には軽食と地元特産物販売を兼ねた売店「あいおい」があり、地元の皆さんの憩いの場となっています。
 - ・概ね地域の皆さんは長く地元に住居されていて、利用者様の顔見知りも多く、何かと声を掛けて下さいます。

- <グループホーム入居者が、施設職員とともに地元の健康教室に通う>
- ・グループホームの中でも比較的元気な認知症高齢者が、元気アップくらぶはるなの健康体操教室に参加しています。
 - ・参加のいきさつは、無料体験のコースのお誘いを受けてのことでした。無料体験は5日間で、毎回3～5人の利用者様が一般会員の皆さんと一緒に和気あいあいと体操を楽しみました。
 - ・6月からは有料ということもあり、以後の参加は諦めていたのですが、教室の方から週1回の参加を無料で続けても良いとの話をいただき、有難く通わせてもらうことにしました。
 - ・一般会員の皆さんや指導の先生には認知症のことをお話し、理解と協力を得られています。
 - ・7月、8月と暑い間も元気に教室に通い続けました。これからも周囲の理解と事情が許す限り、週1回の健康教室体操を続けていきたいと思ひます。

活動名称	「認知症を知るための取り組み」
活動要旨	社団法人 長寿社会文化協会会員に講師を依頼し、各地域に合った講習会（認知症疑似体験含む）を開催し、認知症についての理解を深める活動をする
応募者	NPO法人 福祉振興会 小関 薫
連絡先	〒211-0001 神奈川県川崎市中原区上丸子八幡町 816 番地

（概 要）

認知症になっても家庭的な雰囲気に住めるグループホームを、平成7年に川崎市内で初めて新設して運営を開始しました。グループホーム運営の経緯は、社団法人 長寿社会文化協会（通称WAC）の会員となり、今後、高齢化社会を迎え、高齢者福祉の重要性、特に認知症（当時は痴呆症）の方が安心して生活できる環境の整備が重要と感じました。

しかし、一般の方々の認知症に対する知識や理解が不十分なため、家族の方に認知症の症状があっても、世間には認知症を隠す状況の現実と、そのため認知症のご本人やご家族は認知症による様々な症状に振り回され精神的にも、肉体的にも日々の生活に困難な場面が沢山ありました。

このような現実から、「認知症になっても安心して住める街づくり、地域づくり、人材づくり」に関する研修会・講習会を神奈川県、静岡県、千葉県、石川県で開催し、各地で開催する講習会のカリキュラムに「認知症の理解と認知症を支える地域づくり」及び「認知症疑似体験」を設定し、当該カリキュラムに理解があり、地域で介護事業を営んでいる方や、認知症の地域づくりに理解のあるWAC会員に講師を依頼し、各地域に合った「認知症の理解と認知症を支える地域づくり」を目的とした講習会を開催しました。

今後、神奈川県内各地、東京都内各地、静岡県、栃木県、石川県の開催を予定しています。

<成果と課題>

- ・実際のニーズに対し、取り組みや先駆的なことを聞きたい。
- ・具体的な手法を学びたい。
- ・概念をつかみたい。
- ・先進、最近の動向、公的な方向性を知りたい。
- ・認知症の疑似体験をし、それから何を学ぶか。
- ・福祉事業者が社会的問題となっている中、今後事業者として生き残るにはどうしたらよいか。
- ・問題定義を見出し、問題、課題を話し合いたい。
- ・情報を勉強の場とした会報の発行希望（月500～1,000円程度の会費）
- ・地域により良いサービス創出と先駆けの実績を作りたい。
- ・公民館・会議室・事業者会議室にて認知症問題と地域づくり、小教室開催の推進。
- ・認知症対応早期発見と探索捜査。
- ・認知症対応医療と連携事例の訓練開始。

活動名称	地域で支えよう認知症
活動要旨	認知症の方本人、家族、ボランティアからなるグループが、電話相談、ミニデイなど認知症の方を支える活動を21年続け、行政とも連携し地域の核として活動
応募者	にこにこクラブ 北村 紀子
連絡先	〒253-0002 神奈川県茅ヶ崎市高田 3-13-14

(概 要)

1. 立ち上げ

昭和61年5月、ボランティアグループを立ち上げ、第一歩を踏み出しました。「にこにこクラブ」の誕生です。それ以来本日まで21年間活動を続けています。

2. 活動について

1) シンポジウム「みんなで支えよう認知症」

設立20周年を迎え、平成17年11月20日(日)に「にこにこクラブ」主催のシンポジウム「みんなで支えよう認知症」を農協ビル大会議室で開催し世間に一石を投じました。

2) ボランティア大学必修コースでの介護劇の上演

茅ヶ崎市社会福祉協議会と茅ヶ崎ボランティア連絡会が毎年定期的に行うボランティア大学(一般市民を対象とした講座、毎年約100名集客)にて、寸劇による認知症の随伴症状を説明。

3) 日常の活動

①看取りをした家族(OB)による支援活動

②家族の会一同い悩みをもつ介護者が集い、情報交換や心の悩みの相談などを本音で語り合う会

③ボランティアグループ―家族会と併走、「ミニデイスサービス活動(月2回実施)」が主体

④電話相談活動 ⑤「徘徊老人のためのSOSネットワーク」支援

⑥認知症相談事業(物忘れ相談)支援 ⑦機関紙「にこにこだより」(月1回発行)

3. 地域との関わりあいについて

自分たちだけの領域に固執しては自己満足だけで地域を動かすことはできません。「にこにこクラブ」は認知症を理解し、そのケアを学び、実践しているノウハウがあり、その実績をもって地域福祉に貢献するには、先ずこちらを評価してもらうためのPRも必要であり、市民活動団体や他の施設や関連機関とのネットワークを持つことも必要になります。現在、茅ヶ崎市では地域福祉計画が策定され、「住み慣れた家や地域で自分らしく幸せに暮らしたい」をモットーに活動を展開しています。「にこにこクラブ」は、この行政の計画の中に認知症についての情報の発信源として参加し、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり、まちづくり」の一翼を担っています。

4. まとめ

「にこにこクラブ」は活動を20数年間もやっつけながら、地味で目立つことのない存在であったと思います。しかし、最近では行政からも認知症のことなら「にこにこクラブ」さん、と頼られるようになってきました。これからの活動は、軸足の一つを「地域で支えよう認知症」として、自分たちが長年の経験から学んだ認知症の方および家族へのケアについて、分かりやすく助言できる能力を涵養し、困っている人たちに助言していく。また、行政や市民活動団体などの協力を得ながら発言する機会を多く持ち、認知症の方や家族を地域の人みんなでサポートする運動を広げたい。

また、既存の活動としては、一緒に活動する仲間を増やして個々人へのサポートの範囲を広げたい。

活動名称	生涯学習町づくり回想法
活動要旨	市の生涯学習講座「回想法」の受講生と近隣の主婦などをスタッフとし、回想法を通じたまちづくりを目指す。認知症高齢者施設へも訪問し、回想法を実施
応募者	コスモスの会・校舎の無い学校 森 依願
連絡先	〒779-3301 徳島県吉野川市川島町川島 438-1

(概 要)

- ・校舎の無い学校は、現代文明社会が失った創造的遊びの文化の復権・復活を期して2007年4月創立。
- ・キャンパスは、町全体。山、川、野原、路地、各種施設等。
- ・校長は、年齢を重ねて遊び心に磨きがかかり、ますます豊かな生活を続けている人。
教員は、一人一芸に秀でた文部科学省無認可のふるさと教員。
用務員は、授業以外の学校経営にかかわる地域アニメーター。
PTAは、各界の豊かな遊び心を保持する専門家。例)上智大学教授(臨床心理士)黒川由紀子氏。
生徒は、年齢、性別、国籍、人種、宗教等、一切不問。
- ・学費は、一切無料。
- ・建学の精神は、自立協同。
- ・学校の教育目標は、創造的遊び人間発達をめざし、幼な子が持っている過去体験の知恵をかみ合わせ、幼老共生の社会を実現する。
- ・一時留学は、自由。寄宿舍は善根宿で三食一泊無料。
- ・今年度の重点目標は、遊びをパスポートとして地域の老人施設のお年寄り（認知症）とハートボランティア活動を開始。

<現在の活動>

- (1) 思い出語り集会（月例会） 一月1回のグループ回想法
- (2) “校舎の無い学校” 行事開催 一子どもの遊び文化の伝承活動など
- (3) 月例学習会「遊びって何だろう科」「“VIDEO”を見よう科」
- (4) 子ども遊ばせ隊の派遣
- (5) 校舎の無い学校通信かわら版発行
- (6) 認知症のお年寄りのところへ訪問し、「アクティベイト回想法」を実施
- (7) おもちゃの図書館事業

活動名称	認知症の傾聴ボランティア
活動要旨	認知症高齢者の方などへの傾聴ボランティア活動ー良く聴く、目でよく見る、全部しっかり受けとめる、気持ちを通わせて、心にゆとりをもって相手の話を聴く
応募者	シニア・傾聴ボランティア 市川 道雄
連絡先	〒370-0015 群馬県高崎市島野町 567

(概 要)

近年、社会福祉をとりまく環境は大きく変わり、人々は安全・安心・住み慣れた地域での生活を人と人とのふれあい共に手を携えて支えあい、尊厳を保ちながら、いきいきと生きる、心にゆとりのある生活へとライフスタイルの変化がみられます。現実高齢者の生活を見たときに何か出来ることはないかなと考えていた矢先に県長寿社会づくり財団で傾聴ボランティア養成講座があることを知りました。早速受講の手続きをして受講する。「この講座は、カウンセリングを基本にした傾聴について学び、高齢者認知症、言語障害者失語症の方、各種の障害を持つ人々の悩みや寂しさを抱える人たちのお話相手や相談相手（若い世代・子供の相談も）をするボランティアの養成講座です。この講義では話の聴き方（傾聴スキル）・それによる脳の働き浄化・五感・信頼関係・情緒的一体感の共有・守秘義務等々4日間（講義・ロールプレイング）をうけて終了しました。話を心で受けとめ「良く聴く」の意味がわかるようになりました。“聴くということの大切さを感じ、地域の社会福祉協議会に「傾聴ボランティア」を登録することにしました。そこで介護施設を紹介されました。施設の責任者には「傾聴についての思いを良くお話したところ気持ち良く承諾をしてくれました」。その日から活動を始める（平成17年11月～）施設内に入り高齢者に近づいて話をすることが大変難しかったのです。戸惑いを実感し四苦八苦しながら繰り返し、繰り返し優しさを持って活動を続けました。数ヶ月経ったころから高齢者の方々の表情に少しずつではありますが明るさが見えてきました。不安と緊張の連続で思うように言葉も出ない、傾聴ボランティア活動はこんなやり方でよいのだろうかと思うこともありました。活動を終えて帰途についてからボランティア仲間との電話等で連絡を取りあいながら反省会や勉強会をしていました。勉強会の中でこんなことが出たのです。会話の無いときは「そっと側に寄り添っているだけで温かい心遣いになる」なるほどと思い、ロールプレイングで良く学んだことであることを思い出しました。このことは大きな励みとなり力となったのです。それから数日後のことです。いつものように活動を始めると高齢者の方々も笑顔を見せてくれるようになりました。施設内の雰囲気もよく挨拶をすると反応があります。そのときに一人の高齢者が近づいて来ました。私の方を向いて「あんたさこの前のときにわしの話を良く聴いてくれたので嬉しくてね、楽しみにさあんたを待っていたのさ」と私の所に来て嬉しそうに大きな声で話しかけてくれました。思わず私も高齢者の方の手を優しく握りしめました。すると高齢者の方が泣き出したので、私は握りしめた手が痛いのかと思いごめんね痛かったのねーと申したのですが高齢者の方が顔を横に振ってこんなことを言ってくれました「わしの話をこんなに良く聴いてくれたのはあんたしかいないよ、この年になってほんとに嬉しかったよ」といって高齢者の方が「俺も自然に泣けてきちゃったのさ」といいながらハンカチで目頭を押さえたのです。真摯に一生懸命に活動することが大切なんだと思いました。何か嬉しさと恥ずかしさが入り混じった感じになりました。高齢者の皆様有難うございます。傾聴は相手の立場に立って、尊重して肯定的に・共感的に受けとめて聴く、温かい心遣い・情緒的一体感の共有を大切に相手の状態を良く観察し、あわてないでゆっくりと活動する。相手の方はいろいろの経験沢山している方です尊厳を大切にしたい。一生懸命に注意深く耳を傾けて心を込めて聴く五感をフル稼働させ聴きたいわ、聴かせてくださいと信頼関係の架け橋を、そっと側に寄り添いお話を優しく聴く活動をしております。

活動名称	ねたきり、認知症の方をかかえる家族の会
活動要旨	ねたきりや認知症の方を介護している家族が集い、定例会や会報を通して情報交換を行う
応募者	小平わかばの会 代表 萩谷 洋子
連絡先	〒187-0024 東京都小平市たかの台 27-1

(概 要)

<小平市のあらまし>

小平市は、東京都23区を中心から西26kmの距離にあります。

人口は約180,000人、65歳以上の単身世帯約5,300世帯(平成18年4月1日)で武蔵野台地や市の中央部を東西に青梅街道が貫き、それに平行して南に五日市街道が、それに沿って玉川上水が流れています。その沿道は樹木に覆われ、市民ばかりか都民の散歩道として親しまれています。東西に長い市内には、JR、私鉄の駅が7駅あります。

<「小平わかばの会」について>

- ・ねたきりや認知症の方を介護している家族、及び会の趣旨に理解を持った住民で構成。
- ・現在、発足24年目で、会員数70名。
- ・都保健所の介護者講座の受講者から生まれ、8年後、行政から介護者の紹介も多くなり、現在は、「小平市社会福祉協議会ボランティア登録団体」へと発展。
- ・介護者の閉じこもり、孤立からの解放をめざしています。
- ・当事者の、話すこと、聴くことを最も大切に歩んでおります。

<会の事業について>

- ・毎月1回、定例会を開催。
- ・例会では会員の近況報告、情報交換などをいたします。看取り後の経験者の介護のノウハウは、心のケアということで、当会の大きな人的資産になっております。
- ・会報を隔月発行。例会や学習会の内容を掲載し、例会に参加できない会員への情報提供といたしております。

<福祉行政への協力>

- ・新施設への見学及び意見の具申。
- ・活動実践—福祉バザー、共同募金の参加。

<認知症啓蒙活動>

- ・介護福祉、社会福祉専攻の学生の、学外教育の一環として、会員宅訪問、見学の協力をいたしております。
- ・看取り後の独居会員宅の開放により、移動交流会(ミニデイ的)を地域のかたも誘い、行っております。
- ・独居高齢者、老々介護家族へのサポーターとして、シルバー協力員登録を勧めています(小平市の共助制度)。

<今後のテーマ>

- 1) 独居会員宅を拠点とした 地域密着の移動交流会の増強
- 2) かかりつけ医の啓蒙及び往診医のマップづくり

活動名称	認知症メモリーウオーク・千葉
活動要旨	認知症の理解と病気に対する社会への啓蒙活動などを目的として、認知症の専門職と家族の会、行政が協働して日本で初めての「メモリーウオーク」(パレード)を実施
応募者	認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会 永島 光枝
連絡先	〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港 4-3 千葉県社会福祉センター3 階 認知症の人と家族の会千葉県支部内

(概 要)

1. 計画の経緯と実行委員会

急激なスピードで高齢化が進む千葉県では、認知症高齢者も急増することが見込まれることから、地域で助け合い、支えあう体制を構築することが課題です。言わば、待ったなし！の状況に対応するため、千葉県高齢者保健福祉計画推進作業部会の下部に設置された「千葉県認知症対策研究会」から、この「認知症メモリーウオーク・千葉」の開催を千葉県へ提案し、実行を計画しました。実施においては、千葉県認知症対策研究会、千葉県・千葉市の高齢者福祉担当課、認知症の人と家族の会千葉県支部が「認知症メモリーウオーク・千葉」実行委員会を組織して運営にあたりました。

2. 目的と意義

9月21日は「世界アルツハイマーデー」です。諸外国ではこの日を中心にアルツハイマー病の理解と、社会への啓蒙活動の目的で「メモリーウオーク」(パレード)が盛んに行われています。2006年のアルツハイマーデーでは、米国、英国、オランダ、インド、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、台湾、キューバ、ドミニカ、ジャマイカなどで行われましたが、日本ではまだ行われていませんでした。

認知症の理解が地域に行き渡り、偏見などがなくなれば、認知症になっても住みなれたところで暮らし続けられます。認知症の人と家族、一般市民、医療・保健・介護の従事者などが共に歩くことは、社会に対して理解を求めると同時に、閉じこもりがちな認知症の人と家族の心を開くことにもなります。ですから一緒に歩くことが必要なのです！

「認知症でも今までどおり住みなれた千葉で暮らしたい」というアピールをこめて歩きます。

3. テーマ

「認知症でも安心な千葉に！！」

4. 事業内容

- (1) 日時：平成19年9月16日(日) 10:00開会、10:30出発、12:00解散
- (2) 場所(コース)：県庁～中央公園～JR千葉駅手前
- (3) 参加予定者数：300人
- (4) 参加対象者：一般県民、認知症の人とその家族(介護者)、福祉・医療・保健関係者、施設従事者、等
- (5) 参加費：無料(保険料は、主催者負担)、 (6) 雨天決行、荒天中止

5. 主 催

認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会

(構成団体：千葉県認知症対策研究会、千葉県、千葉市、認知症の人と家族の会千葉県支部)
委員長 助川 未枝保(千葉県認知症対策研究会 会長)

活動名称	古民家を拠点になじみの空間を大切に、認知症の方もそうでない方も、地域の誰もが寄りあえる場所づくりを
活動要旨	空家となっていた古民家を再生して作った介護施設にてデイサービスを開始。施設での様々な行事を通して、認知症高齢者と地域の方々との交流を見守る
応募者	NPO法人 こだま 近藤 けい子
連絡先	〒299-4404 千葉県長生郡睦沢町北山田 172

(概 要)

かつてにぎやかな声が聞こえた家が じいちゃんばあちゃんが亡くなった後、ひっそりとして いつの間にか 誰も尋ねなくなって 時間が止まっています
 私たちの願いは そんな静まりかえった家に命の灯りを灯すことです
 まるで眠れる森の美女の館のような 蔦が絡まって身動きできない木々たち
 私たちの住む 地域には いろいろな人が暮らしています
 みんな何かしら 辛いことや困ったことを抱えながら 暮らしています
 そしてどんな人でも人の支えなしには生きていけないものです
 私たちはみんなが自分にできる手助けを行いあうことで みんなが暮らしやすい
 地域 できるのではないかと考えます
 誰もが集まることのできる場を
 誰もがちょっと手伝って と言える場を NPOこだまは作ります

(NPO法人こだまホームページより)

木々に囲まれたこの家と出会った時、この場所には、なんだか木の精＝木霊がひそんでいるように感じました。そして「こだま」がうまれました。みんなの声が響きあうように…

空家となっていた古民家の再生を50代60代が中心となって、取り組みました。そして「介護」という福祉分野での活用によって、古い家に生命が吹き込まれたのです。

なじみの空間づくりは認知症・高齢者介護のキーポイントです。そして、この空間は、障がいのある人にも子どもにとっても、心地良い場所になりました。

地域のだれもが、垣根を作らずに出入りできる場所になることが、私達の目標です。

ふつうの家に来たような自然な気持ちで利用される方々はいっぱいになりました。

自然や環境を守ること…人間らしく生活しつづけること…たとえ障がいを持って、認知症になっても、自分らしい生活、その人らしく生きることを大切にする介護にたくさんの共通項があることを実感できました。

2003（平成15年）古民家と出会い借りたい思いを家主に伝えーみんなでNPOを立ち上げ

2004（平成16年）改修とデイサービスこだまを1日10人の定員で開始

2005（平成17年）デイサービス開始から9ヶ月

ー「よっちゃばるこだままつり」250名が集う

2006（平成18年）夏・ジンバブエから歌とダンスのジャナグル来日。秋に「こだままつり」
 沖縄コンサートと古民家シンポジウム。地域の人々が集う

2007年（平成19年）「こだま de アート」0歳から97歳まで参加。アートを通して心が解放される体験。懐かしい物たちに囲まれ安心感が生まれる。「思い出博物館」作り開始。

「家族の会」を講師にサポーター養成講座実施。

活動名称	独居老人の認知症を支えあう地域と地域包括支援センターのかかわり
活動要旨	地域の認知症の独居老人が倒れたことをきっかけに、行政・地域包括支援センター・自治会・民生委員・地域のボランティアが一丸となって認知症高齢者を支援
応募者	小田原市第五地区地域包括支援センター 脇 正宏、椎野 京子、八十島 弘子、田口 由美、小田原市役所 鈴木 富子
連絡先	〒250-0207 神奈川県小田原市曾我光海2番1

(概 要)

小田原市の高齢化率は全国平均とほぼ同等に推移していますが、今回事例提出した地域は、自治会単位では高齢化率45.8%、高齢夫婦世帯の割合14.9%、高齢単身世帯の割合34.7%という高い割合となっています。この自治会は全て集合住宅で構成されています。集合住宅ということで古くから住んでいる方も多いのですが、反面入れ替わりもあり、高齢になってから転居してくる方も多いため、近所付き合いなどの地域との関わりが親密でない方も多く、問題が発生して地域包括支援センターに相談が来る頃には認知症が進行していることも少なくありません。

今回の事例は、87歳の独居男性が食べるものがなく自宅前で倒れてしまったことから発覚しました。集合住宅で周りとの関わりも少ないので、地域住民も詳しいことを知らず、情報収集に時間がかかりました。又、認知症の進行に伴い日付の感覚が鈍くなり、年金の受給日以前に銀行へ行き入金されていないことで、年金不払い問題と混同して食べるものが買えなくなってしまったと思い込んでいることが分かりました。さらに親族の連絡先も全く分からなかったため、暫くの間は地域住民の好意で、食事・掃除・入浴・洗濯の支援がありましたが、関わりを重ねることで地域住民の好意の支えに甘えてしまい、お金を出しての介護サービスに必要性を感じなかったため、すぐには配食サービスしか導入できず、食事面では地域住民の精神的な負担軽減はできましたが、新たにボランティアでの支援の必要性がいつまで続くのかという不安が生じて来ました。次のサービス導入へ向けて本人が納得し始めた相談受付から10日後、主治医意見書作成のため受診したところ、検査の必要や、地域の体制整備に時間が必要であろうという主治医やソーシャルワーカーの配慮もあり入院となりました。3週間ほどの入院でしたが、その間、疎遠だった親族と連絡がとれ、地域住民の疲れもなくなり、要介護認定の結果も出て、退院直後からスムーズに生活ができる体制整備の時間が取れました。この報告をまとめているのは相談受付からまだ1ヶ月半ですが、本人は地域の方の見守りや訪問介護によるサービスを受け自宅での生活を続けています。

相談受付からあまり時間が経っておらず、本人や地域に対して今後はどうの様にしていこうかと検討中です。急な変化が見えて来ると誰しも困惑してしまいますので、地域包括支援センターやケアマネージャーが早い段階で関わることでできるように、少しの変化に気づき、認知症の早期発見ができる様な環境作りが必要だと思います。現在、対象者の把握方法や見守り体制については、社会福祉協議会・自治会・民生委員がそれぞれ独自に行い、必要に応じて地域包括支援センターに相談がある状況です。それぞれの情報が一元的になれば、組織的な見守りができ、有意義なものになると思いますが、互いに個人情報の取り扱いに慎重でなかなか情報が交換されていません。その統一作業を地域ごと個別に行うのではなく、市の方針として一斉にできるように市に働きかけていく必要があると思います。また、認知症の早期発見の目を養う点で、地域住民対象の認知症教室を開催し、家族・地域住民が早い段階で主治医等に相談できるようにしていきたいと考えております。

活動名称	沼田市認知症にやさしい地域づくりネットワーク
活動要旨	地域社会において一人暮らし高齢者や認知症高齢者の自立生活を支えるべく、市内の関係機関や福祉団体、地域のFM局や商店会が協力しネットワークを発足、模擬徘徊訓練などを実施
応募者	医療法人 大誠会 内田病院 横坂 稔
連絡先	〒378-0005 群馬県沼田市久屋原町 345 番 1

(概 要)

利根沼田地方では、多くの高齢者が在宅で生活しています。認知症高齢者が徘徊により所在不明となってしまうケースが沼田警察署内でも年々増え続け、平成17年では10件、平成18年では28件と確実に増えつつあります。

私たちの住む利根沼田地域では認知症高齢者が徘徊により所在不明になると、生命に危険が及ぶ可能性があり一刻を争います。なぜなら沼田市のような地方都市では、街の中を徘徊するよりも、人の眼の届かない畑・谷川・山林等に迷い込んでしまうケースがとて多く、一度迷い込むと発見が難しく捜索がとて困難になるためです。

特に11月から5月までの冬の期間は、所在不明者を捜すことができないと死に至るケースがおきてきます。現実には数年前に起きた事例では、12月下旬、一人の認知症高齢者（女性）が夕刻にいなくなり、家族全員で家の周りを捜しましたが見つからず、家族は「少しすれば帰ってくる」「なるべく大さわぎにたくない」との気持ちから、通報が翌日になってしまいました。その後、村の消防団・青年団・部落の人々、総出で捜索したそうですが見つからず、3日後に捜索は打ち切られました。残念ながらこの方は翌年4月、雪が解けたことにより亡くなって発見されました。

このように認知症高齢者にはとても厳しい環境ですが、「認知症にやさしい地域づくりネットワーク」が設立され、利根沼田住民の所在者の発見には一定の成果をあげています。このネットワークは平成16年7月、沼田市、沼田市社会福祉協議会、沼田市在宅介護支援センター協議会が中心となって「高齢者支援ネットワーク事業」としてスタートし、平成17年5月「認知症にやさしい地域づくりネットワーク」として、市内の関係機関や福祉団体・関係者、地域のFM局や商店会などの多彩な団体の協力を得、発会しました。このネットワークは「地域社会において独居高齢者や認知症高齢者の自立生活を支えるためには、幅広い分野における支援が必要であるほか、近隣の住民の見守り活動が重要。このため、市内の関係機関や福祉団体・関係者、また多彩な協力団体が参画し、地域社会において生活している支援を必要とする方々に対し、きめ細かい対応と継続的なアフターケアを提供し、高齢者が住み慣れた地域で安心して生活を営むことを支援する」という目的で発足しました。また、同会が主催となりネットワークの重要性を周知することだけでなく、認知症に対する理解を広く市民の方々に深めてもらうため、平成17年9月に講演会・シンポジウムも開催しています。

今回、このネットワークが十分機能しているのか、どのようなところに問題点が潜んでいるのかを検証するため、平成19年5月27日（日）、模擬徘徊訓練を行いました。

活動名称	もりたやproject
活動要旨	グループホームの入居者が、いつも通うスーパー「もりたや」の店員さんを食事会にご招待する「プロジェクト」
応募者	社会福祉法人 櫻灯会 グループホームさくらの家 東矢口 管理者：奥村友保 常務理事：櫻井真里（グループホームさくらの家東矢口代表）
連絡先	〒146-0094 東京都大田区東矢口 2-6-24

（概 要）

地域に根ざした認知症グループホームを目指して開設した櫻灯会の「さくらの家 東矢口」は、東京都大田区から土地をお借りして平成19年4月1日にオープンした新しいホームである。当初から地域密着型グループホームとしてスタートしているため、町会活動への参加や近くの商店街へのお買い物、家族・職員を交えての地域行事への参加など、認知症高齢者が地域と共に生きることを積極的に後押ししてきた。幸いなことに、この地域はグループホームの入居者が外出し、地域の住民として社会性を持って生きていくことにとっても寛大であった。地域住民の協力、町会長さんのご理解などさまざまな人々の助けを借りて、グループホーム入居者はとても安定した生活をしている。仕事帰りの息子が、おかあさんのところに枝豆とビールを持って遊びに来て、一日の話と枝豆を着にビールを一杯ググッと飲んで、いい気分になって家族の下に帰る、そんなグループホームになってきた。おかあさんは息子の顔は毎日見られるし、好きなビールは息子が買って来てくれるし、家族との関係は以前よりはるかに好転した。暗い顔して愚痴を言うこともなくなり、明るい笑い声が多くなった。同時に世話好き・社交的だった昔の顔が戻ってきたのか、また「作った得意料理をだれかに食べてもらいたい」という気持ちからか、「下の人（他ユニット）にも作ってあげたいの」との発言が聞かれるようになった。一方、オープンより利用している近くのスーパーでは、当初買い物の場所が分らなかつたり、また狭いため、シルバーカーで通りにくく困っていた状態から、現在では買い物に行ったときには大きな声で挨拶してくれたり、買い物の場所が分らずに困っていると、声をかけて場所を教えてくれる、また狭ければ物をどけて通りやすくしてくれるなど、お店の方がグループホーム入居者に対し配慮してくれるようになった。

そこで今回私たちが提案するのは、これらの商店街との人間関係を「お店の人」と「お客」の関係から、同じ地域に生きる「人」と「人」の関係に変化させる試みである。

「じゃあ、いつもお世話になっているから、スーパーの人でも招待しようか」という新人職員の先入観のない言葉により、入居者の「うん、やってみたい」という声があがり、自分たちの家に招き入れて、ご馳走をすることによって入居者に更なる自信を持っていただく。認知症ケアはこうしたきっかけが役割を持てる生活を支援する重要な鍵であることを認識した。そしてグループホームの入居者が、普段自分たちが買い物をしたり、お話をしたりしている相手を、単に外に出て行って挨拶する関係から相互の家に行ったり来たりする関係に進展させることが、認知症と共に生きる社会を築く第一歩になるだろうと考えた。図らずも自分の口からそのような積極的な発言があった入居者をキーとして、私たちはお呼ばれしたりされたりする関係を地域社会に住む人々と構築してみようと考えた。今回ご紹介するのはそのプロセスであり、その波及効果の一部である。

活動名称	認知症フレンドシップクラブ
活動要旨	長年暮らしてきた地域での隣人（友人）として認知症の方を支援すべく、余暇活動の支援や、安心して利用できる店舗「認知症フレンドシップストアー」認定活動を展開
応募者	認知症フレンドシップクラブ 代表 井出 訓
連絡先	〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢 1757 北海道医療大学内

（概 要）

認知症フレンドシップクラブは、平成19年3月に北海道札幌で立ち上がった非営利組織です。認知症を患いながら暮らす方々、そのご家族や介護者の方々が、安心して暮らせる町づくりを進めると共に、生きる上での勇気と豊かさを提供することを目指し、長年暮らしてきた地域で安心して過ごせるよう応援したいと願う人々が、彼らの隣人（友人）として自由に集い活動に加われる、そんなフレンドシップを基調とする展開を願い活動続ける団体です。また、社会における非営利組織としてのあり方を自覚し、認知症に対する社会貢献の「場」を提供する存在となること、それをもって認知症を患う方々と介護にあたる方々の生活の質を高め、豊かな社会の創造に資する存在となることを目標としています。

現在、認知症フレンドシップクラブでは2つの活動を行っています。そのひとつは、認知症（若年性を含む）を患う方々の余暇活動を支援するDFサポーター活動です。認知症を患うことで、今まで楽しみとしてきた余暇活動が続けられなくなった人たちに、そうした活動が続けられるよう、認知症に関する知識とスキルをもった、いわばプロの友人であるサポーターを養成するものです。

認知症フレンドシップクラブでは、DFサポーター養成講座の開催と、認知症の方々やご家族、介護者からの依頼の受付、サポーターとのペアリング、DFサポーターによる実際の活動支援の提供を行っています。

もうひとつの活動は、認知症フレンドシップストアーと呼ばれる活動です。この活動は、私たちが暮らす地域にある店舗や企業、オフィスなどのすべてを、認知症バリアフリーに変えて行きたいという願いから始まりました。例えば、ご家族の方が認知症をわずらう方々と外食をしようと考えたとき、レストランでいやな顔をされないだろうかなど、心配することも少なくはないと思います。

しかし、地域にあるレストランや店舗が「大丈夫です」「ぜひいらしてください」という意思表示をすれば、家族や介護者の方々も、安心してその店舗を利用することができると思うのです。そこで、認知症フレンドシップクラブでは、認知症バリアフリーの店舗であると地域の中で声をあげてくださる店舗や企業を募り、その方々を対象に認知症に関する勉強会（認知症サポーター養成講座）を行い、その履修者が働く店舗や企業などを認知症フレンドシップストアーとして認定する活動を行っています。認知症フレンドシップストアーとして地域の中で意思表示をしてくださる店舗や企業に関しては、認知症フレンドシップクラブのホームページ上に宣伝や「あなたの街のフレンドシップストアーマップ」などを載せ、より多くの方が認知症バリアフリーの店舗に関して知っていただくサポートをします。また認知症フレンドシップストアーでは、認知症フレンドシップクラブのメンバーが利用する場合の特典やサービスが得られるようなシステムを作っています。

認知症フレンドシップクラブでは、地域に暮らす人が自分にできることを行いながらお互いを支えあい、その中で地域にともに暮らす認知症の方々を支援していくシステムを、町づくりの活動として根づかせていきたいと願っています。

活動名称	認知症及び認知症予防の啓発活動
活動要旨	看護大学の先生を講師に招いての認知症の勉強会及びそれを活かしたグループホーム訪問等のボランティア活動
応募者	いちご会 会長 多々見 邦次
連絡先	〒929-1214 石川県かほく市内高松ケ 50-1

(概 要)

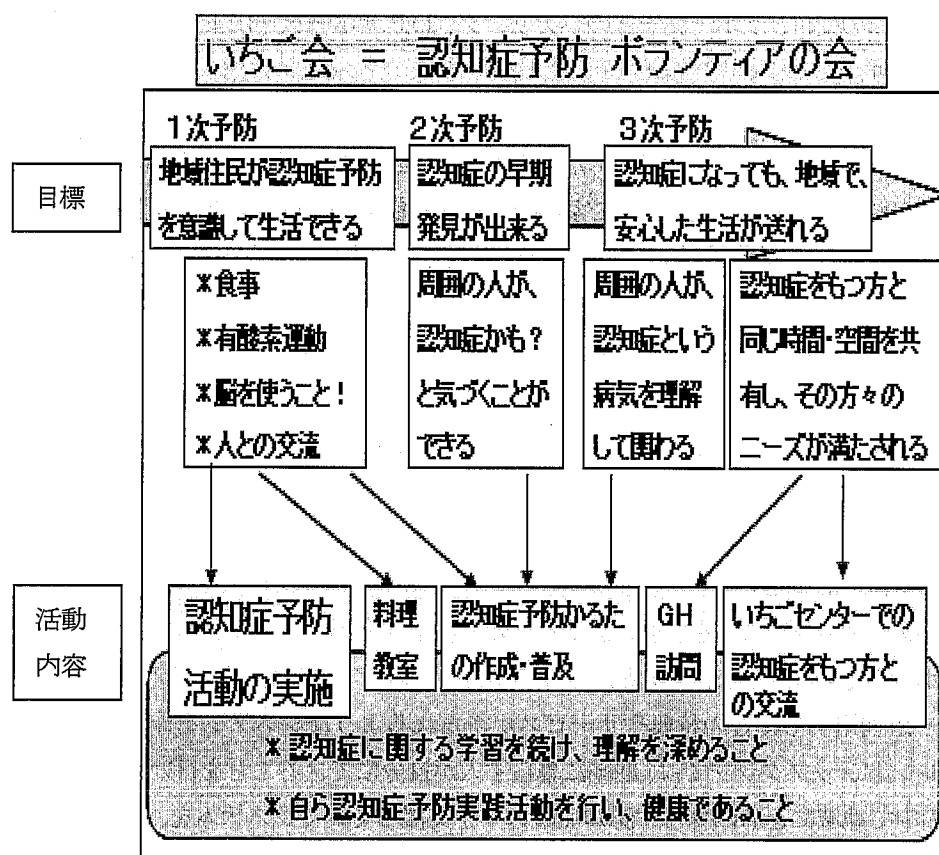
石川県かほく市にある認知症予防ボランティアの会「いちご会」は、平成15年石川県立看護大学附属地域ケア総合センターが高齢学の調査研究のために集めたボランティアグループでしたが、平成19年4月かほく市社会福祉協議会に認知症及び認知症予防の普及啓発グループとしてボランティア登録をしました。

主な活動は、石川県立看護大学の先生方を講師として月1回の勉強会を開催し勉強をしています。今年度は、太田正博さんの「マイウエイ」の本を教科書とし、少しずつみんなで読み進めてきました。その定例会も46回を迎えることができましたことは、看護大学の先生方のリードのお陰です。

その定例会では、今年4月からのボランティア登録をきっかけに、積極的に出前活動をしていこうと話合っています。

活動の理念は定例会で学んだことや皆で話し合って決めたことをスケジュール化し、いちごセンターや出前活動をするを基本としています。

一連の流れは下の図のとおりです。一番上の四角が目標で、一番下の四角が実際の活動内容です。



活動名称	住み慣れた町での生活の継続
活動要旨	グループホームの入居者が、近くにある昔からなじみの喫茶店へ再び通い店主と交流することによって、施設での生活のストレス緩和、自信をよみがえらせる
応募者	社会福祉法人 恩賜財団 愛知県同胞援護会 グループホーム春緑苑 副主任介護士 丹羽 宏
連絡先	〒487-0031 愛知県春日井市廻間町703番地の1

(概 要)

○グループホーム春緑苑がある地域の紹介

当施設は愛知県尾張西部の春日井市東部の廻間町にある。春日井市は人口約30万人で、廻間町は田園風景や森や林が美しい緑豊かな町である。施設周辺には当施設が所属する法人の施設や他の法人施設、高校、警察学校などの施設はあるが、民家は数軒だけでスーパーなどの店はない。車で10分程度の高蔵寺ニュータウンには、店や銀行、病院などがある。

○活動内容

入居者Aさんは、入居当初、家族に対して強い不信感と怒りを表に出し、他の利用者に対して悪影響を及ぼした。「どうして俺はこんなところにいるんだ」「息子は何もしてくれない」「俺はぼけていない、頭はしっかりしている」などの発言があった。しかし、「ここはいつでもコーヒーが飲めるからいい。前の病院は飲ましてくれない」など今の生活を自分で納得しようとする言動もみられてきた。気分のいいときは、「俺はなんでもできるから、手伝いますよ」と協力的な発言もあったが、他に話し相手がいないため、食事とおやつ以外は居室にこもりテレビを見てすごすことが多かった。これは、在宅での生活と特に変わらない生活リズムと考えられたが一人で室内にこもること、かつてに思い込みが進み暴言がでる傾向にあった。会話の中で「俺は毎朝この近くの喫茶店にいていた。その喫茶店ではコーヒーを2杯飲んで、俺だけ特別にバナナを出してくれていた」と自慢げに話す姿がみられた。ストレス解消および在宅での生活の継続のため、定期的にその喫茶店に行くことにした。喫茶店ではよく話すし、店主に話しかけられ生き生きとする姿が見られることが多い。家族の面会は入院時同様なためイライラも募っていたが、平成18年7月に入所(平成17年8月)以来初めて長男が面会に来た。面会後は多少ストレスが解消される。長男も直接Aさんと会い、Aさんの態度が穏やかだったため、以後定期的に面会に来てくれるようになった。

○活動の成果

在宅生活での楽しみであったなじみの喫茶店に通うことにより、本人が施設での生活にはりあいがもてるようになってきている。以前は参加しなかった施設の合同行事などにも参加がみられるようになった。長男の面会も継続的にあるため、本人もここでの生活に納得してきている。Aさんのストレス緩和のために実施している「なじみの喫茶店に行く」ということは、在宅生活で一番の楽しみであったことの継続として、本人やまわりの利用者により影響をあたえていると実感される。そして在宅時より多少認知症が進行しているAさんに対して、会話中におかしな言動が見られたときでも、その店の人たちが以前とかわらない接客をしてくれ、常連客としての扱いを引き続きしていてくれることが、本人の自信とストレス緩和の一番の利用となっている。「なじみの店」にいくという行動が、様々な理由で入居された利用者の住み慣れた町での生活につながることを痛感させられた。

活動名称	能美市学官連携プロジェクト
活動要旨	認知症・介護予防事業の方向性を探り、子どもを中心に認知症の人を取り巻くコミュニティ創造を進め、世代間コミュニケーション・プロジェクトを展開する。
応募者	共生ケア研究グループ 山崎 竜二
連絡先	〒923-1211 石川県能見市旭台 1-8-7-504

(概 要)

<背景・課題>

平成18年8月より市役所と大学院の連携協定締結に基づき市から認知症高齢者の予防事業・支援方策を整備する課題提示を受け検討を開始。認知症の方も社会参加できる仕組みと、地域の人々に身近な理解を促すモデルの構築に取り組んできた。

<目的>

1. 高齢者の認知・情動・意欲など精神機能に訴え、残存能力・潜在能力を引き出す
2. 高齢者の力を有効活用して子どもへの教育との相乗効果をもたらす
3. 子ども・保護者・近隣住民との接点から、認知症を抱える人の身近な理解を促す

<対象>

1. 介護予防教室に通う特定高齢者
2. 特定高齢者に限定されない市内の一般高齢者
3. 市内施設在住の認知症高齢者

<内容>

1. 市内各地域の予防教室における回想法・共生ケアの実施（二次予防の枠組み）

特定高齢者を対象にした教室では平成18年12月より回想法を導入し、高齢者の意欲向上を図る。未就学児と保護者、そして教室近隣の保育園との協力により共生ケアを実施し、童謡唱歌の披露などから高齢者が育児支援のサポーターとして力を発揮できる環境を整備。子どもから保護者のサークルへと通じる三世代モデルのコミュニティ形成のなかで認知症の身近な理解を促す。

2. モデル地区の小学校区における回想法・共生ケアの実施（一次・三次予防の枠組み）

退職後自宅に閉じこもりがちな一般高齢者が活躍できる環境を整備。一般高齢者が徒歩でも通える小学校区にて、民生委員の協力を得て参加を募った。また小学生と認知症高齢者との世代間回想法プロジェクトを小学校の総合学習の時間を利用して実施。平成18年12月一般高齢者と小学4年児童が「まちの物語」の劇創作を行った。事前に児童は認知症の人との接し方を学び、交流で理解を深め子ども認知症サポーターとなった。創作劇の映像は特定高齢者の通う教室で利用可能。

<成果と展望>

小学校の事前学習で、児童は認知症の特性を理解していたが、恐れや哀れみを記述。創作劇を用いた世代間回想法では、どのように回想が児童の持つ認知症高齢者の観念に作用するかを探るため、前後の高齢者像についてSD法の結果を分析した。参加児童34名の統計の結果、児童は認知症の人に対し、高齢者像を賢く生産的であると肯定的に捉えるように変化した。

回想法は認知症の人に対する偏見を防ぐ点で有効。創作過程に認知症高齢者が参加可能なプログラムの改良を行い、継続発展のため市社協によるプロジェクト事業化、自治組織の活用を検討。事前学習の論点を深め「老いる・生きる」をテーマに人の脆さや弱さにも焦点を当て、高齢者の参画した授業参観等で健常者を基準に認知症の人を欠如態と捉える見方を問い直す実践哲学に取り組む。

活動名称	認知症の要介護者の介護に大きな力を発揮する「えがおの会」
活動要旨	要介護者を抱える家族が定例会や交流会を通して互いの思いを共有し、それを介護に活かしたり、地域に認知症への理解を深めようとするボランティア活動
応募者	阿倍野介護家族の会・えがおの会 横尾 禮子
連絡先	〒545-0022 大阪市阿倍野区播磨町1-4-2

(概 要)

1. 目的

要介護者を抱える家族などが、互いの交流を通して支え合い、介護の知恵や知識を高めることで本人とともに暮すことが楽になり、また広く地域社会に認知症や認知症罹患の方・ケアする立場の人に対する理解を深めることを目的とする。

2. 活動

①総会を4月に開催する。

②交流会を毎月第3水曜日午後1時から3時まで開催。精神保健福祉士が年に3回、相談員は毎回できる限り同席する。内容は連絡事項の後、要介護者の介護状況や困惑などを語る。次に癒しタイムを持つ。会員が笑い話・えほんの朗読や手品・盆踊り・全員で合唱などリラックスして終了。

③8・12月は会場を変えて会食を共にして楽しむ。 ④11月は研修や見学会を実施する。

⑤家族の会日より「えがお」を年に10回発行する。平成19年10月号は115号である。

⑥その他目的達成に必要な活動を行う。

3. 会員

介護している家族・看取りを終えた会員、その他本会の目的に賛同する者とする。平成19年度の会員数は42名である。

4. 世話人

代表・副代表・会計・世話人若干名を置く。世話人の任期は1年であるが、再任は可とする。

5. 事務局

阿倍野区在宅サービスセンターに置く。

住所：大阪市阿倍野区帝塚山1-3-8

6. 会費等

本会の運営は、会費・寄付金・その他の収入で賄い、会費は1人年間2千円とする。

7. 活動の成果

定例会は月に1度開き、自分の介護上の悩みを聞いてもらうことで心がどれほど軽くなることか、他の人の話を聞いて、ああ、自分よりもっとハードな介護体験をなさっている方が多いと感心し、また新たな気持ちで介護に取り組める方がいる。初めての参加者は泣きながらの報告になる方も多いが、体験者がうまくカバーして、例会以外でも聞き手になる。

電話・メールなどを利用して支えとなっている。

会日より「えがお」(B4版裏表)は10月号で115号である。地域の特別養護老人ホーム・デイセンター・保健福祉センター・区在宅センター物忘れ外来医師などで配布。1号から105号をA4版189頁に製本し、400部作成した。会員は希望数を取り、残りは講演会で配布。

認知症が理解され「わたし」が罹患しても安心できる町にするため、「介護カルタ」を作成。

活動名称	“ひなたぼっこ（INA）い〜なあ〜”
活動要旨	行政・民生委員・ケアマネ・社会福祉協議会などが協力して、自分・友人・夫・親がアルツハイマーになっても安心して暮らし続けられる町づくりを目指し、認知症への正しい理解をわかちあう
応募者	介護支援専門員 中岡 俊子
連絡先	〒057-0022 北海道浦河郡浦河町昌平町 3-11 日本居宅介護支援事業所 2 階

（概 要）

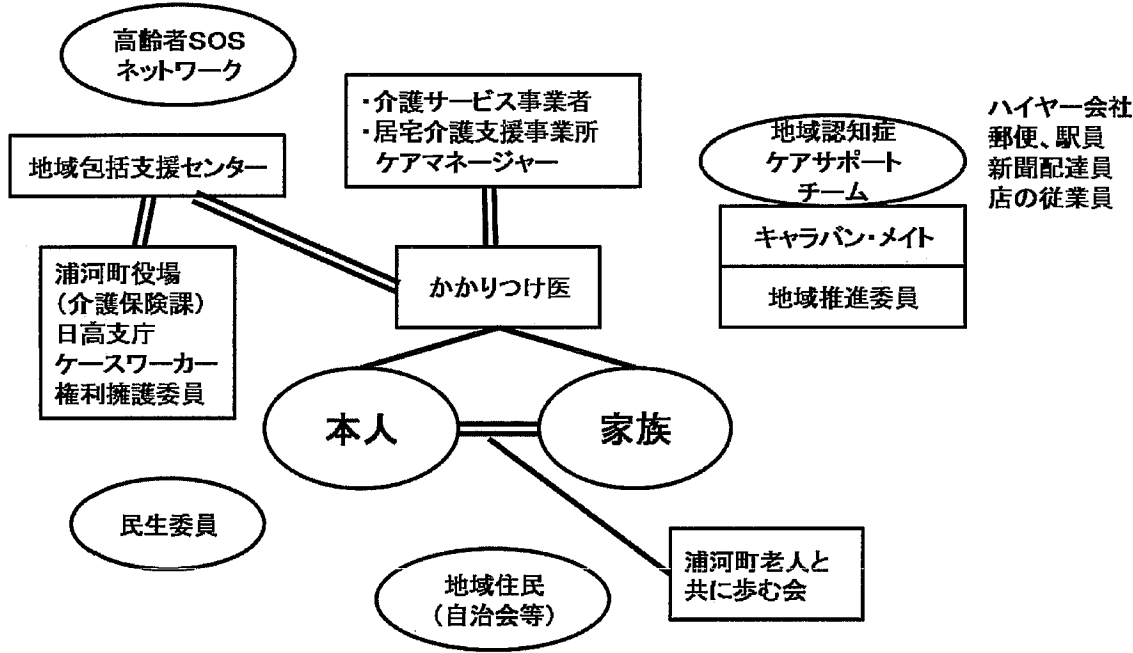
私は一ケアマネージャーですが、自分の利用者に促われず、どの人もこの住み慣れた町で（息子や娘が遠くに居ても）夫や妻と二人で、独居になっても、特にデイサービスやショートステイを利用しなくても、好きな時に起き、食べ、歩き回り顔見知りの所へ寄れる、そんな町ができればいいと思います。自分が若年性アルツハイマーや少し年をとり、認知症になっても、この町で安心して住み続けられるようにしたい。

施設入所はお金がかかるし、今の有様では入りたくない。そんな思いをなくす様に、介護関係者だけでなく地域の人（勿論、家族等）が、認知症への正しい理解をしてもらう。

まずは、介護関係者の学習会（自己研鑽も含む）自分が研修した「認知症地域推進研修」を周囲に語り、仲間作りをする。町の包括支援センターへも、協力（出来たらイニシアチブ）を要請。

民生委員で、キャラバンメイトの方と協力してメイトを増やす。
先生（精神科）を巻き込み、町内でのいろいろなサポート隊を作り、点と点を線にしていく。

浦河町の認知症早期発見・診断・支援
サービスイメージ図



活動名称	多職種で認知症ケア研究を推進する「ぐんま認知症アカデミー」の取り組み
活動要旨	認知症研究者・保健師・地域包括スタッフ・ケアマネ・家族会などが連携して、認知症の予防から支援にわたる研修会などの認知症の正しい理解を深めていく活動
応募者	ぐんま認知症アカデミー 代表幹事 山口晴康
連絡先	〒371-8514 群馬県前橋市昭和町 3-39-15 群馬大学医学部保健学科地域リハPJ室内

(概 要)

群馬県において「認知症の正しい知識」と「認知症のケア研究」を普及させようと、医療、介護、家族会、行政、研究職などの多職種が集まり、平成17年にぐんま認知症アカデミーを立ち上げた。

理念 群馬県内の認知症に関わる研究者やケアの実践に関わる者、行政の保健師や地域包括のスタッフ、ケアマネ、家族会などが連携して、認知症の先端の知識を学び、意見を交換し、また、自分たちの研究を発表しあえる場を作ることをめざしている。

活動内容 認知症の予防～支援に関することとし、①春の研修会では教育的な講演、②秋の研究発表会では公募演題＋講演と、年2回の集会を実施。認知症の講演会情報を随時メール配信。

経過 平成18年5月の第1回春の研修会（140名参加）のテーマは、評価法や統計手法などの研究方法と認知症ケアマッピング。平成18年11月の第1回秋の研究発表会（220名参加）は、公募9演題の報告と野村豊子氏による「回想法」の特別講演を実施。平成19年5月の第2回春の研修会（240名参加）のテーマは「軽度認知障害（MCI）」、「群馬県の認知症早期発見システム」、「国際生活機能分類（ICF）に基づく認知症ケア」。本年秋の第2回研究発表会では公募9演題と今井幸充氏による「認知症ケアの標準化とスキルアップを目指して」の講演を予定。

運営費用 各研修会での一人500～1,000円の参加費収入のみで運営を実現。

年会費無料のノウハウ 集客の低コスト化。①会員への連絡方法をメールとfaxに限定、メール登録を推奨。②各方面の協力＝県健康福祉部局、県社会福祉協議会、ケアマネ実務者研修などの研修会など、幹事の所属する職域団体の広報システムを利用。③ホームページは無料のEasy Orahooを利用して運営（<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>）。④講演は幹事によるボランティア。

参加者の満足度 アンケートを毎回実施。本年の第2回春の研修会（138名回答）では、介護福祉関係者4割、ケアマネ3割、看護職2割、その他1割の参加。経験年数は1～5年位が多く、年代は20～50代まで多様。演題評価は「よかった」が8割超、「現場に役立つ」が7割超と好評。

活動の意義と今後の展望 1) 当アカデミーの特色は、多職種が集合し、大学の教育・研究者～介護現場での実践者～家族会まで多様な人間の集合体であること。研究会では様々な視点からの意見や議論ができ、認知症の正しい理解が深まる。今後はこうした多様性と横の連携をさらに発展させたい。2) 日曜日の研究会はなかなか休みを取れない介護職も参加しやすい。認知症ケア専門士の研修単位にも認定され、認知症ケア専門士にとっては資格の維持のために遠方に出向く負担を軽減でき好評。3) 研究発表会では毎年9演題ほどの研究発表を公募。その中から学問的に優秀な発表と、現場で努力している発表の2題に奨励賞を与え、研究活動を奨励することを本年秋から始める。

おわりに こうした活動が全国各地で広まることを期待し、本年の認知症ケア学会で活動状況や活動のノウハウを報告。意欲さえあれば、お金が無くても活動できる。大切なのは、ネットワークとフットワークとチョット無謀な勇気。

活動名称	介護事業者による「地域の『人』づくり『場』づくり」の試み
活動要旨	民生委員等への各種資料の配布やボランティア参加依頼、公民館等で認知症の講演会等を実施など、利用者本位のサービスを目指し、地域のかけ橋として活動
応募者	株式会社 てるてるぼうず 相談役 阿部 孝
連絡先	〒944-0008 新潟県妙高市柳井田町 4-12-14

(概 要)

介護事業者の提供するサービスが、真に利用者本位のものであるためには、他の医療・介護サービスとの連携に加えて、地域、利用者本人、家族との相互理解が欠かせない。

株式会社てるてるぼうずは、地域のかけ橋となり共働性を高めるとの理念の下で「地域の『人』づくり『場』づくり」の試みとして、次のような取り組みを行っている。

1. 地域の民生委員等への社内報や各種資料の配布

概ね毎月1回、事業者の社内報と事業者で作成した介護や福祉についての基本的な知識や技術、全国の取組事例などに関する勉強資料を、新井地区及び新井南部地区を中心に、民生委員の皆さん及び地区の区長等の皆さん（オピニオン・リーダー）に戸別配布している（2005年頃から、各60名程度、合計100数十名に配布）。

配布先の皆さんには結構好評で、この活動を通じて介護や福祉、あるいは認知症の正しい理解に関心を持ってくださった方も多い。

2. 地域の民生委員等のボランティア参加

2006年頃からは、上記①の取り組みを通じて関心を持ってくださった民生委員等の方々の有志で、チームをつくりローテーションを組んで、月2回程度、1回当たり概ね2名程度で、ボランティアに来ていただけるようになった。この活動は、事業所の円滑なサービス提供やサービスの質の向上に貢献していただいているのみならず、ボランティア活動での実践経験が各地域で（しかも各地域のオピニオン・リーダーから）語られることを通じて、地域社会における介護や福祉への理解、あるいは認知症の正しい理解にも大きく貢献していると言えるだろう。

まず民生委員等地域のオピニオン・リーダーを対象にして上記1. のような取り組みを始めたことが、その後の活動の広がりや地域レベルでの気運の盛り上がりにつながったようにも思われる。

3. 地域の公民館や退職者の集会等での認知症や介護技術の講演等の実施

様々な形で地域との交流に取り組んでいると、地域の各種団体等（JAのボランティア組織、女性の会、退職者の会など）において、認知症や介護についての講演や、地域づくり、ボランティア、介護現場に学ぶ生き方など、より良い高齢社会を考えることに資する講演を行う機会が増えてきた。

また、地域の希望に対応して、事業所のスタッフが地域の人々に車椅子での走行体験を提供するなど、介護現場の状況や介護技術等を出前で講義する機会も増えてきている。介護保険制度の仕組みについて講座を開いて欲しいという要望も多く、適宜対応している。

今後は、引き続きこれらの活動を着実に進めて定着を図り、地域社会の認知症や介護への理解の底上げにつながることを目指している。

活動名称	利用者とスタッフとの協働による地域との交流
活動要旨	近くの知的障害者施設や学校、地域のお祭りに利用者が参加するなど、地域と連携し交流の場をつくる
応募者	グループホーム七福神 管理者 八木澤 時子
連絡先	〒944-0036 新潟県妙高市末広町 1124 番地

(概 要)

グループホーム七福神では、開設の準備段階から地域との連携を大切にしたいと思い、次のように、事業者と地域住民等との対話を重ねてきた。

<知的障害者施設「にしき園」との交流・ボランティア活動>

当施設の利用者が（徘徊の後）近くにある「にしき園」に迷い込んだことから、にしき園との交流が始まった。現在、同園の利用者がボランティアとして当施設の運営に参加してくださっている。

<小学校や中学校との交流>

利用者にとって子どもたちとの交流は活力の源となるように思われるし、子どもたちにとっても人生の先輩たちとの交流は得るものが大きいのではないかとと思われる。当施設のある地域（や近隣地域）には学校など文教・文化施設が多いという環境から、自然に小学校や中学校の音楽会や運動会に招待していただくようになった。

<地域の人々との交流>

他の多くの施設等と同様、当施設でも、地域のお祭り等に参加するとともに、当施設における交流会等へ地域の人々に参加していただいている。地域とのつながりを大切に考え、地域での開設前の説明会をなるべく丁寧に行ってきたので、地域との交流活動は比較的スムーズに始められた。最近では、当施設のある地域だけでなく、近隣他地域からも声がかかり各種イベントに参加している。

夏の間は、当施設内の広場は子どもたちの朝のラジオ体操の広場となっている。毎朝6時半に、地域の子どもたち、保護者、当施設の利用者、スタッフが揃って体操するのは気持ちがいいものだ。

当施設のある地域は比較的年齢構成の若い地域で、当施設の利用者も、ほとんどはこの地域で生まれ育った方々ではない。当施設が地域の活動に自然な形で溶け込んでいることで、当施設の利用を始めた人々が、地域住民の一人として地域の敬老会や介護予防教室に参加しやすくなっている。

<地域の防災組織からのサポートとスタッフの地域貢献>

当施設でも地域の一員として地域の防災組織に参加している。一方で、当施設では特に徘徊傾向のある利用者にはGPSをもっている（お守り袋に入れてお守りとして身に付けていただけるようになった）、徘徊で行方が分からなくなって困ったことはそんなにはないが、何かあった場合には地域の町内会組織が中心になって支援体制を組んでくださっている。

当施設のスタッフが地域の公園の清掃・修景活動に参加するほか、地域の人々を対象に認知症に関する勉強会のスタッフとして協力させていただいている。地域の人々の（本来誰にでも身近なものである）介護や認知症についての理解がますます深まっていくことを感じ、嬉しく思っている。

最近では、当施設の家庭菜園に地域の人々が野菜の苗を持ってこられ植え付けをしてくださったり、当施設で収穫した野菜をわずかではあるけれども心が伝わるように地域の人々におすそわけしたりというように、日常的で自然な交流が根づきつつある。

活動名称	離れて暮らす親のケアを考える会
活動要旨	親と離れて暮らす子世代の「遠距離介護」を、セミナー・会報・メール・ウェブサイト等を通じた情報交換などで支援する
応募者	NPO法人 パオッコ 理事長 太田 差恵子
連絡先	〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8 本郷春木町ビル 9 階インキュベーションハウス内

(概 要)

核家族化が一層進む中で、65歳以上の高齢者の子どもとの同居率は半数以下と低下しています。親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。親に心身の衰えが生じてきた場合、通いの介護を選択する親子は増加の一途をたどっています。

平成8年、離れて暮らす老親を気遣う子世代仲間が体験や悩みを共有する場として、任意団体離れて暮らす親のケアを考える会パオッコを設立しました。親の心身に衰えが生じて「同居」ではなく別居を続け、通いながら親の暮らしを応援する子世代。「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有する活動を行ってきました。現在の会員数はおよそ250人。首都圏を中心に全国に在住。会報で情報交換を行うと共に、遠距離介護セミナー、遠距離介護の実態調査・研究を実施、交通機関各社への「介護帰省割引」実施の要望書提出などの提言活動も行ってきました。

平成17年5月末日、NPO法人化。

<地域について>

私たちの活動のコンセプトは、「子世代応援団」。ケアや介護をする側の子世代が笑顔でいられない環境では、親世代に笑顔になってもらうことは不可能だとの考えからです。そこで、主な活動地域は東京圏、大阪圏などの都会。故郷を離れて家庭をもった子世代が多いからです。

けれども、離れて暮らす老親と子の問題は、いまや東京・大阪などの大都市圏だけのテーマではなくなっています。高齢少子化の影響もあり、親元には子がひとりも残らないことは一般的です。結婚した場合、夫婦両方の親と同居するケースはまれであり、そう考えると、少なくともどちらかの親とは別居。つまり、「遠距離介護」は誰にとってもかかわりの深い社会的問題であります。

セミナーの開催は大都市圏となりますが、会報やメール、ウェブサイトを通し、日本中、さらに結婚や転勤で海外在住の会員とも交流を続けています。

<今後の展望>

私たちの活動は認知症に特化したものではありません。

いうなれば、認知症でもだいじょうぶ。寝たきりでもだいじょうぶ・・・。

どんな状況になったとしても、抱え込まなければ「きっと何とかなる」という気持ちを子世代で共有したいと考えています。

それこそが、介護による虐待や自殺、うつ発症・・・、その他さまざまな悲劇を予防することにつながるものだと信じます。

継続して情報を発信していくことが大切です。

今後も、地道に活動をおこなっていきたいと考えています。

活動名称	認知症を学び地域で支え合う・なじみのふるさとづくり 一寄り添い人の養成、訪問、世代間交流のお誘い
活動要旨	地域の「ほっとサロン」(若い母親と幼子、中高年スタッフとの交流・遊びの場)に、 認知症の方を迎え入れ、世代間交流を支援
応募者	開成町社会福祉協議会 なじみのふるさとづくり研究会 喜多 祐荘、土井 高史
連絡先	〒258-0021 神奈川県開成町吉田島 1043-1 開成町福祉会館内

(概 要)

開成町における認知症の人との出会いは平成16年4月。私たちは、学生とともに本人の心の世界の科学的理解、本人・家族と地域各世代の交流・役割発揮、文化伝承を実践研究テーマに取り組んでいた。本人の娘さんからボランティアによる在宅訪問で本人・家族間の関係回復支援を依頼され、月1回ずつ会話・同行を始めた。本人は、もの忘れが目立ってから10年目の80歳男性、記憶年代50歳くらい、毎日が田んぼの見まわり、若い頃の活躍を思い起こし、近所の人々に元気にあいさつをする。まちなかへ出かけるときは、常に奥様が寄り添う。本人が苦手な長期記憶を治そうと、家族が電話台にメモ用紙を置くが、本人はその必要を感じず、双方ともにイライラが募る。

当初から私たちと学生は、「人生体験を教わりたい」との立場で「記憶再生・共感会話・同行感動記銘法」(記憶会話同行法)を用いて交流を積み重ねた。本人の楽しい語りと遊びを繰り返すうちに、私たちは3ヶ月めに顔と存在を記銘され、学生も6ヶ月めに記銘された。私たちは、奥様や娘さんと本人との会話の調整をし、楽しい語らいと遊びに参加を促すことにより、日常における会話法と限界(してはならない強制)について理解してもらい、また家族の悩みを受けとめた。家族とともに認知症寄り添いの研修をした(①疾病の人間理解、②記憶会話同行法、③寄り添い活動)。

1年後、家族の提案を踏まえ、町民の特定のグループとの継続的交流を次年度の課題に据えた。町の社協と円中自治会福祉部の役員に申し込み、取り組みの必要性を検討のうえ、福祉部主催の「ほっとサロン」(若い母親と幼子たちと中高年スタッフとの交流・遊び)に本人・奥様を迎えてくれることが決まった。平成17年11月から、ほぼ月1回参加し、若い親たちと語らい、楽しく遊び、幼児たちを可愛がり、ときには本人の幼な友だちの訪問を受け、「ほっとサロン」が地域への窓口となっている。本人にとって、家庭訪問と「ほっとサロン」が楽しみの時間になっている。若い母親や幼児にとって、老夫婦はこころ和む存在であり、ふれあいから知恵と元気をもらっている。世話役スタッフも、不安から確信へと本人のこころの世界の理解が変化している。

平成18年4月から当研究会へ社会福祉協議会・円中自治会等が加わり、円中地区在住の他の認知症の人と家族を対象に、家庭訪問・交流参加の呼びかけを検討し始めた。あわせて、寄り添い人(訪問と同行)の養成を検討し始めている。本人・家族の人たちを支える集い(認知症援助技術セミナー)に招待し、娘夫婦、社会福祉協議会、円中自治会の方々とともに学び、交わり、音楽と食事と風景をともに楽しんでもらった。参加者みなが本人を理解することができた。

19年度は、「家庭訪問」、「ほっとサロンへの参加・交流」、「在宅者新規訪問」、「寄り添い人の新規養成」、「全町域の調査・交流(情報交換)」の5つの柱に取り組むことを予定し、認知症の人・家族・住民の「なじみのふるさとづくり」を地区単位にすすめた。9月に町社会福祉協議会主催「認知症を学び地域で支え合おう講座」で30人余が集い学び、自治会の取り組みを始めた。

活動名称	長岡京の温もりの通い合う街づくりに向けて ～やすらぎ支援員のネットワークの役割～
活動要旨	「やすらぎ支援員」（認知症高齢者近隣住民・介護経験者・認知症支援に関心のある方）が認知症について学び、地域の高齢者等を訪問し、なじみの関係をつくる
応募者	長岡京市 やすらぎ支援員 澤田 泰子
連絡先	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺三反畑 8-1 グループホーム西山の郷

（概 要）

長岡京市では、認知症についての理解の輪を広げ、認知症の人と認知症を抱える人がともに安心して暮らせる温もりの通い合う街づくりの取り組みが住民パワーの力で動こうとしている。

「やすらぎ支援員」は、認知症高齢者の近くに住む人・介護経験者・認知症支援に関心のある人などを対象として、養成講座や実習の修了生に登録してもらい、コーディネーターによる調整を経て認知症高齢者などの居宅を訪問し、なじみの関係をつくりながら見守り活動や話し相手などを中心に活動を行う。その中で、悪徳商法や虐待などの課題が発生した場合など民生委員や行政機関になが柔軟なネットワークを創造していく。

＜今後について－18年度登録者交流会での意見交換から＞

「やすらぎ支援員」は、行政の地域支援事業としての立ち上げにより講座が開催され、平成18年度の登録者が35名、今年度も2期生が受講中である。以下の意見を「地域力」に活かしていく。

- ・従来は行政が全体の責任をもった上で住民もある程度関与していくという形式だったが、今後はもっと住民が「自分たちの暮らしは自分たちの支え合いから」という自主的な気運が高まった。
- ・認知症高齢者が一人暮らしを続けている背景は、本人が認知症を認めず同居を拒んだり、子どもが親の認知症を受け入れていなかったりさまざまである。
- ・住宅事情や共働きなどの事情で老親を引き取れない家庭も少なくない。たまにしか会わない子どもは親の認知症を受け入れられない傾向もあり、そういう高齢者には日常的な関わりは欠かせない。
- ・一人暮らしや認知症の支援を必要な人々の周辺に気を配り、ちょっとした変化も見逃さないような地域で見守りを支えていくしくみが「やすらぎ支援員」の活動である。
- ・地域の状況やニーズを社会福祉協議会（地域包括支援センター）と協働で把握していく。
- ・やすらぎ支援員登録者と利用登録者との相互調整をしてスケジュール表を作成する。このコーディネートは当面は社会福祉協議会と協働で行い徐々にシステム構築をする。
- ・役割や活動内育は定期会議の中でその都度確認し合い、新しく創造していける柔軟な組織とする。
- ・やすらぎ支援登録者たちは、現役施設従事者や有資格者、又は在宅で認知症介護の経験者たちでありリスクも充分認識している中で、それをどのように対応していくかも話し合われた。
- ・保険加入や具体的な組織化に向けて現在進行中である。
- ・それぞれのノウハウをもとに大勢の人たちと協働しながら、地域に根ざした取り組みをしていく。
- ・住民と行政のネットワークを活用し、この仕組みを地域の社会資源として活動に結びつけていく。
- ・地域にネットワークが存在し、虐待や悪徳商法など問題が発生したとき機能することが必要。
- ・日頃の人間関係によるなじみの繋がりの中で、本人の意向や希望を確認し、いつまでも地域で尊厳ある暮らしができるよう安心して安全な温もりの通い合う地域づくりを目指す。

活動名称	「積小為大」～小さな有限会社の足下から認知症の人の“力”を発信していこう～
活動要旨	認知症介護事業者が、「自分だったら何をしてほしいのだろう」という原点にもどって、介護を実践していく活動
応募者	有限会社 エーデルワイス 総施設長 青山 由美子
連絡先	〒090-0826 北海道北見市末広町350 番地 59

(概 要)

当施設が、開設したのは平成17年8月16日と、現在2年を経過したところです。開設前には「認知症の人は十分理解している」と、思っていましたが開設と同時に打ち砕かれていく自分がありました。長い介護経験が仇になることが多く、介護経験のない未経験介護者の方がすんなりと認知症の人とふれ合うことができることも経験から判明しました。

この思いこみの経験を打破するために経営者自身が、原点の「自分だったら何をしてほしいのだろう」との、基本的な考えからの対応が始まりました。

職員とのカンファレンスを重ねる毎に認知症の人が求めているものや、1曲の懐かしい歌からの発言は“その人の宝”となり、その情報は職員の気づきにつながりました。

認知症の人の対応は、特別なことではなく、介護者自身が行ってほしいことを心の基準とし、介護する人がわからない時は素直に尋ねること等、ごく当たり前のことから始めると穏やかに違和感なく暮らすことができると職員共々理解ができたのでした。

この理解が始まると、認知症の人が何を求めているのか“五感を駆使する”介護が必要であること、認知症の人は楽しいことが好きなこと、私達が青年時代に聞いた歌がテレビ等で流れると非常に懐かしく、その当時の思い出に入ることから、認知症の人の時代背景に沿ったものを導入すると、発語のなかった人が思わぬ家族も忘れていた記憶を再現することなど、新たな力をたくさんいただいたのです。

そのような経験から、いつも決まった時間に“笑いの体操や歌の時間、二宮金次郎物語（小田原教育委員会発行）等”の「動」の時間を提供し、認知症の人自身がその都度決めて参加や自室での過ごし方を選んだりしています。

毎朝提供時は、なぜこの体操をするのか、「二宮金次郎さんって知ってますか」等、導入前の短い言葉を添えて記憶の呼び水を行い認知症の人が自ら選択をして参加することが“本人のやる気”を引き起こし、意欲につながることが理解できたからです。

このような、自らの認知症介護に対する反省を地域の人や家族の人へと伝えることが企業を起こした使命だとも感じています。

認知症の人の“力”や認知症という病気によって引き裂かれた家族の絆を、もう一度再構築できるのが「認知症介護」の現場であると実感し、介護現場の人に伝える動機にもなったことでもあるのです。

今後も北のはずれの小さな地域からの発信ではありますが、認知症の人が苦しむことのないように、有限会社からでも実施できる地域発信を継続していき、国民の皆様の大事な保険料を使用させていただいているという原点を忘れず、幸せをお届けしたいと思います。

活動名称	「成年後見推進ネットこれから」の活動
活動要旨	高齢化社会が進んでいく今、早期の段階に、自分たちが希望する老後を迎える準備として、認知症や成年後見制度の正しい知識の普及等を進める
応募者	NPO法人 成年後見推進ネットこれから 代表 小泉 晴子
連絡先	〒178-0063 東京都練馬区錦 1-22-12

(概 要)

私たちは東京都練馬区で平成4年から認知症の家族会の活動を継続してきました。

「成年後見推進ネットこれから」は、今まで家族会でやってきた介護よりもうすこし踏み込んだ支援をしていきたいと思って立ち上げました。成年後見制度はなかなか利用が進んでいません。利用が進むために色々な活動をしていきたいと思っています。例えば成年後見制度について理解していただくとか、手続きがよく分からないというような方にも、手続きの支援をしていくとかということがあります。それから早い時期に利用していただく、そういうようなことを広めて行きたいと考えております。認知症そのものも早期発見、早期治療が大事なのですが、成年後見についても後見という最後の段階からではなく補助の段階からもっと関われば、もっと利用が楽ではないかと考えています。私たちを含めて団塊世代の皆さんに10年後、20年後を考えていまから準備しましょうと声をかけていきたいと思います。

NPO法人成年後見推進ネットこれからの設立総会は平成18年の12月3日に行われました。そして、発足を記念した講演会には平成19年4月27日に152人の参加者が熱心に耳を傾けました。

成年後見推進ネットこれからの活動としては、まず、学ぶことです。成年後見制度を学んで、「自分のこれから」と「身近な人のこれから」を考えるために成年後見制度後見コーディネーター養成講座（定員15名）を6月から9月にかけて7回連続で行いました。

そのほかの活動として、会員の集いを行い、10月には後見をする立場で自立支援法への理解を進めるために練馬福祉園の施設見学も行いました。また、講演会も引き続き行っています。

また、希望する生活を自分で選ぶための「これからノート」も制作しました。

「これからノート」は、自分自身の「これから」を自分で設計するための整理ノートです。現在、私たちは長い高齢期を過ごすようになりました。私たちには高齢になっても自分が希望する生活を自分で選ぶ権利があります。それを支援するのが成年後見制度です。成年後見制度を上手に利用するために、自分が生活してきた歴史やスタイルを情報として整理し、自分の望む高齢期の暮らしを自分で設計していく必要があります。何もかも「お願いします」で任せるのではなく、準備しておくことが大切です。また、「これからノート」は、認知症や障害を抱えて判断力が低下した人の「これから」を支えるためのノートでもあります。判断力が低下した人を支援する場合も、その人についての情報とその人の意思は大切です。周りで思っていることが本人の意思と違ってはいよい支援は望めません。本人だけで記入することが難しいときは、介護者と一緒に記入できます。「これからノート」は、私たち自身の「自分で決める高齢期」のためのものです。

今後もさらに自分の望む高齢期を自分で設計するために、教育活動、支援・相談活動、地域ネットワークの構築を進めていきます。

活動名称	まちのなかのきらくえんー認知症の人の「市民的自由」の尊重
活動要旨	ノーマライゼーションを基本理念に掲げ、特別養護老人ホームを中心に、どんなに重い障害をもっている市民として地域に暮らす生活を保障するサービスを提供
応募者	社会福祉法人 きらくえん 理事長 市川禮子
連絡先	〒661-0982 兵庫県尼崎市食満2-22-1

(概 要)

当法人は、現在兵庫県下に特別養護老人ホームを中心に、ケアハウス、グループホーム、デイサービス、ショートステイのほか、多岐にわたる在宅福祉サービスを併設した総合的な高齢者福祉施設4苑と法外の生活支援型グループハウスを運営しています。平成18年度には改正介護保険制度のもと地域包括支援センター3ヵ所と小規模多機能型居宅介護施設2ヵ所を開設し、すべての在宅福祉サービスにおいて介護予防事業を行っています。どんなに重い障害をもっている市民として、また地域に暮らす一人の住民としての生活を保障したいと思い、「人権を守る」「民主的運営」と方針を整理しています。私たちの「まち・地域」にかかわる活動を紹介します。

●いくの喜楽苑ー平成4年に朝来郡（現在は朝来市）生野町で開設。ここでは、個室化により入居者の自立への意欲が高まり、認知症の人たちが穏やかに過ごされるようになることを学びました。認知症の方の歌う歌がかつて生野銀山が栄えていた頃の盆踊りの歌だと職員が気づき、現在は、いくの喜楽苑で8月の一夜、600人余の町民の方々とともに賑やかに盆踊り大会が開かれています。

●あしや喜楽苑ー平成9年、芦屋市に開設。福祉は文化である、という質の高い福祉実践に加え、入居者に質の高い文化を享受していただき、特養が地域の文化の拠点になることを目指しました。広い地域交流スペースにて講演会、クラシックやジャズコンサートなどを頻繁に実施。ギャラリーには入居者はもとより地域住民の方々も来られ、昨年1年間で延べ1万5千人以上が来場。営業許可をとった喫茶店には、入居者はもとより地域の住民の方で賑わっています。現在、この地域交流スペースをさまざまに利用される方々の総数は1ヶ月に延べ4千人を超えるまでになりました。

●阪神淡路大震災から3年余を経た平成10年4月、ようやく新設された2万5千戸の復興公営住宅に、仮設住宅で仮住まいをしていた人たちが順次入居されました。復興公営に入居する人たちは高齢者が多く、生活支援や介護を必要とする人たちが大勢いました。独居の比率も異常に高く、行政も何らかの手だてをとらざるを得ず、シルバーハウジングを約4千戸とコレクティブハウジングを260戸組みこむこととあわせて、それらの住宅にLSA（Life Support Adviser 生活支援員）を配置することになりました。当法人も芦屋市と尼崎市で380戸のシルバーハウジングと30戸のコレクティブハウジングへのLSA派遣事業を行うことになりました。その中で唯一芦屋市が昼間だけでなく、24時間カバーするLSAの派遣事業を決め、南芦屋浜復興公営住宅814戸の高齢者自立支援事業と230戸のシルバーハウジングへのLSA派遣事業を私たちの法人に委託しました。以来9年間、当法人は団地内にLSA11名を配置し、1日平均80軒の訪問活動と24時間体制で緊急通報に対応してきました。被災地の復興団地（総戸数4万8千戸）で唯一9年間孤独死ゼロを達成しています。今後ますます高齢化し独居世帯が増えるわが国において、在宅福祉サービスだけでは救えないサービスの空白時間を埋める「すき間のケア」として重要だと思えます。歴史の歯車を後ろに回すのではなく、たとえわずかであっても半歩でも一歩でも前に回す役割を果たしたい、時代がかわろうとも誠実を胸に刻んでひたすらに歩み続けていきたいと思っています。

活動名称	地域人として生きる ー誰もがができることを通してつながるー
活動要旨	長年培った介護福祉士としての経験を生かし、認知症の方ご本人・家族・ボランティア等と共有しながら、介護保険適用の通所介護サービス等を運営する
応募者	NPO法人 志ネット・石川 常光 利恵
連絡先	〒924-0072 石川県白山市千代野西 2-5-3

(概 要)

私たちは老いる。生活上のさまざまな不自由を少しずつ増やしつつ年を重ねる。種々の社会保障の仕組みの中で支えられながらも、長命を純粋に喜ばず、人生の最後まで輝いて生きるということの困難さを不安とともに想像する。誰もが未体験の年を重ねる世界には、認知症という不安要素が大きな位置を占めている。

「認知症の人が生きやすい場所をつくる」。しかも、今まで暮らしていた身近な所につくりたいと、平成9年秋、任意団体として「菜の花のおうち」を開設。福祉分野で介護福祉士として働いてきて20年近い私たちは、認知症はケアによって多くの不自由や混乱が緩和されると実感。しかし、在宅で望む暮らしを継続していくとき、身近な人々の理解を基盤とした共助の仕組みは欠かせない。

私たちは、在宅福祉の充実に住民の役割が不可欠だと思う地域の人々とともに、自発的な供給組織を作りたいと、平成16年春、『NPO法人 志ネット・石川』を設立。認知症ケア専門士として学んだことを、本人、家族、ボランティアの方々と共有しながら、平成18年には介護保険の通所保険の通所介護サービス・介護予防通所サービス事業を実施し、今日に至っている。

<活動の成果と今後の展望>

◇認知症の人が映画を見てわかるの？

- ・「ばあちゃん、映画に行けていいな」と孫にうらやましがられます。
- ・文四郎とおふくの恋のせつなさに、涙が流れます。
- ・「こんな時代を生きてきた」三丁目の夕日に懐かしさがこみあげます。

◇認知症の人がものづくりできるの？

- ・昔から縄を緋い、俵を編みましたから、布草履づくりは得意です。
- ・義妹にパッチワークのバッグをプレゼントできたのは喜びです。
- ・腕っぷしバンドが女性のつどいの景品に使われたのは誇りです。

◇認知症の人が新聞読んだり、漢字クイズをしたりできるの？

- ・わからない言葉や漢字は辞書を引くという楽しみがあります。
- ・政治家の不正や官僚の不誠実に、しっかり怒りがこみあげてきます。
- ・同年代の投稿には励まされたり、同感したりで、今を生きています。

◇職員とボランティアは、確かなサポートがあれば

できることの多さを知ります。

わかることの深さに感動します。

◇医療の進歩を着実にひきよせられる連繋を求めながら、年を重ねることを学びあい、健やかな老いを拓きます。

活動名称	グループホーム入所者による公園清掃活動
活動要旨	近くの公園の清掃活動や定期的な外出や買い物を通して、グループホーム入所者の地域社会への協働やふれあいをめざす
応募者	社会福祉法人 浴風会 グループホームひまわり
連絡先	〒168-8510 東京都杉並区高井戸西 1-12-1

(概 要)

社会福祉法人浴風会では、「利用者本位のサービス実践」「専門性の活かせる職場作り」とともに「地域社会への協働と貢献」を目標に掲げています。また、当グループホームでは「日常的に町に出て、地域の人々や自然とふれあいながらの暮らしを支援」し、「家族や地域の人々の声を大切に、開かれたグループホーム」をめざしています。

このため、日頃からグループホーム所在地である東京都杉並区の皆さんとできるだけ多くの交流を持つことを心がけてきました。とくに、利用者の皆さんが外出する機会を増やすことにこだわってきました。

これまで、外出支援の活動として計画を立てて東京都庁や深大寺などに遠出をするようにしています。その際には一斉に大人数で出かけるのではなく、気のあった人同士や車椅子の人同士などの2～3人で誰でも年に1回は心置きなく出かけられるようにしています。

また、月に1回は長めに歩いたりちょっと交通機関を利用するようなところに外出しています。たとえば、食費をやりくりして隣の駅近くにあるみなさんのお気に入りのハンバーグ屋さんまで出かけます。職員からお店のスタッフの方にあらかじめ説明をしていますので、お店の人たちはトイレに近くてゆっくりできる場所を「指定席」として確保してくださいます。また、近所ではとても有名な阿佐ヶ谷の七夕祭りに出かけたりもします。

買出しは月に二回、まとめて行くことにしています。利用者の方で付き合っていただける方には一緒に行っていただきます。そして天気さえよければ、毎日でも緑の多い浴風会の構内や、近くの神田川沿いを散歩します。

これらの活動は、身体能力を維持しまたそれを計るためにも重要だと思っています。

最近では、地域の皆さんに喜んでいただけるようなことはないだろうか、身近でできることはないだろうかと考えて、近くの区立公園のゴミを拾う活動を始めました。近所の公園にはペットボトルやカップめんなどのゴミが多くて気になっていたからです。

大きなビニール袋を用意して、手で拾えるゴミを集めます。20分くらいの間にビニール袋が1つでは足りなくなります。

利用者の皆さんは「まったく、こんなところに捨ててマナーが悪い」と憤慨しながら、それでもはっきりと表情が豊かになります。

始めてからまだ4回目ですが、これからはできるだけ定期的に行っていきたいと思います。「地域の中で、地域とともに」生活することは人として当然のことです。ささやかな活動の第1歩ですが、地域の中で役割を果たすことは非常に大事なことでと考えています。

活動名称	高齢者が安心してご利用いただける店舗を目指して
活動要旨	認知症サポーター養成講座を展開し、全国の全店舗に認知症サポーターを最低1名配置。顧客満足向上に努めていく
応募者	三菱UFJ信託銀行 株式会社 経営企画部CSR室 三輪
連絡先	T100-8212 東京都千代田区丸の内1-4-5

(概 要)

三菱UFJ信託銀行は、厚生労働省が進める「認知症サポーター100万人キャラバン」の趣旨に賛同し、大手金融機関としては初めて、高齢化を背景とした社会問題に社員一人ひとりが取り組む「認知症サポーター」養成講座を全店舗で展開し、「認知症サポーター」の養成に取り組んでいます。

○「認知症サポーター」養成講座に取り組んだ経緯

昨今、「CSR（企業の社会的責任）」という言葉を目にする機会が増えていますが、三菱UFJ信託銀行でもCSRを経営戦略の大きな柱のひとつと位置付け、本業や本業以外の社会貢献活動を通じて、社会的責任を果たしていくことを宣言しております。

三菱UFJ信託銀行では、CSRの取り組みテーマのひとつに、日本社会における少子高齢化問題を掲げており、“世代間の「想い」をつなぐ活動”を全社的に進めていこうと考えております。その一環として、金融機関としては初めて、「認知症サポーター」養成に取り組むことと致しました。

高齢のお客さまとのお取引が多い三菱UFJ信託銀行にとって、高齢化を背景とした社会問題に社員ひとり一人が取り組むことは、社会に貢献しつつ、また、お客さまへのサービスの向上につながると考えたからです。

○養成講座の開催について

第1回の養成講座を平成18年11月に本店ビルで開催し、本店をはじめ首都圏近隣の社員のうち希望者273名の社員が出席しサポーターとなりました。受講した社員のほとんどがたいへん有意義であったとの反応でした。

実際に家族に認知症の方を抱えている社員もあり、講義終了後の質疑応答も活発に行われました。

平成18年12月には、全店舗から各1名ずつ出席した社内の研修会においても、養成講座を開催しました。これにより全国77店舗の全てに認知症サポーターを配置致しました。

平成19年1月以降は各店舗で養成講座を開催し、日頃お客さまと接する機会の多い店頭の社員を中心にサポーターとなり、その輪を広げ、現在では全国で約2,300人の社員、派遣社員、嘱託がサポーターとして活躍しております。

活動名称	認知症の人を支える地域医療の経験と課題～在宅支援診療所から～
活動要旨	クリニック・宅老所・通所リハ・グループホームなどを運営しながら、パーソン・センタード・ケアを理念とした在宅介護を支援する多職種ネットワークをつくる
応募者	医療法人社団つくし会 新田クリニック 院長 新田 國夫
連絡先	〒185-0005 東京都国立市西 2-26-29

(概 要)

私は平成2年にクリニックを開業して以来、東京都国立市で定期的に訪問診療を行っています。現在も外来診療を行いながら、ほぼ毎日、訪問診療に出ています。また、緊急時の往診にも対応します。約50名の在宅の要介護者・療養者を24時間体制で診ています。これまでに800人を越える高齢者の方の最期を在宅で看取りました。現在、在宅の方で認知症のある方は22～23人、外来の方で認知症の方と疑いのある方をあわせると200人くらいになります。

地域の高齢者医療にあたりながら認知症高齢者などのための宅老所の運営を始めたのは、介護保険制度のスタート以前の平成9年でした。朝、集まって、みんなで食事の用意を始めるような生活の場ができると、認知症の高齢者が投薬せずとも問題行動がなくなっていくます。私は外科医ですがそれを見て、認知症高齢者への認識が深まりました。

私自身も認知症について十分な知識を持ち合わせていませんでしたので、在宅介護に携わるメンバーと研究会を作っています。市民向けの啓発活動のための講演会も開いています。

また、平成10年に通所リハビリテーション「ふれあい倶楽部」を始めました。ここに高齢者を毎日連れてきてもらうようにしますと、外に出て人々と交流するようになった方は気力が戻り、状態が改善されるのです。しかし、重度認知症の高齢者もいますから、通所ケアにも限界があります。そこで、平成17年にグループホームと介護付き有料老人ホームを作りました。

初期においては、在宅生活が圧倒的に多く、ほとんどは地域のかかりつけ医が主治医です。そのため、かかりつけ医の認知症に関する周知と地域支援体制が必要となってきます。

BPSDの介護者の対応については、パーソン・センタード・ケアの概念を明確にすることで、逆説的に介護者の対応の改善を促すことです。例えばできることをさせない、本人の気持ちを見無視するなど、日常あり得るさまざまなことを悪意と思わないでしていることです。その結果としてBPSDが発症します。軽度であれば環境要因を整えることで対応は可能であり、医療要素を持った観察が可能なデイケアあるいはショートステイの利用により家族負担を軽減できます。

後期になると在宅ケアはさまざまな困難を伴います。私自身、介護保険開始以前に宅老所を立ち上げたのはBPSD、高度の認知症患者における在宅ケアの限界を感じたからであり、宅老所の利用によりほとんどの薬物治療から離脱できたことを経験しています。さらにグループホームを立ち上げたのは、デイケアのみの利用では介護の限界があることが理解できたからです。できる限り在宅に近い状況のグループホームは、認知症患者にとり自宅より快適な場所となり、多くの周辺症状を消失させることができました。

多職種の連携は現場にかかわりのある人からの情報が重要です。介護事業者などの責任者から認知症患者の在宅ケアと地域連携は正確な情報が伝わることは少ないのです。さまざまな利用者、さまざまな多職種との頻回の担当者会議がお互いの理解につながります。

活動名称	毎日の生活を地域のなかで 地域の輪そしてひろがり…
活動要旨	短大からの実習生の受け入れ、近隣中学校との交流、大学への講師派遣等など、地域の人たちと一緒に「支え、支えられる」グループホームを目指した活動
応募者	株式会社 ひまわりの会 ぼれぼれグループ 藤原 一恵
連絡先	〒631-0004 奈良県奈良市登美ヶ丘 2-2-15

(概 要)

奈良市は奈良県の北東部に位置し、京都、大阪まで30分というアクセスの良いベッドタウンとして古い町並みと新しい住宅地の交じり合った落ち着いた街です。古都奈良の文化財、東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招提寺等、この町全体の歴史や文化が評価され世界遺産として登録されています。奈良時代の様子を伝える貴重な証拠であり、日本人の信仰と密接な関係があり、年中行事などを通じて市民の暮らしの中に生きています。生活そのものが歴史を感じさせ、また奈良公園の近隣では、大通りを鹿が歩いています。鹿が通り過ぎるのを待ち、車が行き来するといったゆっくりと時間が流れる町でもあります。

その奈良市にぼれぼれグループの3つの事業所があります。ぼれぼれグループは4つの理念を柱に運営されています。

～ゆっくり、楽しく、一緒に～ で表現され、高齢者を人生の大先輩として敬い、常に謙虚に介護をさせていただくという気持ちを忘れてはなりません。

1. 質の高いサービスの提供

介護の道に近道はありません。高齢者の「生活を支える」ことを使命として「長生きしてよかった」「あなたとめぐり合えてよかった」と満足と信頼していただけるよう努めなければなりません。

2. 王道をいく

質の高いサービスの提供を、遵法の精神と社会的ルールに則ってひたむきに追求していくことが地域、社会に貢献することにつながります。またそこで働く職員自身にも自らの誇りと自己実現が可能な組織づくりにもつながります。

3. 「考える」「学びあう」「実践する」組織

一人ひとりが常に向上心を持って、自己啓発に努めます。現場に学び、失敗で学び、帰納と演繹の考え方で広く知恵を共有し実践し評価する組織でなければなりません。「楽しく学びあい」「夢があつて思いやりのある職場」をめざします。

4. 地域に開かれた組織

四通八達に地域社会と交流し地元から好感と信頼をいただける組織でなければいけません。たとえば「地域の掃除をする」「地域の住民と仲良くする」「地域が繁栄することをして貢献する」「介護の相談に応じる」「介護情報の提供」「職場の提供」等々を通じて地域に開かれた組織をめざします。

地域の人たちと一緒に「支え 支えられる」事業所をめざし、少しずつ地域に根を下ろしていつています。

奈良市にある3つの事業所のうち2箇所にグループホームがあります。ぼれぼれ奈良公園とぼれぼれ登美ヶ丘です。

活動名称	一粒の麦（傾聴ボランティアにおける愛の見守り）
活動要旨	認知症高齢者宅を訪問し、家族に代わって見守りや話し相手（傾聴）を行う。介護に苦しむ家族の慰労の為に行政がシルバー人材センターに委託した事業の一環
応募者	草加市認知症高齢者家族やすらぎ支援事業 やすらぎ支援員 矢菅 健司
連絡先	〒340-0021 埼玉県草加市手代町 1009-1 社会福祉活動センター内

（概 要）

草加市は人口238,717人（平成19年4月1日現在）の風光明媚な、俳句と煎餅の町です。旧日光街道には芭蕉の銅像や正岡子規の句碑が建立され、松の並木道がロマンを呼びます。65歳以上の人は38,683人で、人口の16.20%を占めています。シルバーカーを押して路傍に佇むお婆さん、他所の屋敷に迷い込み、追い駆けて来たお嫁さんに激怒され、引かれて行くおじいさん。夕闇の空を警察のスピーカーの音が流れ、徘徊老人の行方を尋ねるもの悲しさ。何処の町にもあるようにロマンの町にも悲哀の影が…。認知症高齢者を介護する家族の痛々しい心情が伝わって来ます。

草加市では行政が民間の機関に委託して、介護に苦しむ家族の負担軽減の為に、草加市認知症高齢者家族やすらぎ支援事業を立ち上げました。認知症高齢者家族とは認知症高齢者とその家族の事で両者を指します。家族に代わり見守りや話し相手を行います。平成17年10月1日に創設されました。やすらぎ支援員とは、認知症その他に関する講習を所定時間受け、市長よりその修了書の交付を受けて市に登録された者です。高齢者の境遇に同情するのではなく、傾聴を受けられる高齢者に「共感」する態度で接することが支援員にとって重要とされています。

平成19年の4月から8月までの介護認定調査で認知症状が全く見られなかった人は793人（32%）とされていますが、これから認知症の症状が出てくる可能性のある人も皆無とは云えないでしょう。支援事業の対象となる方々は更に増えることが予想されます。

当該支援事業を行政から委託されたのが「社団法人 草加市シルバー人材センター」です。現在、会員数が約2,000人で、百十数の活動グループを有し、やすらぎ支援グループもその中の一つです。やすらぎ支援員は27名おり、70名の認知症高齢者を訪問して話し相手になり見守っています。この人たちの活動を傾聴ボランティアと呼びます。支援員はそれぞれ奉仕の精神を持って利用者宅を訪れ、認知症高齢者の語らいに耳を傾けます。支援員にとって訪問先の主は「人生の師」となります。ご家族へのやすらぎが生まれる一瞬です。

このような支援活動に対し、市からは一人当たり1時間に付き750円の活動費が支給されます。利用者さんは週に二回、一回に付き2時間までの傾聴での支援が受けられます。料金無料。シルバー人材センターには行政と支援員とを取り持つコーディネーターと担当者がおり、高齢者家庭や各機関との縦横の固い連携プレーが利用者さんを守っています。支援活動は、支援事業の発足当時に神奈川県横須賀市のやすらぎ支援員さん達を訪問しての交流から始まりました。支援活動の先輩となられた方々との間に質疑応答がなされました。自信のない私たちに勇気と希望が与えられました。

草加市やすらぎ支援員は独自の路線を探索し、高齢者家族と市から感謝されています。認知症高齢者についての演劇も行い、大勢の人々に認知症について知っていただきました。

活動名称	地域と施設で暮らす交流の場
活動要旨	特別養護老人ホームに隣接した場所で喫茶店を経営。利用者がミニ逆デイとして気軽に立ち寄り、地域利用者やホームに訪問された方との交流の場をつくる
応募者	憩いの場「優しい時間」 中田 伸子
連絡先	〒121-0061 東京都足立区花畑 4-39-25

(概 要)

憩いの場「優しい時間」に隣接特別養護老人ホーム足立新生苑の「ミニ逆デイ」の利用と地域のお年寄りとの談笑の場。

開店のきっかけは煙草と総菜を販売していたが、時代の流れで総菜を止め、今迄使用していた厨房をリフォームするに当たり、店の隣りが「特養」なので介護士として勤務していた関係上「デイサービス」ではなく「逆デイサービス」を提供したいという気持ちになり、車イス使用出来るバリアフリーに店内を改装しました。NPO法人でなく夫婦（夫71才、妻64才の夫婦）で出来る範囲での営業。

（平成17年11月22日 開店）

そして「逆デイサービス」だけでなく地域の住民（特にお年寄り）との係わりも重視したく朝10：30～営業（お散歩の帰りに立ち寄れる場として提供）その為年令が60代～90代までと幅広く年令関係なくお互い楽しく優しい時間を共有されています。

老人ホームの利用者やヘルパーさん、同行の在宅介護の方々も多く来店され、開店してから二年ですが近くに喫茶店が少ない為、大変好評を頂けています。又、最近では地域包括支援センターの方に来て頂き、介護保険の話を地域の方々と一緒に聞くという事もありました。

●メニュー例

コーヒー ¥150

おしるこ ¥250

くずゆ ¥250

ゆず湯 ¥150

食事 ¥525 等

●営業時間

朝10：30～5：00

定休日（日曜日）

活動名称	グループホームと商店街の交流からはじまった 「認知症でもだいじょうぶ」の町づくり
活動要旨	グループホーム入居者が地域のなじみの商店街にでかけることによって地域に溶け込み、道に迷った時など支援をしてもらう
応募者	グループホーム えがおの家 千田 富子
連絡先	〒190-0021 東京都立川市羽衣町 1-7-10

(概 要)

<はじめに>

グループホームえがおの家は平成14年4月に開設。「ボケても幸せに暮らせるまちづくり」に役に立てるような取り組みをしようと話し合ってきた。認知症の学習会や「ホームスイートホーム」の自主上映会の開催、開設1周年にも認知症になってより才能を発揮した小菅マサ子さんを主人公にした「折り梅」を自主上映するなど、地域のみなさんと一緒に認知症について学習した。見学者や実習生は原則的に断らず、認知症やグループホームについての講師要請にも可能な限り応じた。

<入居者のみなさんと商店とのお付き合い>

認知症でも普通に暮らせることを地域の人々に発信した第一功労者は、グループホームの入居者さん自身であった。毎日の食料品はできるだけ地域の商店街で買っているが、一番安くておいしいお店を知っているのは、昔から近所に住んでいた入所者さんだった。グループホームのある羽衣町の商店街では2ヶ月に一度、買い物時に交付するシールを貯めた抽選会を開催する。入居者はその常連で、一等賞を2回も当てた。買い物の行き帰りの、入居者のみなさんと一緒だと誰もがやさしく声を掛けてくださる。職員の知らない間に散歩に出かけて道に迷った人を助けてくれたのも商店の方々が多かった。いなくなったのを30分以内に気づけば職員が見つけれられるが、それ以上になると探すのにも途方にくれてしまう。迷い人は、暗くなっても電気で明るいお店に助けを求めることが多く、お店の人が気づいて声をかけてくださるケースも多いことを、経験を通して学んだ。

<運営推進会議のみなさんが応援団>

グループホームは平成18年4月から地域密着型サービスとなり、運営推進会議を開催することが義務付けられたが、商店街の方々を中心に快く引き受けてくださった。「こどももおとしよりも安心して暮らせるまちづくりを」と近くの小学校の校長先生にも参加をお願いした。子ども達が実習に見え、お返しに展覧会などにご招待された。老人会代表の会長さんは、開設5周年記念の上映会「そうかもしれない」を町内会に図り半額自治会負担としてみなさんで鑑賞して下さった。

運営推進会議主催で平成18年11月「認知症サポーター養成講座」を開催した。これは立川市では初めて「行政にこれから立川市はどうするのか話してもらおう」と市と共催となった。定員70名を超える104名の参加があり、今年、他の地域でも養成講座が開催するなど広がり、民生委員などで構成する「見守り隊」でも養成講座を開催するなど、少しずつ全市に広がっている。

地域の迷い人の現状について警察とも話し、迷い人SOSネットワークについて検討を開始。

<これから本格的な「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりを>

今後とも地域の方々とりわけ商店街の方と協力して「認知症でもだいじょうぶ」であることの理解を深め、そして「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりを進めていきたいと思っている。

活動名称	グループホーム いろいろの取り組み
活動要旨	毎日恒例となっている「近所への買い物」からはじまった地域とのつながり
応募者	(有) KYT グループホームいろいろ 尾原 一美
連絡先	〒653-0043 兵庫県神戸市長田区御屋敷通 6-2-26

(概 要)

兵庫県神戸市長田区にあるグループホームいろいろは、平成15年10月に開設し今年で4年が経ちました。開設当初は「穏やかに・ゆったりと」を理念にし受身の入居者の姿が見られていました。一年半が過ぎた頃、「自分のことは自分で。主体性を持って」という支援に修正し、理念も変わりました。

スタッフはそれぞれの入居者のできる事・できない事をしっかり見極め足りないところだけを補って、その人の持っている力を引き出すことに力を注ぎました。入居者が主体的な生活が送れるようにスタッフは黒子の支援に徹しています。その次のステップとして、「互いに助け合って人として生きる姿」を目指し、まずは取り組みとして入居者全員で、徒歩15分のスーパーへ買い物に出かける毎日が始まります。すると、今までは入居者とスタッフだけの関わりしか見られなかったのが、みんなで一緒に買い物に出掛けることで他の人の車椅子を押してあげたり、歩く速度の遅い人を気遣って休み休み歩いてくれたり、重い荷物を分け合って持ってくれたり…と入居者同士が互いに助け合う姿があちこちで見られるようになっていきました。

それと共に地域の行事にも積極的に参加するようになりました。小・中学校のトライアルウィークの児童の受け入れをした数日後に、その児童が学校の音楽会の案内状を届けてくれて、入居者全員で鑑賞に出向いたのがきっかけとなり、その年からは年中行事となりました。

認知症があっても、地域社会とつながりを持ち地域の一員として生活できるようにという当たり前の日常を送っています。

<活動の成果と今後の展望>

買い物も行き始めた頃は慣れないため、でかけるまでに時間がかかっていたましたが、毎日毎日繰り返すことで買い物の習慣ができ、時間になると自然と買い物の準備をした入居者さんがリビングにあつまってくるようになりました。

それぞれのお年寄りのできること、できないことを見極め、字の書ける人には買い物メモを書いてもらい、買い物メモを見ながら品定めをしてもらう、会計ができる人には財布をまかせレジで支払ってもらう。できることが増えていくと助け合って買い物袋をもってあげたり、お互いに声をかけあう姿が頻繁に見られるようになりました。

地域にどんどん出て行くようになると、声をかけてくれる近所の人も増え、家でたまったスーパーの袋をごみ袋にどうぞと差し入れしてくれる人があったり、ボランティアで手芸を教えに訪問してくれたり、自治会の行事に誘ってくださることもあります。「地域社会とのつながりをもち地域の一員として生活できるように」といういろいろの理念にあるようにこれからも地域の一員として社会に出て行く、人として自然な姿を支援し続けていきたいと感じています。

活動名称	認知症ケアのネットワークづくり（佐倉市西南部編）
活動要旨	高齢者リハビリ研究会、認知症勉強会、専門職対象の電話相談等の活動を経て、現在はデイサービス従事者や介護専門職が合同で認知症の勉強会を行うことによって認知症を支える専門職のネットワークを構築、認知症のケア体制をつくる
応募者	認知症ケアネットワークCB 事務局長 藤本 美紀
連絡先	〒276-0045 千葉県八千代市大和田 238-17 脇本方

（概 要）

わたしたちは、千葉県の北部、八千代市と佐倉市、千葉市、印西市が接する地域で活動しています。もともとは平成9年に有志にて高齢者リハビリ研究会として発足し、平成11年からは認知症に関連する勉強会を開催。この頃は都内や他県の関係者を招いたり、異分野の技術者の方との勉強会でした。その後、平成16年からは専門職対象の電話相談などを開始、平成17年、研究会の千葉県居住者と賛同者にて地域に特化したネットワークに改組を行い、「認知症ケアネットワークCB」として、活動して参りました。今回は、佐倉市での活動を中心に報告します。

当会のメンバーが平成16年6月に在宅のケアマネージャーで赴任した地域で、①認知症の方の利用しやすいサービスが少ない、②関係職種から認知症に関する問い合わせや相談が多い、という提起がありました。そのつど当会で散発的に対応しましたが、当会の委員のボランティア活動だけでは限界があり、地域の専門職と一緒に認知症のケア体制をつくろう、という機運になりました。

当会の関係した専門職から認知症の勉強会をしようという声が上がリ、合同の取り組みをすることになりました。これがきっかけとなり平成17年12月から合同の勉強会を行いました。

～取り組みについて～

- 平成16年度：認知症に関連する職種への電話相談、サービス事業所などの紹介や同行訪問
⇒課題：当該地域での認知症支援体制を補強する必要性がうかびあがる
- 平成17年度：相談内容からあがった問題点への取り組み
協力医療機関の体制づくり、専門職合同の勉強会づくり
⇒成果：医療機関を中心として、地域の支援チーム形成へ進む
課題：若年認知症の方への支援の必要性、本人と家族それぞれに対しての支援の必要性
- 平成18年度：協力機関での活動の幅を広げる
啓発活動はサポーター養成講座の支援へ、若年認知症の方が利用しやすい事業所づくり
家族とのコミュニケーション⇒家族支援のため家族会づくりへ
⇒成果：勉強会の成果でそれぞれの事業所が独自の取り組みをはじめる
課題：認知症早期の方についてのフォローをどうしていくか
- 平成19年度：早期の方の利用できるサービスづくり、他機関との連携・ネットワークの拡大
本人の意向を実現する手伝いへ

わたしたちは「発見した課題」に対して次の年に取り組み、またその中で現れてきた課題に対して取り組んでいます。小さな集まりですが、自分達でできることからやっています。完成ということはありません。この活動をしていてうれしいことは、これまで「認知症」ということにさほど関心のなかった方が、いつのまにか味方になって動いてくれることです。このような仲間が増えていくことが、「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりにつながっていくことを心から願います。

活動名称	「認知症の人から町の人へのメッセージ」
活動要旨	東京都町田市にある9つのグループホームが共同の研修会やホーム別の発表会など、場作りを提供。入居者の創作意欲や地域とのつながりを促す
応募者	町田市グループホーム連絡会 濱田 秋子
連絡先	〒194-0004 東京都町田市鶴間 544 ふよう病院内

(概 要)

町田市グループホーム連絡会は平成15年4月8ヶ所グループホームで結成されました。グループホームの質の向上と認知症を町の人たちに知っていただく活動が町田市と共同で始まりました。

町田市グループホーム連絡会主催・町田市後援のグループホーム報告会は年に2回開かれています。その4回目の9月の町田市フォーラムでの報告会では、それぞれのグループホーム入居者を共に家族、スタッフ、ボランティアで支え、地域の方に支えられ紹介しました。日ごろの趣味活動をスライドで紹介したり、スタッフに支えられて舞台上に立ち踊ったり、思い思いにお話し、演技する場であるファッションショーでは、一番来た衣服を着かみも整えての自分の一番素敵姿を披露する場、輝ける場として参加（80、90歳にしてファッションモデル）となりました。また、それぞれの自分達の日常生活を紹介し、晴れの舞台として生き生きと話されます。

もうひとつの活動は、12月の町田市版画美術館にてのグループホーム入居者の作品展です。日ごろの趣味活動の作品や、写真、手作りのおやつ、野菜、生活の様子が分かるようにそれぞれの事業所が工夫して7つの事業所の個性を出し、入居者が案内、受付をします（受付嬢にも変身します）。

グループホームの認知症の方の生活と認知症になってもこんなにできること、やりたい、生き生き生活できることを地域の皆さんに見ていただきます。地域の方々が応援者として一緒に参加できるのは素晴らしいことです。

<まとめ>

地域の方々に支えられながら、認知症の方が舞台上に立ち自分を表現することができ、ボランティアとして地域の方々が参加していることが増えている現実があります。また地域のお年寄りとして、役割をもって活動できることは喜びと生きがいにつながります。これからも行政とともに事業所が力を合わせて地域に働きかけ、ともに生き支えあうことができることを願っています。これからも続けていきます。

活動名称	～中庭をつかって～ 地域と共につくる認知症の人の環境づくり
活動要旨	地域の人がグループホーム内の中庭の手入れを通じて入居者との交流を図る
応募者	医療法人社団芙蓉会 ふよう病院 グループホームあおぞら 濱田 秋子
連絡先	〒194-0004 東京都町田市鶴間 544 ふよう病院内

(概 要)

地域の方々が主体的に行う毎日の活動の庭の維持管理を通じて、認知症の方々となじみの関係をつくり、認知症を理解し、施設の豊かな住環境づくりに取り組んでいる活動を報告します。

グループホームあおぞらには桜と楓、2つのユニットがあり、その建物を囲むように中庭があり、住居棟の屋上にある花壇、居室の周りにも庭があります。これらの庭は入居者が自由に行き来ができ、植物に触れたり、土に触れたり、季節を感じたり、寛いだり、人との交流ができる大切な場所です。あおぞらの四季折々の花が楽しめるこの庭は中庭コーディネーターと共に地域の方々‘中庭ボランティア隊’がグループホーム開設以来、毎日の日替わり当番によって維持管理を主体的に行っております。

中庭ボランティア隊の活動は月に1回のボランティアミーティングを行い、植物の様子はもちろん、活動中にあった入居者とのエピソードや庭と入居者の様子、その様子に対しての庭づくりのアイデアが話し合われています。

日替わりの当番は植物への水やり、花柄つみ、除草、剪定など様々。これらの作業は中庭ボランティア日誌によって引き継ぎがされ、情報の共有を図っております。花の栽培が得意な方、野菜づくりが得意な方、造園やDIYが得意な方、それぞれがお得意の技術でかかわっております。

この庭での作業の様子は居室のお年寄りからもみることができ、その様子に「いつもご苦労様」「きれいな花が咲いてるね」などと入居者とボランティア隊との会話がうまれ、なじみの関係が築かれています。中庭ボランティア隊の活動はきれいな四季折々の庭を維持管理するだけではありません。庭づくりを通じてグループホームの庭が安心できる和める場であったり、微笑んだり笑ったり、ひとと一緒に過ごす場、輪になる場となることを大切に庭づくりにあたっています。

あおぞらの庭づくりの合言葉は「に和・に笑・に輪・にわづくり」。この活動を継続しつつ、今後はさらに地域やこの庭にかかわっていただける仲間をつくり、さらなる和みや笑い、輪を広げていく庭の環境づくりを進めていきたいと思ひます。

<中庭ボランティア隊の主な活動>

- ・毎日の植物管理（水やり、花柄摘み、施肥、除草、株分け、移植など）
- ・植物による日常の話題づくり
- ・中庭ボランティア日誌の記録にて情報の共有
- ・育てているものは草花から果樹、野菜、ハーブなど様々
- ・入居者と共に行う園芸作業
- ・中庭ボランティアミーティング
- ・グループホーム行事参加
- ・グループホーム家族会参加
- ・地域の方々へのオープンガーデンの開催など

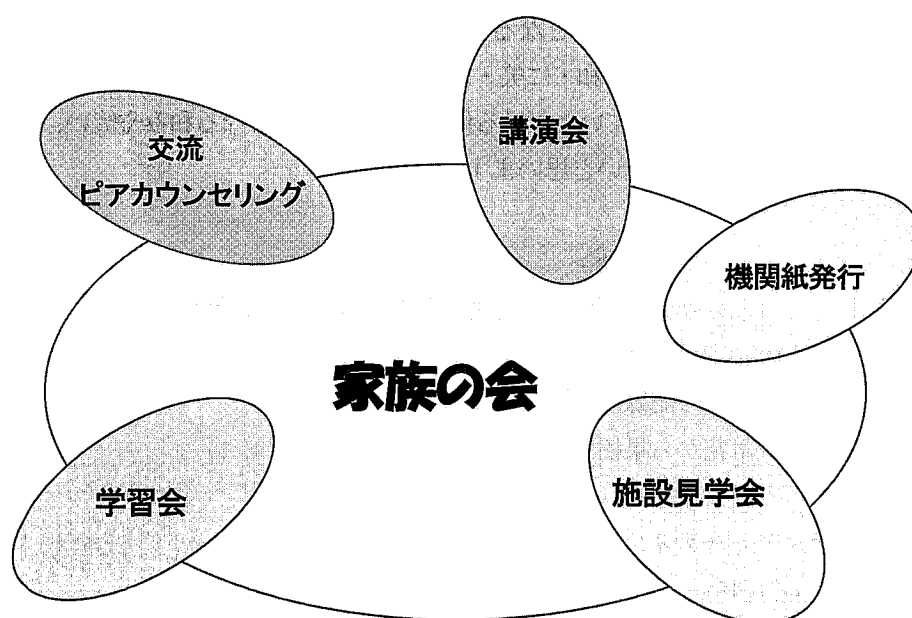
活動名称	「デイホームにんじん・家族の会」～認知症の方と家族の方々の集い～
活動要旨	デイサービス利用者を介護しているの家族が集まり、ひとりの悩みをみんなで分かち合って介護方法を話し合い、その結果利用者本人の精神的安定を図る
応募者	社会福祉法人にんじんの会「家族の会」 担当：南平
連絡先	〒191-0041 東京都日野市南平 4-5-3 ドウエル日南 1 階

(概 要)

平成8年4月1日、日野市に認知症の高齢者を対象としたデイサービスを開所しました。当時は措置の時代で公的サービスを受けられない認知症の方が利用できるサービスはありませんでした。また、社会的にも認知症に対する理解も低く、専門医を受診するという意識もない状況でした。

デイサービスを開所してわかったことは、家族が認知症の高齢者を在宅で介護していく上で心身ともに大きな負担になっているということです。相談する場所もない、自分の時間も取れないというなかでデイサービスの必要性を痛感しました。認知症の方を在宅で支援していくには本人の介護は当然ですが、家族のケアも必要で「家族介護者教室」を定期的に開催してきました。毎回プログラムの中に「交流会」の時間を設けて日頃の悩みや、疑問、体験などの意見交換をしてきました。その中から家族が主体となって家族が抱えている共通の悩みを自分一人の問題ではなく皆で共有していくことで、精神的な負担や、将来への不安を軽減することができればとの思いから「家族の会」を強く望まれる声が上がリ、平成12年10月に発足することとなりました。時期的にも平成12年4月より介護保険制度の導入により今後在宅介護をどのように考えていくかという大きなテーマもあり、この時期の発足には意義のあることでした。

名称は「デイホームにんじん・家族の会」となりました。家族の中から世話人代表1名、世話人3名の方が中心に会の運営にあたり、事務局を社会福祉法人にんじんの会で担うこととなりました。家族の要望をとりあげ、年間数回の活動を実施し満7年目を迎えています。



活動名称	認知症になっても、障害をもっても地域でいきいきと暮らせる為に～小さな田舎町（愛南町）での取り組み～
活動要旨	地域の行政、専門職（医療・福祉）その他一般住民らがネットワークをつくり、認知症になっても障害をもっても地域でいきいきと暮らせるような町づくりを行う
応募者	愛南町、なんぐん地域ケア研究会、南宇和郡医師会、認知症の人と家族の会愛媛県支部（南予地区）、認知症キャラバンメイト、愛南町ボランティア連絡会、南宇和心の健康を考える会、南宇和障害者の社会参加を進める会 担当 長野 敏宏
連絡先	〒798-4102 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平山 846 財団法人正光会 御荘病院

※報告書発行時点で書類のとりまとめが完成せず、
 応募者の希望により掲載を控えさせていただきます

活動名称	～認知症を囲む新たな地域コミュニティゾーンの構築を目指して～
活動要旨	地元根差す多種の地域密着型サービスの展開。グループホーム入居者の地域行事への参加、また小規模多機能型居宅事業所の中に地域交流センターを設け、地域の方が利用することで認知症入居者を自然に受け入れる体制づくりを行う
応募者	社会福祉法人ライフ・タイム・福島 グループホームフクチャンち 所長 森 重勝
連絡先	〒960-8154 福島県福島市伏拝字清水内 25

(概 要)

<はじめに>

平成18年度から地域密着型サービスが始まりましたが、私たちの法人での「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりについてご紹介します。福島市内の3つの地域で事業を展開しています。

- ①松川町ー市中心部からは離れ市最南端に位置し、特別養護老人ホームを中心とし、ショート、デイサービス、ヘルパー、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターから構成される、法人が設立された地域です。
- ②伏拝ー市中心部から南に約8kmの位置にあり、徒歩圏内に駅、バス停、スーパーや飲食店がある住宅街に、グループホーム、認知症対応型デイサービス（共用型）があります。グループホーム（フクチャンち）は福島県で第1号の設立です。
- ③吉井田ー市中心部から南西に約3kmに位置し、通り沿いにはオフィス、商店、車販売会社が立ち並び、通りから一歩踏み入ると住宅が密集し大型スーパーもある活気あるところです。そこに、小規模多機能型居宅介護事業所、居宅介護支援事業所があります。

<取り組みの一部の紹介>

①グループホーム フクチャンち（地域密着型サービスとして）

運営推進会議の委員集めは、町内会に自分たちの想いを強く訴え、自発的に引き受けていただき、会議は町内会の行事として開催されています。施設の「はなれ」は老人会の会場にもなっています。

②小規模多機能型居宅介護事業所ライフ吉井田

平成19年8月設立。当施設の中の「サロンおらげ（福島の方言で“自分の家”）」を地元住民へ開放し、子どもからお年寄りまでの憩いの場となっています。また「地域交流センター」も開放し、ここを中心としたネットワークづくりが展開されています。

<私たちの想い>

まず、「地域密着」と言葉で表現し行動を起こそうとしても、事業所側の想いと地域住民の想いには大きな相違があると思います。ライフ吉井田についても、事業所側の抱く将来の青写真とは裏腹に、地域住民からすると「いったい、ここに何ができるのだろうか」「地域住民に不利益や危害を与えないだろうか」と不安、心配を感じていたようです。そのようなスタートから、私たちには、地域住民の信頼と安心を得るための働きかけはないだろうかとの想いが強くありました。

次に、今後、加速を増す少子高齢社会、中でも、認知症高齢者は飛躍的に増加していきます。いかに、少なくなる若年層が、増加する認知症の方々を支えていく社会になるかが大きなポイントであると考えました。そのためには、一般的にも言われていますが、地域で支援をしていくという雰囲気地域全体に浸透していかなければならないと思いました。その浸透をさせる使命が、私たちにはあるとの想いを意識することから始めました。

Ⅲ. 資 料 編

1. 実施要領

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007

I. 目的

認知症の人の本来の力を活かしてともに暮らす町づくりの活動（以下「町づくり活動」）を全国ではぐくむことを目的として、認知症の人を地域で支える活動を広く全国から募集し、各地域の人々の町づくりの参考となる活動を紹介するものです。

II. 実行委員会

委員長	長谷川和夫 [認知症介護研究・研修東京センター長]
委員	加藤 伸司 [認知症介護研究・研修仙台センター長]
	木内喜美男 [厚生労働省大臣官房審議官 (社会、障害保健福祉、老健担当)]
	高見 国生 [社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事]
柳 務	[認知症介護研究・研修大府センター長] (五十音順)

III. 実施内容

1. 名称

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007

2. 応募者

どなたでもご応募いただけます。「町づくり活動」に取り組んでいる方なら個人、団体も問いません。

3. 募集期間

募集開始：平成19年（2007年） 6月15日

応募締切：平成19年（2007年）10月15日

4. 重複応募・再応募の扱い

①学会等で既発表の内容でも応募いただけます。

②過去の本キャンペーンに応募された方も再応募いただけます。過去のキャンペーンで受賞された方は、受賞内容での再応募はご遠慮ください。

5. 応募方法

あなたが取り組んでいる「町づくり活動」を報告にまとめて「応募用紙」を添付の上お送り下さい。

内容は、以下の項目に沿って整理してください。

<原稿作成>

- (1) 概要※ (2 ページ以内：活動の要約 1 ページ、図表写真 1 ページ)
- (2) 地域の紹介 (2 ページ以内：図表写真を含む)
- (3) 活動の内容 (4 ページ以内：図表写真を含む)
- (4) 活動の成果と今後の展望 (4 ページ以内：図表写真を含む)

※：後日全応募分を「報告書」として作成する際に、活動の要約ページをそのまま転載いたします。活動の要約ページは、上記(2)～(4)の内容を簡潔にお書き下さい。

<書式>

ワープロまたは手書き。いずれも A4 版・縦・横書き・10.5 ポイント(ワープロの場合)で作成してください。

<送付方法>

下記のいずれかで送付ください。

- (1) フロッピーディスク・CD-ROMで送付
- (2) 添付ファイルとしてメールで送付
- (3) 印刷(または手書き)した書類を郵送

<注意事項>

- (1) 個人情報・肖像権などの保護には十分にご配慮ください。
- (2) 応募書類等は返却いたしません。

6. 学びあうモデルの推薦

本キャンペーンは、活動の優劣を競い合うものではありません。

認知症の人と認知症の人を支える人がともに安心して暮らせる町づくりの実践を全国で学びあうためのモデル(以下、「町づくり2007モデル」とします)を決定し、全国に紹介するものです。

「町づくり2007モデル」は、

- ①「認知症を知る」ための取り組みであるか、
- ②認知症の人同士が出会い、話し合い、ともに参加する取り組みであるか、
- ③地域にある生活関連領域の人々が参画・協働する取り組みとなっているか、
- ④地域の人々と行政が協働する取り組みとなっているか、
- ⑤今後あるいは他地域での展開可能性のある取り組みであるか、

この5点を基準として地域活動推薦委員会によって推薦、決定されます。

7. 地域活動推薦委員会

委員長	堀田 力	[財団法人 さわやか福祉財団 理事長・弁護士]
委員	池田 恵利子	[いけだ後見支援ネット 代表]
	江川 紹子	[ジャーナリスト]
	勝田 登志子	[社団法人 認知症の人と家族の会 副代表理事]
	児玉 桂子	[日本社会事業大学 教授]
	辰濃 和男	[日本エッセイスト・クラブ 理事長]
	入村 明	[新潟県妙高市 市長]
	藤井 克徳	[きょうされん 代表]
	村上 達也	[茨城県東海村 村長]
	村田 幸子	[福祉ジャーナリスト]
	吉田 一平	[ゴジカラ村 代表]

(五十音順)

8. 発表・報告

1) 活動発表会

①平成20年(2008年)3月予定

②発表会は「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」と共催で、東京都内で行います。また、受賞団体の自治体首長へ最終推薦結果と発表会についてご案内します。

③発表会当日、受賞団体の壇上での発表の他、会場においてポスターセッションも行う予定です。

2) 報告

①本キャンペーンにお寄せいただいた「町づくり活動」は、同じ課題に取り組んでおられる方々の参考に供するため、「報告書」を作成します。

②町づくりの実践の学びあいにつながるよう、ホームページでも「町づくり活動」を紹介します。

③推薦活動事業実践者の了解を前提にマスコミ等に紹介することがあります。

9. 応募・問い合わせ先

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西1-12-1

認知症介護研究・研修東京センター

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007 事務局

電話：03-3334-3073 (FAX兼用)

電話受付時間：月～金(祝除く) 10:00～16:00

E-mail: machican@dcnet.gr.jp

<http://www.dcnet.gr.jp/campaign/>

10. スケジュール概略

平成19年 6月15日 募集開始

〃 10月15日 応募締切

〃 11月30日 第一次推薦委員会

平成20年 1月15日 最終推薦委員会

〃 3月 1日 発表会（「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会
と同時開催）

◆本キャンペーンのホームページに情報を随時掲載します。

<http://www.dcnnet.gr.jp/campaign>

IV. 主催等

主 催 認知症介護研究・研修東京センター

認知症介護研究・研修大府センター

認知症介護研究・研修仙台センター

共 催 社団法人 認知症の人と家族の会

協 賛 住友生命保険相互会社

後 援 厚生労働省

国際長寿センター、(財)さわやか福祉財団、

(社)成年後見センター・リーガルサポート、(社福)全国社会福祉協議会、

全国知事会、全国町村会、(NPO)全国認知症グループホーム協会、

全国農業協同組合中央会、(社)全国老人保健施設協会、

宅老所・グループホーム全国ネットワーク、(社)日本医師会、

日本介護支援専門員協会、日本介護福祉学会、(社)日本介護福祉士会、

(社)日本看護協会、日本高齢者虐待防止学会、(社)日本社会福祉士会、

日本生活協同組合連合会、(社)日本精神科看護技術協会、

(社)日本精神科病院協会、(社)日本精神保健福祉士協会、日本地域福祉学会、

日本認知症ケア学会、日本放送協会、日本療養病床協会、日本老年精神医学会、

福祉自治体ユニット、(財)ぼけ予防協会

(五十音順)

2. 推薦基準

(地域活動推薦委員会資料より)

① 「認知症を知る」ための取り組み

地域の多様な人々が認知症と支援について理解を広めるための先進的な取り組みがなされている。

- ☐ 理解を広げるための直接的取り組みではないが、認知症の人と支援についての理解を町に広げるインパクトを持っている。
- ☐ 理解を町に広げるための取り組みが行われており、これまでになく特徴的である。
(特徴的：対象、方法、活動形態等に特徴がある)
- ☐ 理解が広がった成果が実際に出ている。

② 認知症の人同士が出会い、話し合い、ともに参加する地域の活動

地域の認知症の人同士が出会い、自分たちの声や力を出しながら、参加する地域での活動が取り組まれている。

- ☐ 認知症の人同士が出会い、話し合う場(機会)を地域の中でつくっている。
- ☐ 認知症の人自らが活動に参加している。
- ☐ 認知症の人の参加や活動を支援するための配慮や工夫がなされている。
- ☐ 認知症の人の声が広く地域に発信されている。

③ 地域にある生活関連領域の人々が参画・協働する取り組み

地域での住民生活に関連した多様な業種(商店、交通機関、金融機関など)や関係者が加わった先進的な活動が展開されている。

- ☐ 地域にある生活関連領域の業種・関係者が主体的に活動に参加している。
- ☐ 参画している生活関連領域の業種・関係者がこれまでになく特徴的である。
- ☐ 生活関連領域の特徴を活かして利用者や家族を支援した成果が実際に出ている。
- ☐ 生活関連領域の人々の参加や協働を推進するための工夫がなされている。

④ 地域の人々と行政が協働する取り組み

地域の人々と行政とが協働しながら、共に暮らす町づくりを進めている先進的取り組みがなされている。

- ☐ 地域の人々と行政が協働して活動を展開している。
- ☐ 取り組み内容が特徴的である。(特徴的：対象、方法、活動形態等に特徴がある)
- ☐ 町づくりに向けて行政が市民に積極的に働きかけている
- ☐ 町づくりに向けて市民が行政に積極的に働きかけている

⑤ 今後や他地域での展開可能性

今後さらに継続・発展する可能性や他の地域でも展開する可能性がある内容や方法である。

- ☐ 今後さらに継続・発展していく可能性がある。(可能性：計画、体制、実行力)
- ☐ どの地域でも求められている取り組みである。
- ☐ 他の地域が実情に応じて実施しやすい取り組みである。

3. 発表会について

平成20年3月1日(土) 開催 於：東京、全社協・灘尾ホール

表 彰：「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長 長谷川 和夫

受 賞：

「認知症になっても安心して暮らせる
マンション」

中銀インテグレーション株式会社

(東京都中央区)

管理業務部部长 大谷 清美



受 賞：

「当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を
目指して」

社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家
(高知県吾川郡いの町)

高橋 須美(社会福祉法人 ふるさと会 中追の里施設
長)



受 賞：

「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」

東京都立拝島高等学校

(東京都昭島市)

教諭 「総合的な学習の時間」担当

手塚 比目古



受 賞：

「この町にこんな病院があつたらいいな(地域にとけ
込んだ認知症センターの取り組み)」

財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター

(オアシス)

(滋賀県犬上郡豊郷町)

センター長 成田 実



受賞：

「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』」

あしがらシニアキャンプ実行委員会（神奈川県南足柄市・足柄上郡5町）／社団法人 日本キャンプ協会（東京都渋谷区）

山本 恵子（神奈川県足柄上保健福祉事務所 保健予防課 主査）



受賞：

「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部（富山県富山市）

副代表 中島 禮子



受賞：

「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」

社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや

（東京都町田市）

理事長 池田 敏彦



受賞：

「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」

NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク

（岐阜県高山市）

理事長兼グループホーム管理者 高井 道子



◇一緒に上京した施設の入居者、スタッフとともに

附:活動経過

年月日	主なイベント	広報
平成19年		
5月21日	実行委員会	
6月15日	キャンペーン告知プレスリリース キャンペーン募集開始	・「参加のしおり」 ・ホームページ掲載
10月15日	応募締切	
11月30日	第一次推薦委員会 於：認知症介護・研究研修東京センター	
平成20年		
1月15日	最終推薦委員会（地域活動推薦委員会） 於：虎ノ門パストラルホテル	
1月17日	最終推薦結果プレスリリース	・ホームページ掲載 推薦結果発表
3月 1日	「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会 於：灘尾ホール 第4回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007発表会	・報告会当日用冊子

[事務局]

事務局長	森重 賢治（認知症介護研究・研修東京センター）
事務局次長	澤 春生（財団法人 住友生命健康財団）
	森坂 清（認知症介護研究・研修大府センター）
	堀村 和弘（認知症介護研究・研修仙台センター）
事務局員	永田久美子（認知症介護研究・研修東京センター）
	小野寺敦志（認知症介護研究・研修東京センター）
	諏訪さゆり（認知症介護研究・研修東京センター）
	上村 通夫（認知症介護研究・研修東京センター）
	松崎 勝巳（認知症介護研究・研修東京センター）
	多胡 岳志（認知症介護研究・研修東京センター）
	富島 理恵（認知症介護研究・研修東京センター）
	大上 真一（認知症介護研究・研修東京センター）
	中島民恵子（慶應義塾大学大学院）
	渡辺 紀子（認知症介護研究・研修東京センター）
	有村瑠美子（認知症介護研究・研修東京センター）
	大塚 愛（認知症介護研究・研修東京センター）

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007 報告書
2008（平成20）年3月

編集：社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター内
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007 事務局
〒168-0071 東京都杉並区高井戸西 1-12-1
電話：03-3334-3073

発行：社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター
〒168-0071 東京都杉並区高井戸西 1-12-1
電話：03-3334-2173